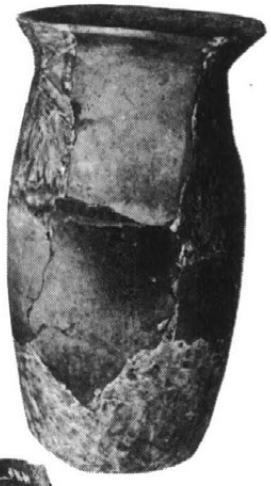
12

13

14



15

16

1号竪穴（12）　9住伏甕（13）　4住埋甕炉（14）　5住（15）　7住埋甕炉（16）

図版二二　出土石器

図版二三　出土石器

城の腰遺跡

目　　次

目　次 …… (3)
挿図目次 …… (5)
表目次 …… (6)
図版目次 …… (7)

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… (8)

第1節　発掘調査の経緯 …… (8)
第2節　調査の組織 …… (8)
第3節　発掘日誌 …… (9)

第Ⅱ章　遺　　構 …… (11)

第1節　縄文時代 …… (13)
（1）　第9号住居址 …… (13)
第2節　弥生時代 …… (15)
（1）　第1号住居址 …… (15)
（2）　第3号住居址 …… (15)
（3）　第4号住居址 …… (18)
（4）　第5号住居址 …… (18)
（5）　第6号住居址 …… (18)
（6）　第7号住居址 …… (20)
（7）　第8号住居址 …… (20)
（8）　第11号住居址 …… (23)
（9）　第12号住居址 …… (23)
第3節　奈良時代 …… (24)
（1）　第2号住居址 …… (24)
（2）　第10号住居址 …… (25)
第4節　中　　世 …… (27)
（1）　堀　　址 …… (27)
（2）　第1号竪穴・第2号竪穴 …… (28)
（3）　第1号窖址 …… (31)

第Ⅲ章　遺　　物 …… (33)

第1節　土　　器 …… (33)
第2節　内耳土器・中世陶磁器 …… (53)
第3節　石　　器 …… (53)
第4節　土 製 品 …… (61)
第5節　石 製 品 …… (61)
第6節　鉄 製 品 …… (62)

第Ⅳ章　ま と め …… (63)

挿 図 目 次

第１図　地形及び遺構配置図 …… (11)
第２図　第９・８号住居址実測図 …… (14)
第３図　第１号住居址実測図 …… (16)
第４図　第１号住居址埋甕炉断面図 …… (16)
第５図　第３・４号住居址実測図 …… (17)
第６図　第３号住居址埋甕炉断面図 …… (19)
第７図　第５号住居址実測図 …… (19)
第８図　第５号住居址埋甕炉断面図 …… (20)
第９図　第６号住居址実測図 …… (21)
第10図　第６号住居址埋甕炉断面図 …… (21)
第11図　第７号住居址実測図 …… (22)
第12図　第７号住居址埋甕炉断面図 …… (21)
第13図　第11号住居址実測図 …… (23)
第14図　第12号住居址実測図 …… (24)
第15図　第２号住居址実測図 …… (26)
第16図　第10号住居址実測図 …… (27)
第17図　堀址実測図 …… (29)
第18図―１　堀址断面図 …… (31)
第18図―２　堀址断面図 …… (31)
第19図　第１～２号竪穴・第１号窖址実測図 …… (32)
第20図　縄文式土器実測図 …… (33)
第21図　縄文式土器拓影　９住(１～４)…… (34)
第22図　弥生式土器実測図　１住(１～６)　３住(７～12)…… (38)
第23図　弥生式土器実測図　３住(13～18)　５住(19～20)　６住(21)
７住(22～28)…… (42)
第24図　弥生式土器実測図　８住(29～34)　11住(35)…… (44)
第25図　弥生式土器拓影　１住(１～５)　２住(６～７)　３住(８～13)
４住(14)　５住(15～16)　７住(17～22)　８住(23)…… (45)
第26図　土師器実測図　２住(１～７)…… (50)
第27図　土師器・須恵器実測図　２住(８～12)　10住(13～14)　グリット(15)…… (51)
第28図　土師器実測図　グリット(16～18)…… (52)
第29図　内耳土器・中世陶磁器実測図 …… (54)

第30図　石器実測図　1住(1～5)　2住(6～8)　3住(9～11) …… (56)
第31図　石器実測図　3住(12～13)　4住(14～17)　6住(18)　7住(19～23) …… (57)
第32図　石器実測図　7住(24～25)　8住(26～30)　12住(31)　第2号竪穴周辺(32) …… (58)
第33図　石器実測図　堀(33～44) …… (59)
第34図　石器実測図　堀(45～47)　グリット(48～52)　2住(53)　7住(54) …… (60)
第35図　土製品実測図 …… (61)
第36図　石製品実測図 …… (62)
第37図　鉄製品実測図 …… (62)

表　目　次

第1表　主要弥生式土器一覧 …… (35)
第2表　主要土師器・須恵器一覧 …… (46)
第3表　主要石器一覧 …… (53)

図 版 目 次

図版 1　遺跡全景
図版 2　遺　　構
図版 3　遺　　構
図版 4　遺　　構
図版 5　遺　　構
図版 6　遺　　構
図版 7　遺　　構
図版 8　遺　　構
図版 9　遺　　構
図版10　遺　　構
図版11　遺　　構
図版12　遺　　構
図版13　遺　　構
図版14　遺物出土状況
図版15　遺物出土状況
図版16　遺物出土状況
図版17　遺物出土状況
図版18　遺物出土状況
図版19　遺物出土状況
図版20　出土土器
図版21　出土土器
図版22　出土石器
図版23　出土石器
図版24　出土陶磁器・土製品・石製品・鉄製品

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城，山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字で言う眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出，宮の原，中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢，白沢，南小出部落が，昭和54年度は諏訪形区，昭和55年度は諏訪形，井の久保部落が該当しました。

昭和57年度は諏訪形区の鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡の4カ所が該当し，工事着工以前に緊急発掘調査を実施しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では，その件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，城の腰遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかりました。

第2節　調査の組織

城の腰遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長	
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長	
委員	赤羽映圭	伊那市教育委員会委員長	
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長	
〃	石倉俊彦	〃	社会教育課長
〃	柘植晃	〃	〃　課長補佐
〃	武田則昭	〃	〃　係長
〃	沖村喜久江	〃	〃　主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	日本考古学協会会員

調　査　員　　小木曽　　清　　宮田村考古学友の会会長
〃　　小　池　　孝　　日本考古学協会会員

第3節　発掘日誌

昭和57年9月21日　晴　本日は横吹遺跡より発掘用テント及び発掘器材を運搬し，テントを建てる。テントは東西に長く，3張り並べて張り，その場所が広く使用できるように考える。現場の器材が楽に持ち出せるように道具用のテントは最も東側の1張りとする。テントを張る場所は安岡城北側の土塁直下とする。

昭和57年9月22日　晴　本日より発掘調査を開始する。発掘調査にかかる前に調査の基準となるグリットを設定する。グリット名は東から西へA～Z，南から北へ1～17と，1辺を2m×2mとし，A1グリットより掘り始める。掘り始めてみると東西に落ち込みがみられ，この長い落ち込みの規模や長さより察して堀と判明する。

昭和57年9月24日　晴時々曇，雨　一昨日，検出された堀址のプラン確認に全力を注ぎ込む。

昭和57年9月25日　晴午後時々雨　堀址を拡張し，プラン確認を実施する。本日夕方までかかって一応堀址のプランが把握できた。

昭和57年9月27日　晴　堀址の掘り下げを実施する。掘り下げた段階で堀址の最末端部は東側の段丘崖へと抜け出ている模様である。

昭和57年9月28日　晴　堀址の掘り下げを実施する。

昭和57年9月29日　晴時々曇　堀址の掘り下げを実施する。

昭和57年9月30日　晴時々曇　堀址の掘り下げを実施する。

昭和57年10月1日　曇　堀址の掘り下げを実施する。堀の北西の位置にグリットを設定する。グリット名は前のをもとにしてつける。グリットの掘り下げを実施した結果，各所に住居址が確認された。

昭和57年10月2日　午前中晴午後雨　堀址の掘り下げを連日実施してきたが，本日をもって一応終了する。堀の肩を清掃していると，北側に柱穴群，竪穴，

発掘風景

窖址が検出され，プランを確認する。プランが確認できたので掘り下げを進める。午後は雨がかなり降ってきたので，テント小屋にて土器洗いと注記を実施する。

昭和57年10月４日　晴　柱穴群，竪穴，窖址を完掘し，清掃を終え，写真撮影を実施する。連日来，確認されている住居址のプラン確認に全力投球をする。堀の写真撮影終了。

昭和57年10月５日　晴時々雨　第１号住居址付近の拡張でプランを確認する。第２号～６号住居址はすべて切り合い関係になっており，狭く掘ったけれども，本日いっぱいかかって６軒の住居址のプランが確認できた。

昭和57年10月６日　晴時々雨　第１～６号住居址の完掘及び清掃を実施する。

昭和57年10月７日　晴時々曇　前日ほぼ仕上がった第１～６号住居址の見直しと清掃をして，写真撮影を終了する。第６号住居址の西側に住居址が発見され，第７号住居址と名づけ，そのプラン確認のため拡張を実施する。

昭和57年10月８日　曇時々雨　土器洗浄を行う。

昭和57年10月12日　晴　第７号住居址の拡張とプラン確認を全作業員を動員して実施する。

昭和57年10月13日　晴　第７号住居址の西側に住居址を２軒発見し，第８号住居址，第９号住居址とする。第４号住居址の北側に住居址を発見し，第10号住居址とする。

堀の２号・３号ベルト写真撮影及び実測完了。

昭和57年10月14日　晴　第７，８，９，10号住居址の掘り下げ実施，堀の１号ベルトの写真撮影及び実測完了。

昭和57年10月15日　晴時々曇　第７，８，９，10号住居址の掘り下げをほぼ終了する。

昭和57年10月18日　晴　前々日来掘り続けてきた第７～10号住居址を清掃し，写真撮影を終える。第11号住居址が発見され，掘り下げていく。

昭和57年10月19日　第11号住居址の清掃，写真撮影完了，堀址，柱穴群，竪穴，窖址の実測完了。

昭和57年10月20日　晴　竪穴の貼床をはずすと竪穴が発見され，掘り進め写真撮影及び実測完了。

昭和57年10月21日　晴時々曇　第１～５号住居址の実測及び埋甕炉の写真撮影，実測完了。

昭和57年10月22日　晴時々曇　第６～７号住居址の実測及び埋甕炉の写真撮影，実測完了。

昭和57年10月23日　晴時々曇　第８～９号住居址の実測完了。

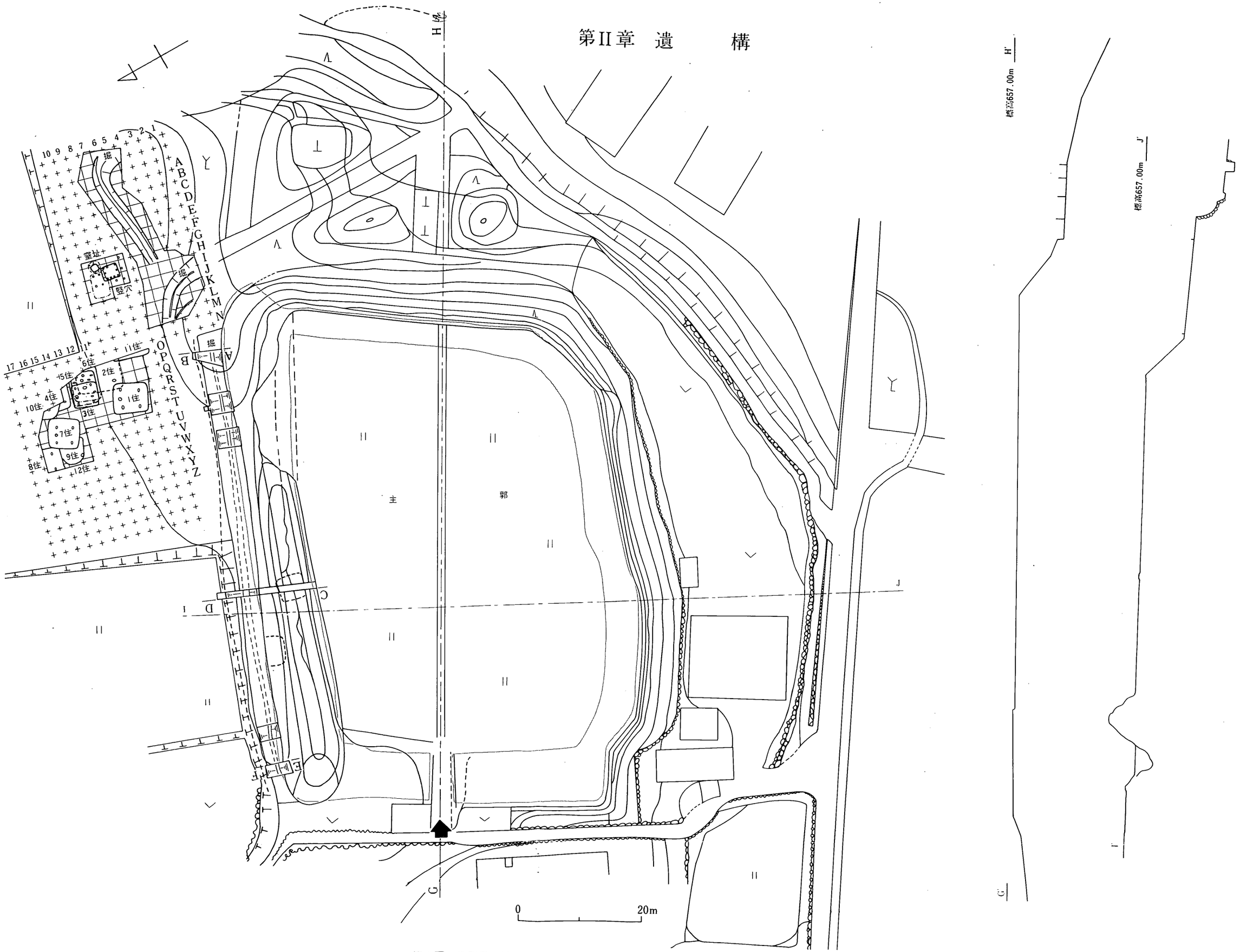
昭和57年10月25日　晴時々曇　第10号～11号住居址の実測完了，第12号住居址を発見し掘り下げを開始する。

昭和57年10月26日　晴時々曇　第12号住居址の掘り下げ完了，写真撮影，実測完了。

昭和57年10月27日　全測図の作製　あとかたづけをする。

昭和58年１月～２月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和58年３月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）



第１図　地形及び遺構配置図

第1節　縄文時代

（1）第9号住居址（第2図，図版2）

この住居址は城の腰遺跡の北縁に多くの住居址と共に検出された中の一つである。遺構の東側半分は弥生時代の住居址である第7号住居址に切られており，北側は同じく第8号住居址が接しており，第12号住居址の上に重なって構築されているきわめて複雑な遺構である。

プランは少しくずれた隅丸方形のものでローム層へ掘り込んだ竪穴住居址である。軸の方向は不明である。規模は南北4m50cm，東西も同数値であると思われる。壁は西と南が残っており，ほぼ垂直に近い角度で，高さは西で30cm，南は20cmをみる。

床面は主として貼り床であり，中央より北側はロームと黒土の混じりの土を叩いてあるがあまりよくない。中央と南の面は黒褐色の混合土できわめて粗雑に仕上げており軟らかいところもみかける。

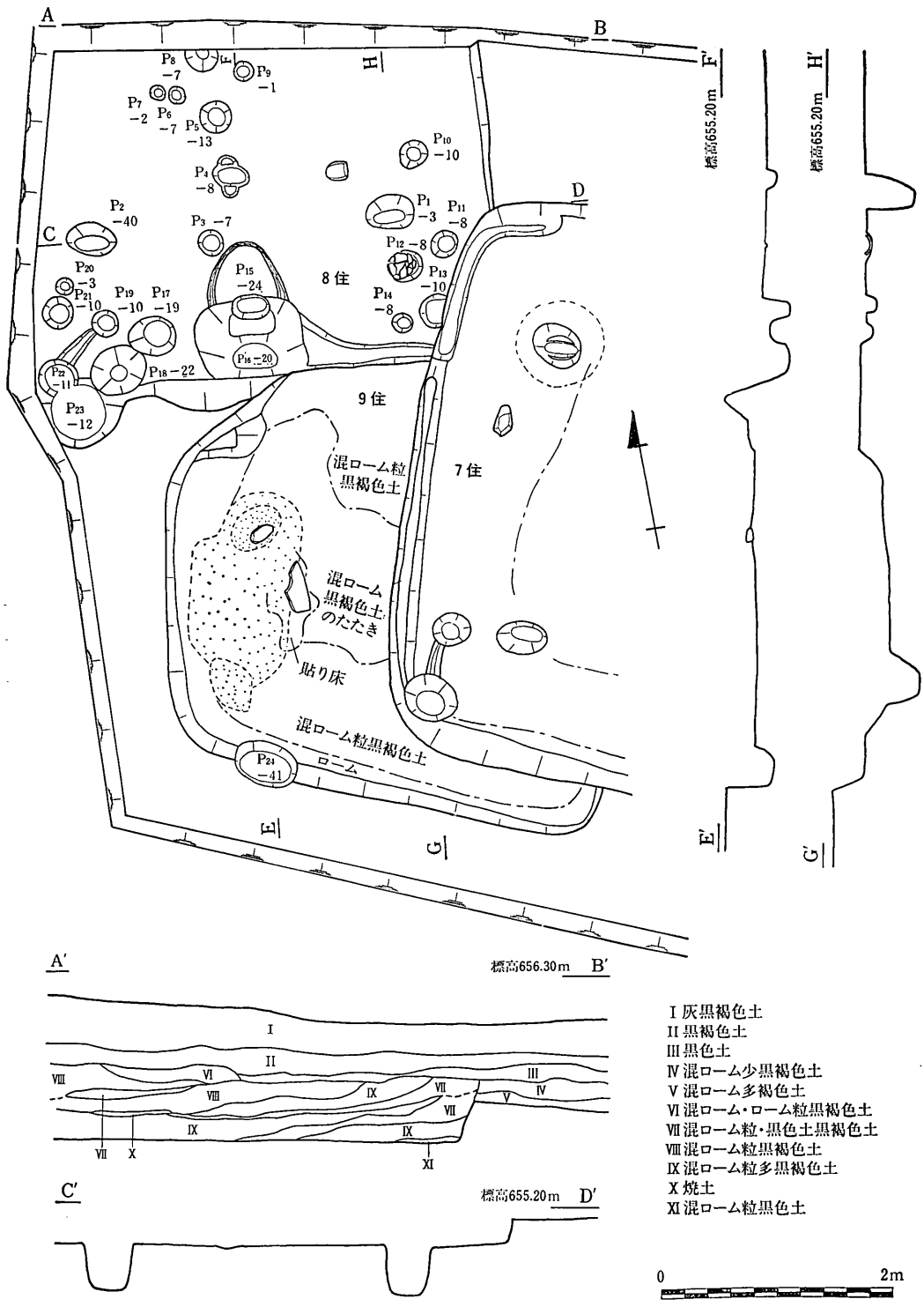
西壁近く，南北1m80cm，東西1mの楕円形を呈した焼土が検出され，その中に50cmと40cm大の自然石が放置された如くにある。硬砂岩で火に熱められていたとみえて石全体が変色して赤くなっている。表面は磨いてあり，わずかではあるが使用痕が認められる。これは石器類を研いだものと思われる。

柱穴は南西の壁に楕円形のものがある。60cm×35cmで深さ41cmある。この柱穴と思われるピットは本址のものであるかどうかは不明である。

北西の隅近くに，中形の甕形土器が横軸状に出土した。この土器は口縁部から頸部にかけて欠損している。推定器高は30cm，胴の最大径18cm，底部の径は10cmのもので，他の類似品をみて判断するにたぶん口縁部はキャリパー状の土器であると思われる。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈し，器縁全体にヘラに依り調整を施してあり，隆帯と懸垂文とを縦位と斜位につけてある。この文様の特長は縄文中期後葉に属するものである。

焼土の近くから深鉢の小土器片，打製石斧，敲打器が小数ではあるが出土した。以上の出土遺物をみて本住居址は今回この遺跡で検出された12軒の住居址のうちで，唯一つ縄文中期後葉に属しており，城の腰遺跡の時代的な幅をさかのぼらせてくれる唯一の決め手となるであろう。

この住居址は隣りの横吹遺跡と同様な人たちが構築したのではなかろうか。縄文中期人たちの行動範囲を推測させてくれる。本住居址は縄文中期後葉のものと思われる。　（根津清志）



第2図　第9・8号住居址実測図

第2節　弥生時代

（1）　第1号住居址（第3～4図，図版3）

表土面より50cmくらい下ったローム層面を掘り込んで構築した住居址であって，住居址群中最も南側に位置している。ローム層の基盤が北から南へ傾斜しているために当然ながら，北壁が高くなっている。

規模は南北5m85cm，東西5m8cmを有し，南北にやや長い隅丸方形状を呈している。壁は全周し，四壁ともに垂直に近く，凹凸が少ない状況を呈している。壁高は前述したように北が最も高く，その数値は70cmに達している。他の壁は40cm前後を測定できる。

床面はやや凹凸はあったが，ローム層のかたい叩きとなっており，一部分は貼り床を形成していた。南東の一角は後世の攪乱の跡が生々しかった。南壁の西から西壁の南にかけて幅10cm前後，深さ10cm前後の周溝が部分的に回わっていた。ピットは数知れず多く検出されたが，主柱穴となりそうなのはP_1・P_2・P_3・P_4であり，4本主柱穴の形態を成している。主柱穴は4本とも東西に細長く穿けてある。床面中央部付近で南北にほぼ直線に並ぶ小ピットは一種の仕切りに使用された可能性が強いと思われる。炉は埋甕炉の形態を有し，正位の状態で埋まっており，底部付近は欠損していた。甕の大きさは直径15cmくらいであって，ほぼ一般的であり，甕の外面及び周囲は赤々と焼けて，焼土独特の色を浮き出させていた。この甕は弥生時代終末期と位置づけられ，次の古式土師器への過渡期と思われる。したがって本址は弥生時代終末期に位置づけられると思われる。（飯塚政美）

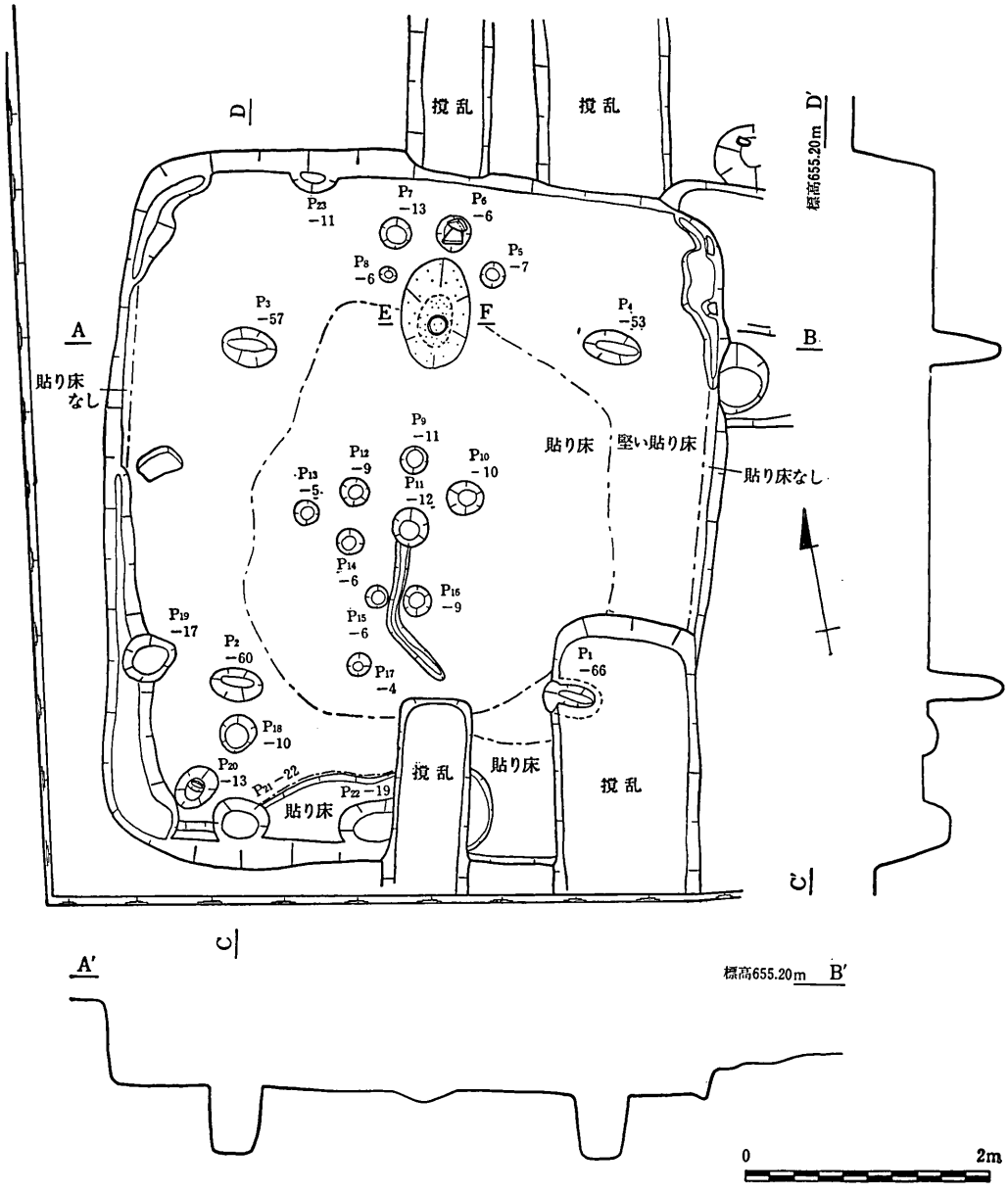
（2）　第3号住居址（第5～6図，図版4）

本址は遺跡の中央部より検出された住居址群中の一つである。北には第4号住居址が接しており，第5号住居址と第6号住居址と重なり合っており，又南は第2号住居址の一部と切り合っている。

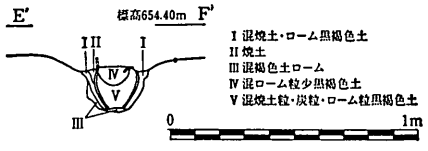
プランは隅丸方形を呈し，規模は南北4m，東西4mを測る。軸方向はN—10°—Eを指す。壁は南側の一部がない。西は少し外傾し，北側は垂直に近い角度である。壁高は西側で50cm，北側で30cmを測り，東はほとんど無い。

床面はおおむね平坦であるが全般的に軟らかく多少小石混じりである。柱穴が楕円形のものが等間隔に4カ所検出された。それはP_1～P_4である。大きさは平均30cm×20cm，深さは50cmである。炉は北側の東西の柱穴の中間に発見された埋甕炉である。径80cm，深さ30cm位の大きな穴を掘ってその中へ，口縁と底部の欠損した甕（径40cm，高さ20cm）大のものを埋めて，その中へ一回り小さい同様なものを二重に埋め込んで作ってある。火を燃したあと，残炭の保温状態をよくするために，このように作られたものと考えられる。この炉を中心に南北1m程の範囲で床面上に焼土と灰が散見する。

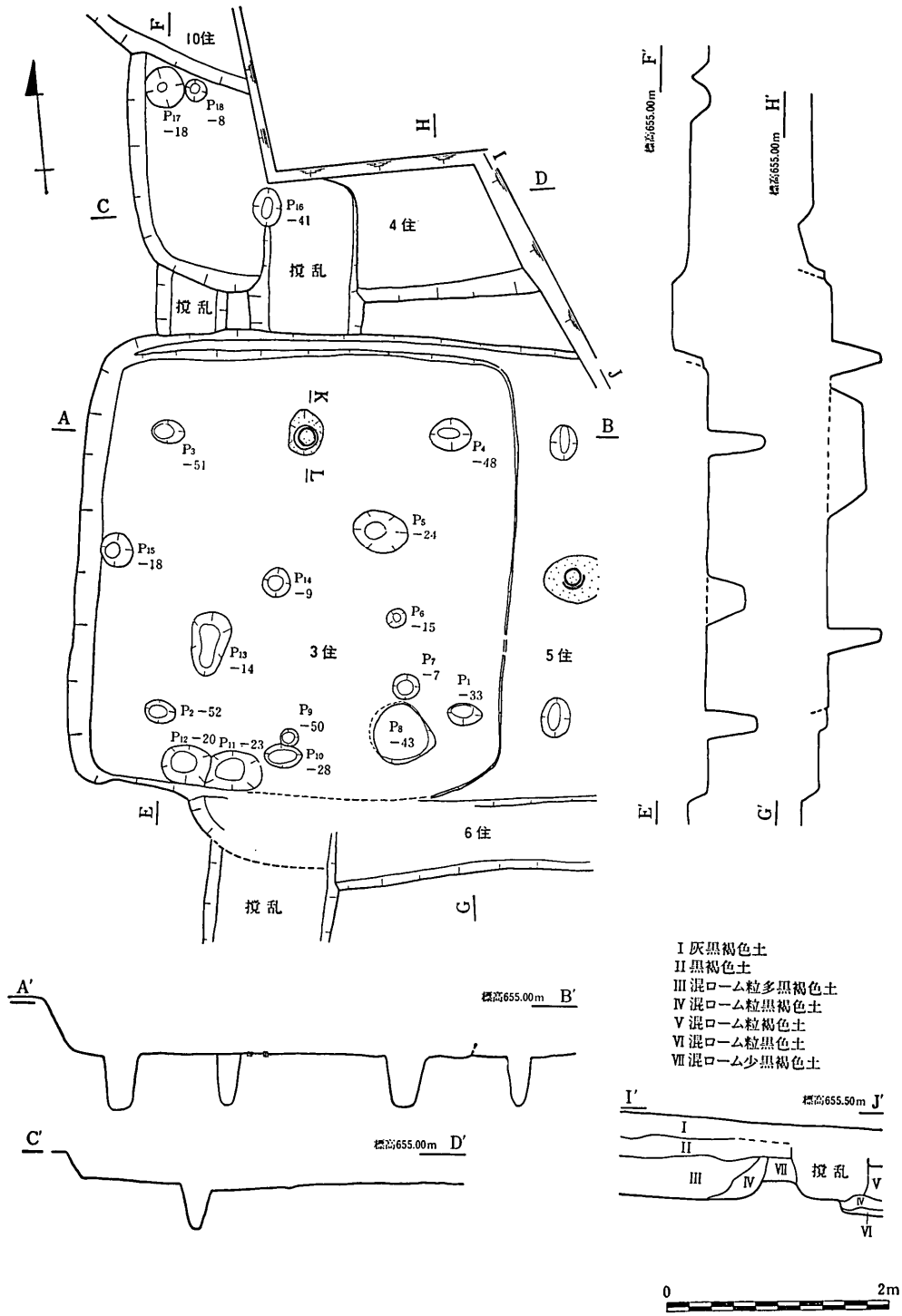
この住居址は重り合っている他のものの最上位にあり，重複のわりにその保存状態は良好である。炉付近の床面上より，甕・高坏の破片が小量出土した。東側の壁の直下より甕の破片が2個体分程出土した。その近くより，自然石の一部を加工した石包丁の中形のものと，僅かに磨いた石斧が出土した。これらの遺物からみて弥生時代末期の住居址と思われる。（根津清志）



第3図　第1号住居址実測図



第4図　第1号住居址埋甕炉断面図



第5図　第3・4号住居址実測図

（3） 第4号住居址（第5図，図版4）

城の腰遺跡の中央の東寄りから検出され，ローム層へ掘り込んだ竪穴住居址である。東と北は用地外のために，調査はできず，北側の一部は第10号住居址により切り取られている。遺構の中央は耕作により，幅1m程攪乱されて破壊されている。プランは隅丸方形で西南の隅のみ残っている。規模は用地外に多く遺構がはみ出ているので不明である。壁は西側と南側の一部が残り，西側はかなり外傾している。その高さは西で25cm，南は15cmを測る。

床面はわずかに西が高く，東は低く，一部攪乱もあり，軟弱で小さい凹凸が出来ている。柱穴は中央より南寄りの所に1カ所楕円形に掘られ，南北30cm，東西25cm，深さ41cmである。西の壁の下に大小2つピットが並んで検出されたが，本址のものかは不明である。この遺構は全体の$\frac{1}{5}$ぐらいしか発掘ができず，炉址，柱穴等の配置は明らかでない。わずかであるが，床面より甕の破片が出土した。これによると，弥生時代後期の住居址であると思われる。　（根津清志）

（4） 第5号住居址（第7～8図，図版4）

本址は城の腰遺跡の中央の東寄りで重なり合っている遺構の一つで，ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。北東の隅の部分は用地外であるために発掘は行われなかった。本址の上層には，第6号住居址があり，下層位には第3号住居址が掘られていて，三重に重なり複雑な切り合いをなしている。プランは隅丸方形で，その規模は南北4m25cm，東西5m前後を測る。主軸方向は概ね，Eの方向を指す。壁は北側と東南の一部のみが残存している。北側はわずかに外傾し，その高さは50cm，東南の隅は20cmである。床面は平均軟くあまりよくない。柱穴は等間隔に4カ所あり，それは P_1～P_4 で楕円形に掘ってあり，径は40cm×30cm，深さ40cmぐらいである。

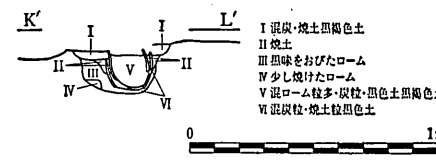
北の壁直下と北西の隅と南西の隅近くに小範囲であるが，火を燃した跡があり，単に焼土が厚く残っている。中央より西のところに，大きな木の炭化物が焼土と共に床面より浮き上った状態で出土した。炉は東側の南北に連なる柱穴の中間に検出された埋甕炉である。東西に深さ30cmの穴を掘り，その中へ口縁と底部の無い甕形土器の大きな壊れたものを組み合せて，炉に仕上げてある。一部分は二重の構造になっている。炉付近の床面上より土器片が小量出土している。これらの遺物をみて，本址は弥生時代後期の住居址であると思われる。　（根津清志）

（5） 第6号住居址（第9～10図，図版4）

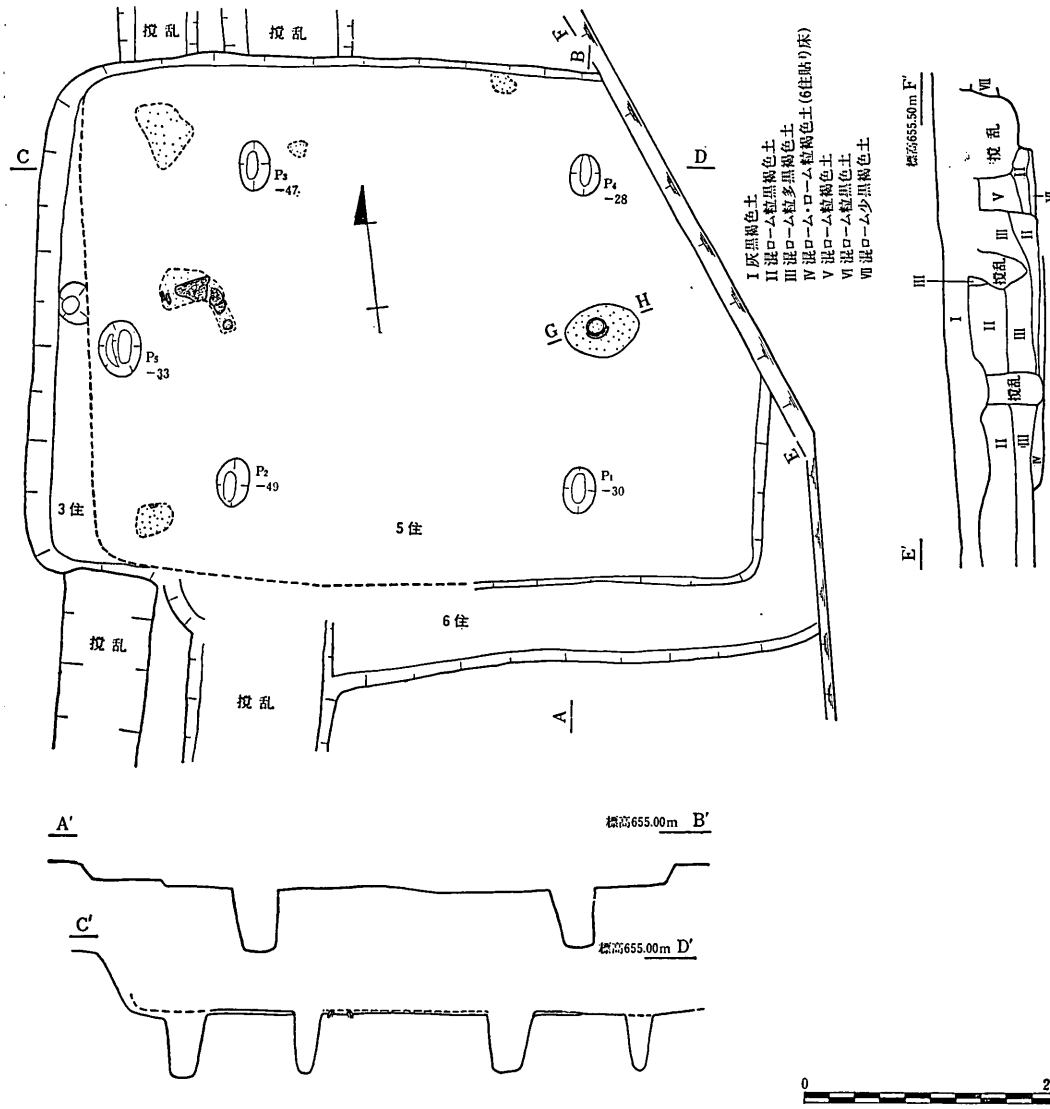
本址は遺跡地中央の東寄りに検出された住居址群中の一つである。東側は用地外のために一部調査は不能であった。本址の西側は第3号住居址と第5号住居址とが三重に重なり合っている。プランは隅丸方形のもので，規模は柱穴と一部残っている壁などより割出して推測で南北，東西共に4m50cm内外である。主軸方向は概ねEの方向を指す。壁は南の一部と，西南の隅が残っており，垂直に近い角度で低く，あまりよくない。床面は全般的に貼り床で，わずかに西に傾いていて，小砂利混じりに仕上げてあるが，残っている部分は中央部と炉の付近だけである。他は切り合いのためか少し軟かく明確ではない，柱穴は楕円形のものが4カ所等間隔に検出された。それは P_1～P_4 である。20cm×40cm，深さ平均40cmを測る。炉は東側の南北に連なる柱穴の中央部に東西80cm，南北50cm大で，深さ50cmの穴を掘ってその中心部に口縁が少し欠損し，底部の無い胴部の張った甕形土

器を埋め込んだ埋甕炉である。炉を中心に付近は焼土がかなり広がり，床面が堅くなっている。この住居址は，三つの遺構が重なり床面が一部攪乱された状態なので，遺物は覆土の中のものは本址のものかどうかは疑わしい点もある。甕の破片が，床面上炉の付近と中央より出土した。石器は小型円形状石器が東側より出土した。以上遺物よりみてこの住居址は弥生時代後期に属するものである。住居址が三軒重なっているために切り合い等推測により測定したが，柱穴並びに炉址は明確であり，本址はそのわりに，保存は良好であると考えられる。

（根津清志）



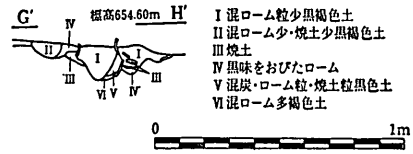
第6図　第3号住居址埋甕炉断面図



第7図　第5号住居址実測図

（6）　第7号住居址（第11～12図，図版5）

本址は城の腰遺跡の北縁に検出された住居址群中の一つである。東側は，第10号住居址に接し，西側は第8・9・12号住居址と重なっている。プランは隅丸方形で，その規模は南北5ｍ5㎝，東西5ｍ5㎝を測る。主軸方向はN—10°—Eを指す。壁はほとんど垂直に近い角度で全周が明確である。その高さは四壁とも50㎝である。



第8図　第5号住居址埋甕炉断面図

床面は平坦で大部分貼り床であり，特に遺構の中心部，柱穴の内側は非常に固く，小砂利混じりでよく叩いた貼り床を厚目に仕上げてある。北と東南の隅は貼り床はなく普通の床面状になっている。

柱穴は4カ所検出された。楕円形で上開に掘られているP_1～P_4は，大きさは平均して，50㎝×40㎝，深50㎝である。柱穴付近は床面が盛り上るように厚く，堅くなっている。周溝は壁の直下に西側と東側の一部に幅のせまい浅目のものが掘られている。東北の隅と西南の隅と北側の壁に添って小形のピットが3カ所並んであるが，このピットはこの住居址の建築上関係が深いものと考えられる。中央にも同様のものがある。炉は北側の柱穴の中央に検出された埋甕炉で，口縁径15㎝，底部の抜けた小形のものを使用してある。この炉は床面をわずかに凹ませて埋めてあり，付近はかなりの焼土が散見する。炉の内部は小量の炭化物と灰が残っていて，使用した甕は火を受けたためにもろくなっている。

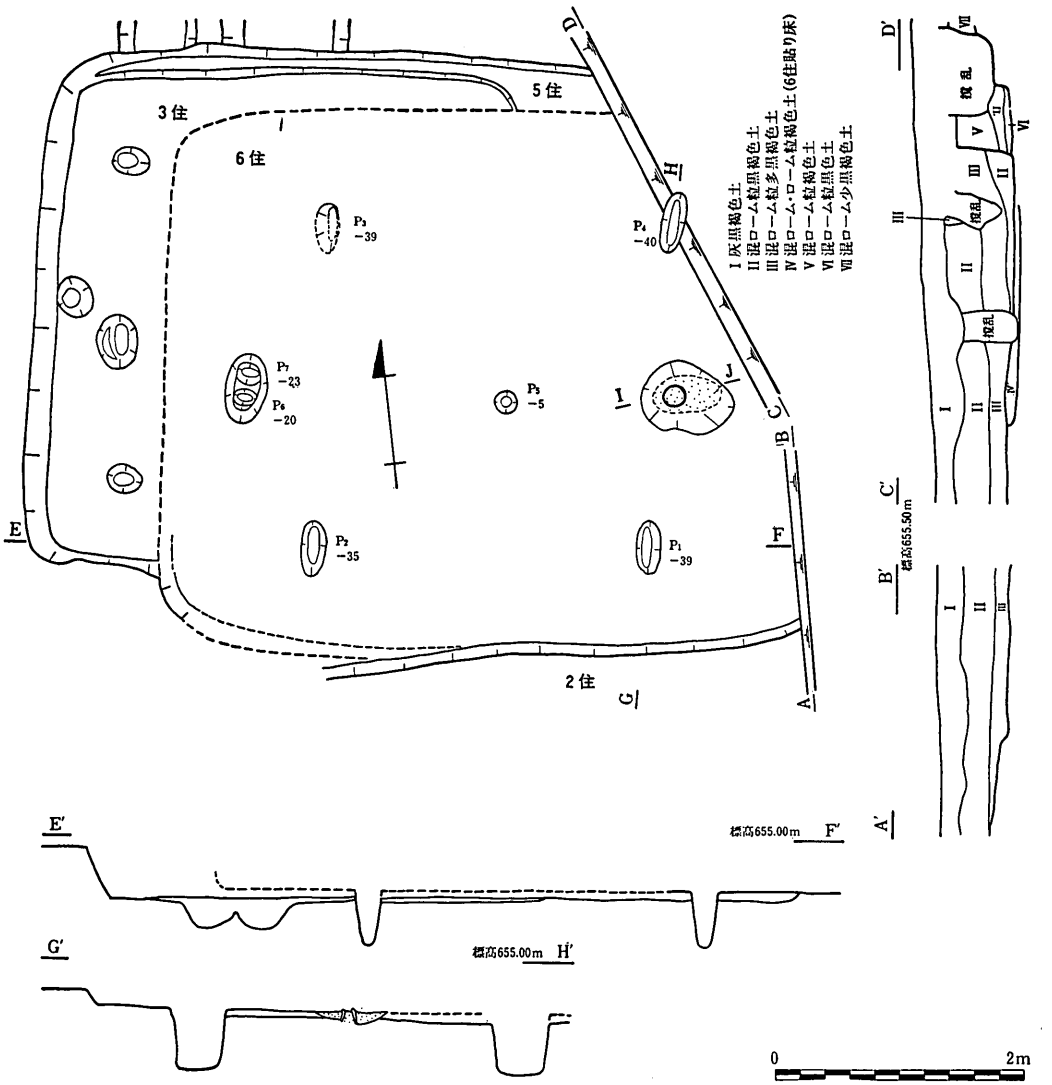
甕等の土器片が炉の付近と中央より小量出土。石器は打製石斧等出土した。これらの遺物からみてこの住居址は弥生時代後期に属するものであると思われる。　（根津清志）

（7）　第8号住居址（第2図，図版2）

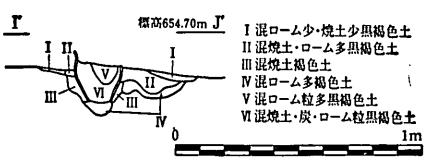
木址は遺跡地の最北より検出された住居址群中の一つで，北と西側は用地外のために調査はできない，本址の東の隅は第7号住居址に切られ，南はわずかに第9号住居址を切り込んでいる。

プランは推定で隅丸方形の竪穴住居址である。規模は用地外にて一部分は不明である。軸方向はN—5°—Eであると思われる。壁は東と南の一部が残存している。わずかに外傾し，その高さは東で25㎝～30㎝である。

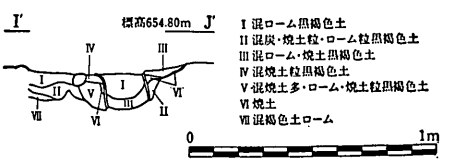
床面は中央部に広く貼り床が残り，堅く仕上げてある。東と南の一部は軟弱のところもある。柱穴は南側に2カ所あり，楕円形で40㎝×30㎝，深さ40㎝のものである。遺構内には数多くのピット，大穴があるがこれらは本址の建築に関係あるものと考えられる。東の隅に浅いピットあり，それはP_{14}で，その中に中形の甕形土器（無文の完形品）が横転し，押し潰されたごとく出土した。床面よりは甕等の破片が小量出土した。これらの遺物よりみて本址は弥生後期の住居址であると思われる。　（根津清志）



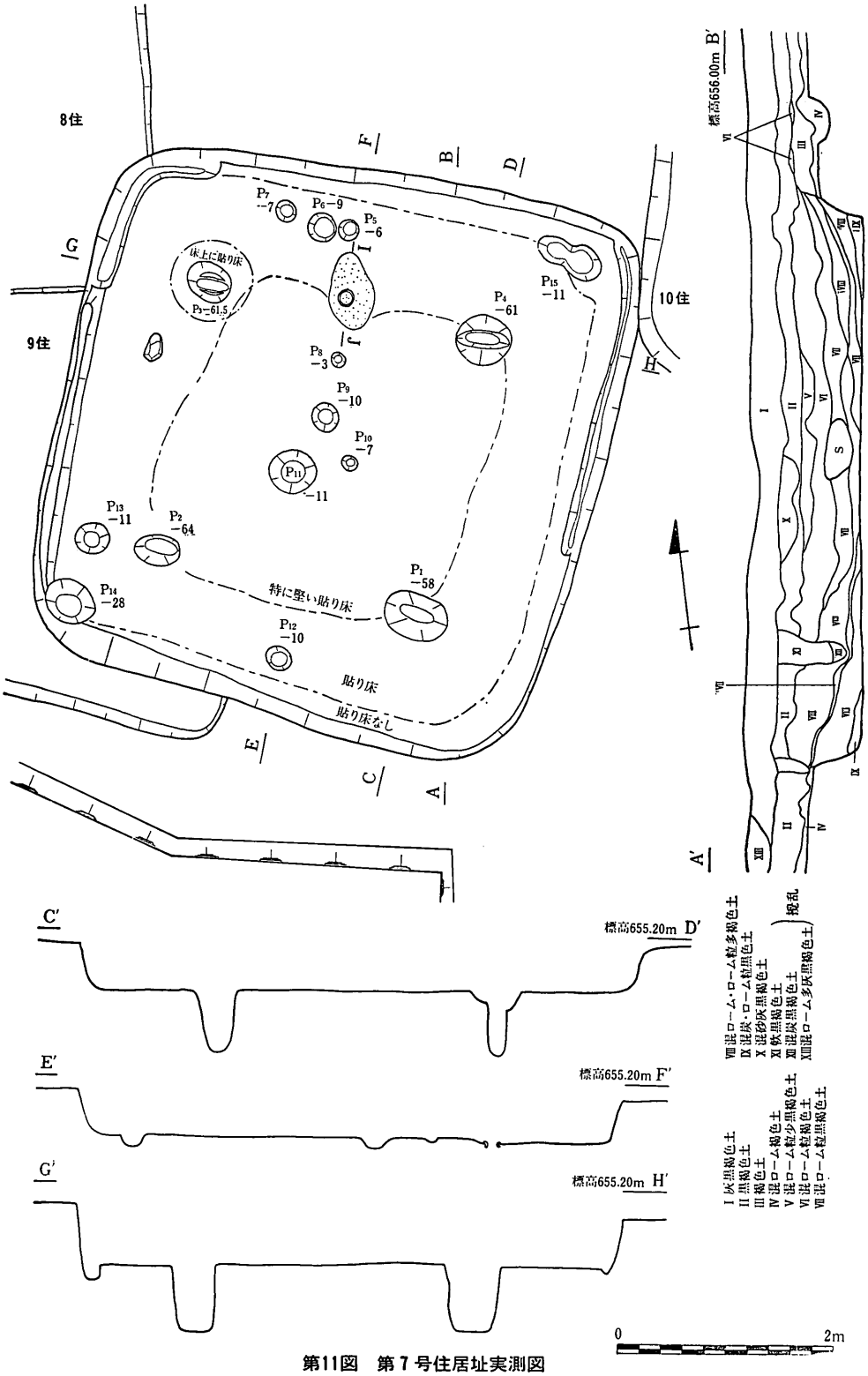
第9図　第6号住居址実測図



第10図　第6号住居址埋甕炉断面図



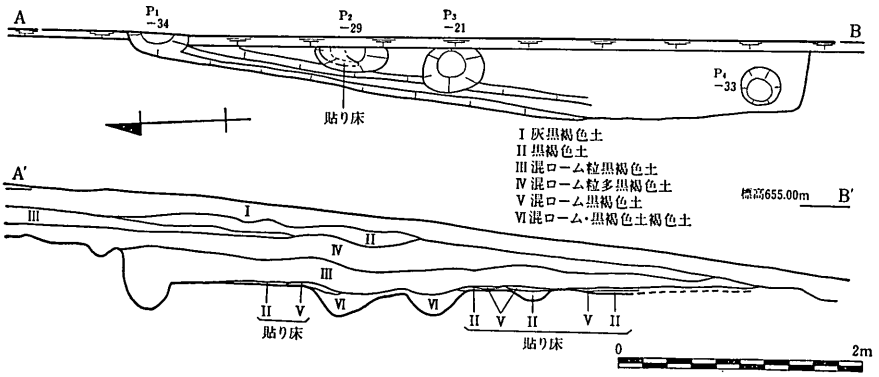
第12図　第7号住居址埋甕炉断面図



第11図　第７号住居址実測図

（8）　第11号住居址（第13図，図版5）

本址はO－6・7・8・9グリットに検出された。遺構の東側は道路に当たり，西壁5.6mとわずかの床面を調査するにとどまった。壁高は10～37cmを測る。床面は3～6cmの貼り床になっており，不良である。遺物は少量出土し，床面に櫛描波状文，簾状文，短線文を施す土器片が出土。これは弥生後期中島式に比定されよう。　（小木曽　清）



第13図　第11号住居址実測図

（9）　第12号住居址（第14図，図版6）

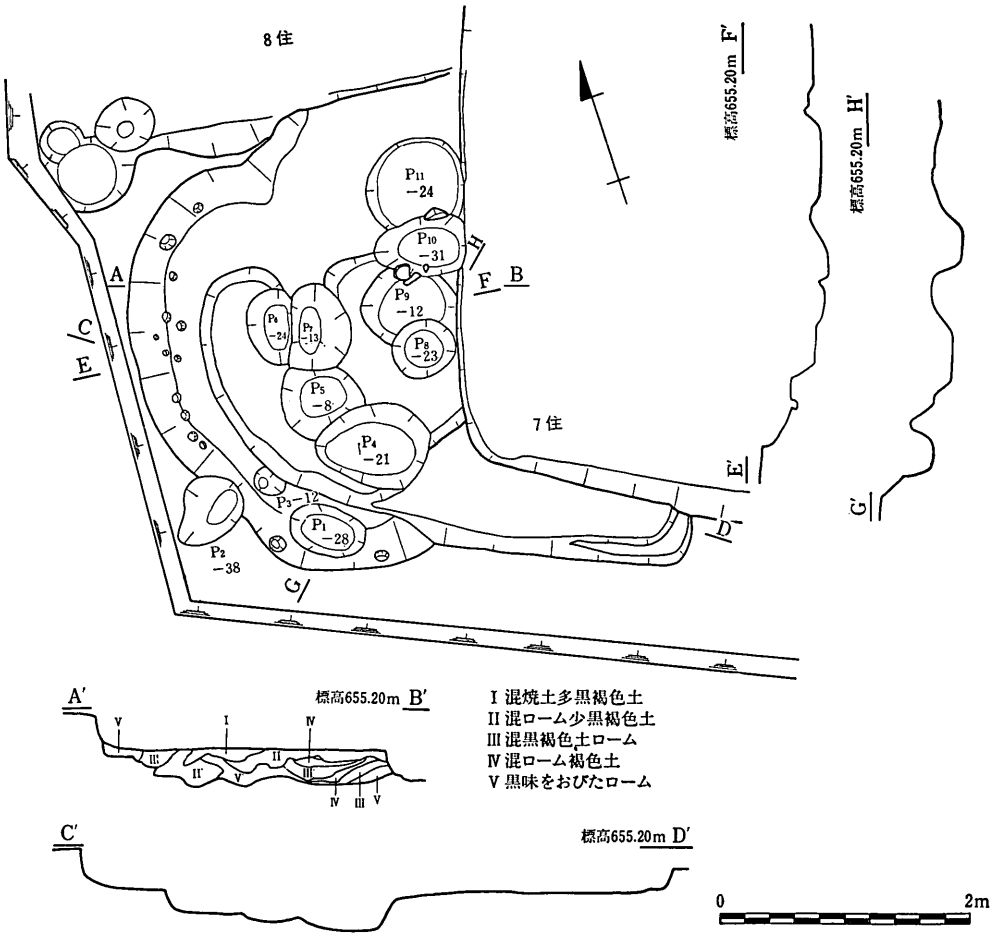
本址は城の腰遺跡の北縁より検出された住居址群中の一つで，第7号住居址が東側に重なり，北側は第8号住居址に切られている。プランは少しくづれた隅丸方形状のもので，ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。

規模は東西4m50cm，南北は不明である。壁は西側で大きく外傾し，高さ25cmを測る。床面はかなりの凹凸があり，又軟弱であまりよくない。遺構内には大小多くのピットが掘られていて柱穴と思われるような深いものは見当たらない。

縄文中期の深鉢の破片と弥生後期の土器片が覆土と床面上より少量出土した。打製石斧が床面付近より出土している。本址は多くのピットが掘ってあり，一部攪乱されたと思われるところもある。全体的にみて，住居址の形態からして弥生後期の住居址と思われる。

以上，全部で弥生時代の竪穴住居址は9軒発見されたが，そのうちのすべてが弥生時代後期に含まれており，どの住居址からも中島式や座光寺原式と呼ばれている土器が出土した。伊那市内でこれだけ密集して弥生時代後期竪穴住居址が発見されたケースは数少ない。したがって伊那市内の弥生時代研究にはこの城の腰遺跡は欠かすことのできない遺跡の一つと今後なると思われる。

（根津清志）



第14図　第12号住居址実測図

第3節　奈良時代

（1）　第2号住居址（第15図，図版4）

本址は遺跡地の中央で多くの住居址と共に検出された遺構の一つで，北側は第3・4・5・6号住居址と複雑にいくつもの遺構が重なり合っている。また，南西の隅は第1号住居址により一部は切られており，東側は攪乱が多く，用地外である。

プランは床面より割出し，推定ではあるが隅丸方形のもので，規模は7ｍ50㎝前後であると考えられる。壁は全面的に削り取られて形はない。

床面は元来が貼り床であったが，重複と攪乱により一部残っている。その部分は小砂利を混ぜてよく堅く叩き10㎝程に仕上げてある。中央より南に3カ所，焼土が床面上に散見する。柱穴は西の壁近くに2カ所あり，P_1は40㎝×70㎝，深さ30㎝，P_2は70㎝×50㎝のものが等間隔に掘られている。

この柱穴付近の床面は特に堅くなっている。

カマドは西壁の中央に，石組の粘土で固めたものが有ったものと考えられるが，石は抜き取られ，焼土が床面から壁外に長さ1m80cm×80cm大に残存している。この粘土混じりの焼土の下は浅く凹んでいて，これが灰留であろう。このカマドの規模は小形のものである。中央より南側に大小合わせて4カ所ピットが検出されたが，これは本址が多く重なった遺構のため他の遺構のものと思われる。

カマド付近の床面よりは土師器の坏，甕等の破片が小量出土し，南壁の下より，土師器の底部の丸い内黒の埦の完形品に近いものが出土した。遺物はわりに少ないがこれらのものより判断するに，本址は奈良時代の住居址であると思われる。（根津清志）

（2）　第10号住居址（第16図，図版6）

本址はR，S—14・15・16グリット内に検出された。南側で第4号住居址を切り，西側で第7号住居址に接している。東側と北側は道路のため，拡張できず，$\frac{1}{6}$程度の調査にとどまった。

遺構の規模，プランは確認できなかったが，推定プランは隅丸方形又は長方形を呈すると思われる。壁高は45〜50cmを測り，やや急な傾斜に立上っていた。床面は凹凸があり，不良で，西北の一部に貼り床され堅い面もあったが，全体に焼土が散在していた。弥生式の第4号住居址との床面の比高差は約15cmを測る。

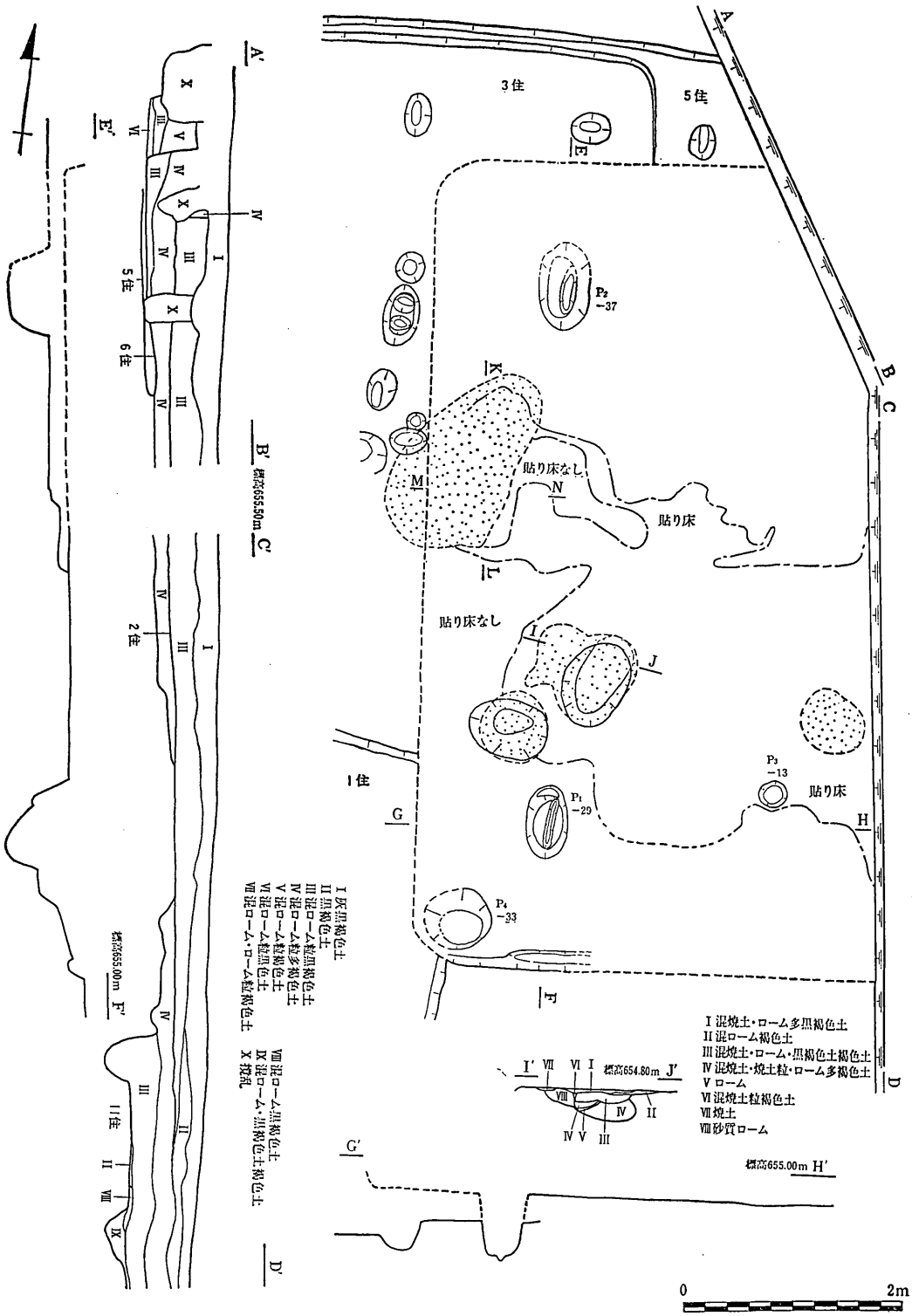
柱穴は1個，P_1が検出されたのみで，56×36—51cmを測る。底は30×12cmを測り，平らで堅くなっていた。底から22cm上った所に10cm×12cmくらいの平らな中段が検出されたが，柱の建替の跡と思われる。柱穴の北側の縁約10cm下に須恵器の甕がほぼ完形で埋っていた。口縁部が一部欠損していたがすぐ横の床面上に検出された。P_2は150cm×110cm—28cmを測り，貯蔵用の土壙と思われる。床面の遺物は少量であり，これは土師器・須恵器の類である。

本址は遺物からして奈良時代の住居址と思われる。

前述したように全面発掘が実施されたならばカマドが発見されたことと思われる。

今回の遺跡発掘で検出された奈良時代の住居址は2軒であり，弥生時代からの継続に多くの問題点が潜んでいる。特に第2号住居址からは古式土師器に近いのが数点ではあるが出土している。

（小木曽　清）



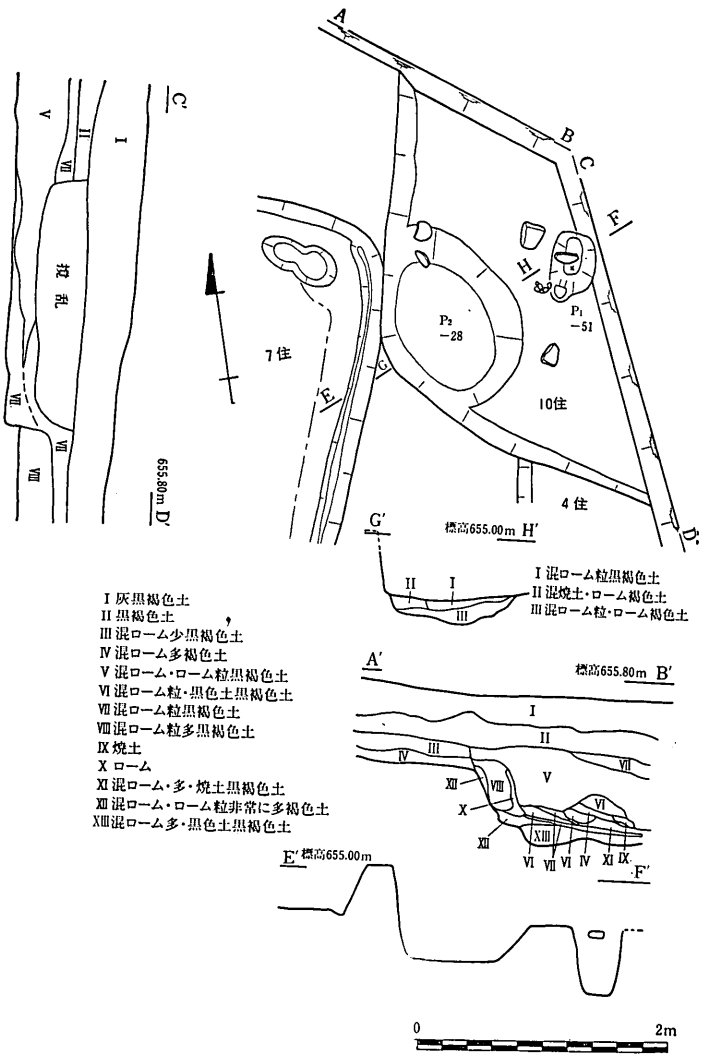
第15図　第２号住居址実測図

第4節　中　　世

（1）　堀址（第17，18図，図版7）

城の腰遺跡の南端部に検出された遺構である。この地区は西側に安岡城遺跡が存在しており，この城館の北側には大きな堀址が東西に走行しているので，発掘調査以前よりあるいは堀址が発見されるのではないかとの大きな期待があつめられていた。

実際に発掘調査に着手してみると，堀は表土面より25～30cmくらい下ったローム層面を掘り込んで構築してあり，東側は段丘崖下へ抜け出ている模様である。段丘崖へ抜け出す工法は堀址構築には当然と考えられている。



第16図　第10号住居址実測図

東側の堀は東西に走行し，その長さは20mくらいあり，幅は西側では1m60cmくらい，中央部では2m90cmくらい，東側では3m60cmくらいを測定できる。平面プランは西側では直線状を，中央部付近では上面がデコボコを，東端部では若干南側へ曲折状をそれぞれ呈していた。深さは西側では80cmくらい，中央部付近では1mくらい，東側では1mくらいと，若干，東側へ行くに従って深くなっていた。

全般的に壁面はゆるやかな薬研状を呈し，その組成土は上面はソフトローム層，中部から下部にかけてはハードローム層より成り立っていた。底面は西側から中央部にかけてはハードローム層，東側は砂礫混合のローム層より成り立っていた。この砂礫混合ローム層は堀址の東側付近に南北状に存在しており，堀址構築時以前に上流から流れ込んだ水成ローム層の一種かと思われる。

東側の覆土は上層より次のようである。混ローム粒軟黒褐色土，混ローム粒少黒褐色土，混ローム粒多黒褐色土，ローム，黒褐色土，混人頭大～こぶし大礫黒色土，混ローム褐色土，混ローム多褐色土，砂，混ローム粒少黒色土

中央付近の覆土は上層より次のようである。混ローム粒軟黒褐色土，黒褐色土，混ローム多褐色土，混ローム粒，わずか黒褐色土，混ローム多褐色土，混ローム粒わずか黒色土，混ローム粒褐色土，混砂黒褐色土，混ローム粒砂黒褐色土，砂，混ローム黒褐色土，ローム

遺物は覆土中より縄文時代土器片，石器が出土したが，中世に関係した遺物は何も出土しなかった。

東側の堀址は西側で南北４ｍくらい，東西５ｍくらいの方形の落ち込みがあった。この落ち込みの床面はハードローム層より成り立ち，凹凸が顕著であった。この床面より中世陶器片が出土し，中世の遺構であることが判明した。この落ち込みの南西隅にカーブ状の黒い落ち込みが発見された。発掘調査を実施してみると別の堀址であることが判明した。この堀址は前述した安岡城の堀址と西側で接していることが明らかとなった。南側は南の段丘崖下へ抜け出ており，段丘崖面に掘り込み痕が認められた。

発掘調査を実施した個所での各々の規模を記してみると次のようになる。西端の上面幅２ｍ20cmくらい，底面幅80cmくらい，カーブの鋭い中央部付近の上面幅２ｍ60cmくらい，底面幅40cmくらい，南端の上面幅３ｍ80cmくらい，底面幅40cmくらい，以上各々の数値から察して断面は鋭い薬研を呈すことが判明した。

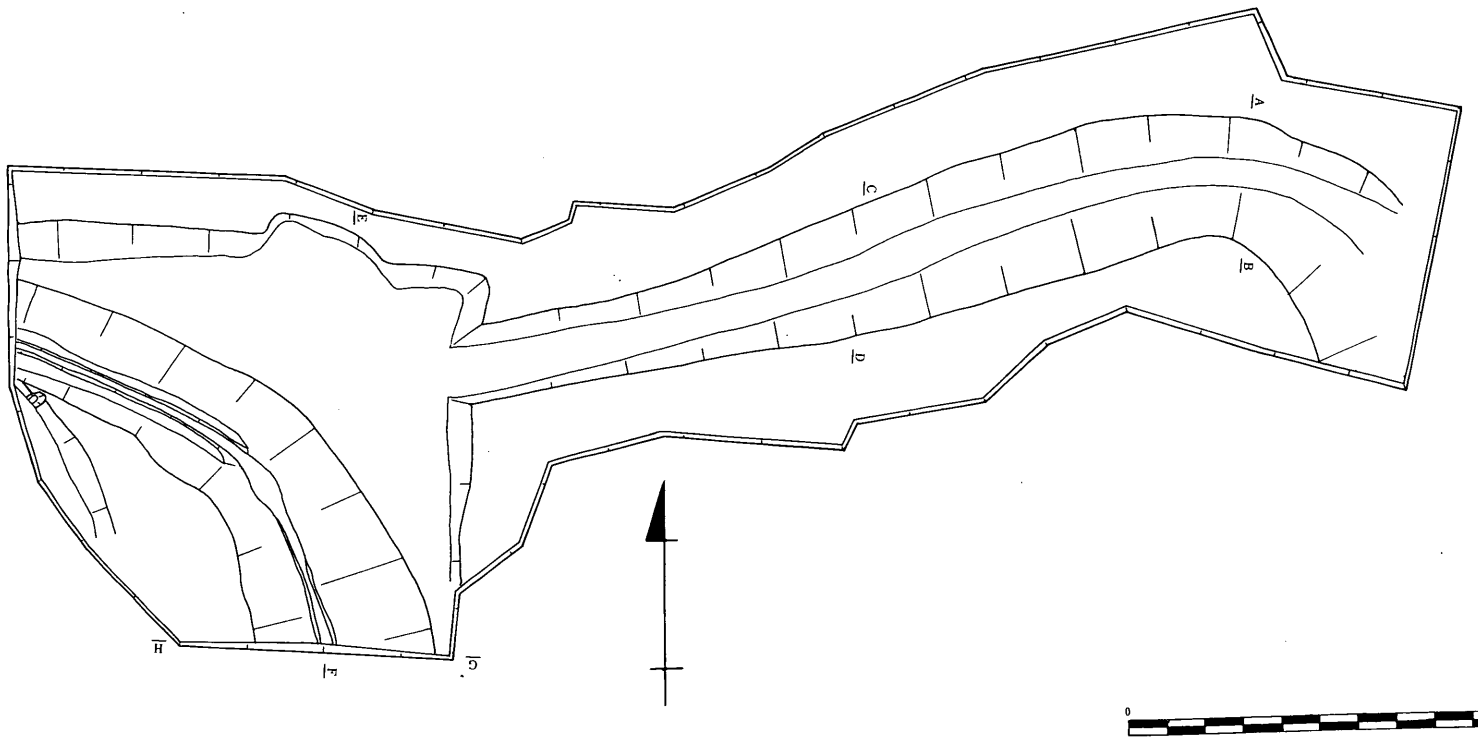
壁面上部はソフトローム層，中部から下部にかけてはハードローム層より成り立っていた。床面のレベルは西から南へカーブに沿って低くなっていた。覆土は上層面より混ローム多軟黒褐色土，混ローム粒黒褐色土，混ローム褐色土，混ローム粒褐色土，褐色土，混ローム，ローム粒黒褐色土，黄褐色土，砂，混ローム黄褐色土の順になっていた。堀址の肩上面付近より中世に関係した陶器片が数片出土した。

以上，堀址の状況を述べてきたが，この遺跡の発見された位置からみて，安岡城の東側にこの城に関連する郭が存在したものと思われる。　　（飯塚政美）

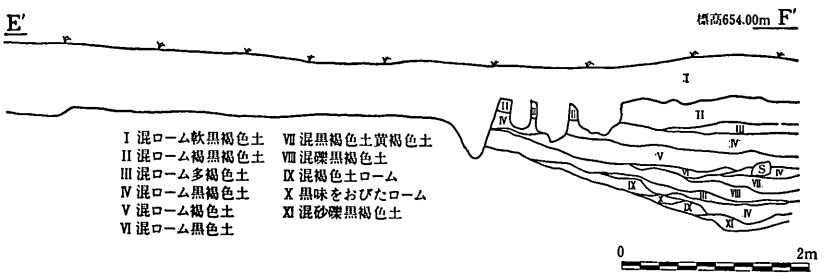
（２）第１号竪穴・第２号竪穴（第19図，図版10～11）

本遺構は堀址の北側，第１号窖址と近接して発見された。第１号竪穴は南北２ｍ80cm，東西２ｍ40cm程の規模を持ち，ローム層を掘り込んで構築され，平面プランは隅丸方形状を呈す。壁の状態は四壁ともほぼ同じであり，垂直に近く凹凸は少ない。

床面はローム層の堅い貼り床で，その厚さは７～10cmくらいであった。周囲には建物に屋根を替けたと思われる柱穴があった。覆土中には焼土や木炭が検出された。遺物としては内耳土器片，中世陶器片，鉄製品が出土した。貼り床を取り除くと，攪乱土が発見され，それを掘り下げていくとハードローム層からなる床面が発見された。この床面上にほぼ等間隔で角状の柱穴が検出されたので，これを第２号竪穴とした。規模は南北２ｍ45cm，東西２ｍ13cmくらいを測り，深さは１ｍ30cmくらいある。隅丸方形状を呈し，第１号竪穴より一まわり小さくなる。壁は四壁とも垂直に近く，ハードローム層より成り立ち，ノミ痕が明瞭であった。床面はほぼ水平となっており，壁面同様にところどころにノミの跡が認められた。覆土は人為的に埋めたとみえて攪乱土が充満していたが，



第17図　堀址実測図



第18図—1　堀址断面図

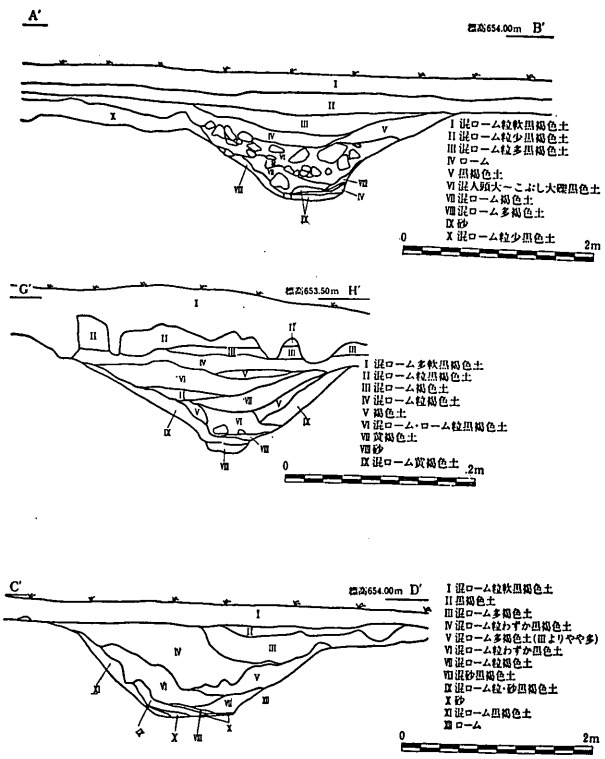
現段階では如何なる時期に埋めたかは不明である。構築状態からして二つの遺構は中世と思われる。

（飯塚政美）

（3）　第1号窖址(第19図，図版11)

本址は発掘地点の東側，堀址の北側に検出された遺構であった。遺構検出面までは表土から30cmくらい下っていた。この遺構は一時期に人為的に埋めたと見えて，表面から底面までローム層混じりの攪乱土で充満していた。上面は南北1m10cm，東西1m20cm程，底面は南北1m85cm，東西2m5cm程を測る。

掘り込みの断面は上部はややひろがり，くびれ部分があり，下へ行くに従ってひろがるフラスコ状を呈していた。フラスコ状は東壁に行くに従って顕著となっていた。壁面上部はソフトローム層，中部から下部はハードローム層より成り立っていた。中部から下部にかけてはハードローム層のために構築時のノミの跡が明瞭に残存していた。底面までの深さは約1m60cmくらいを用している。



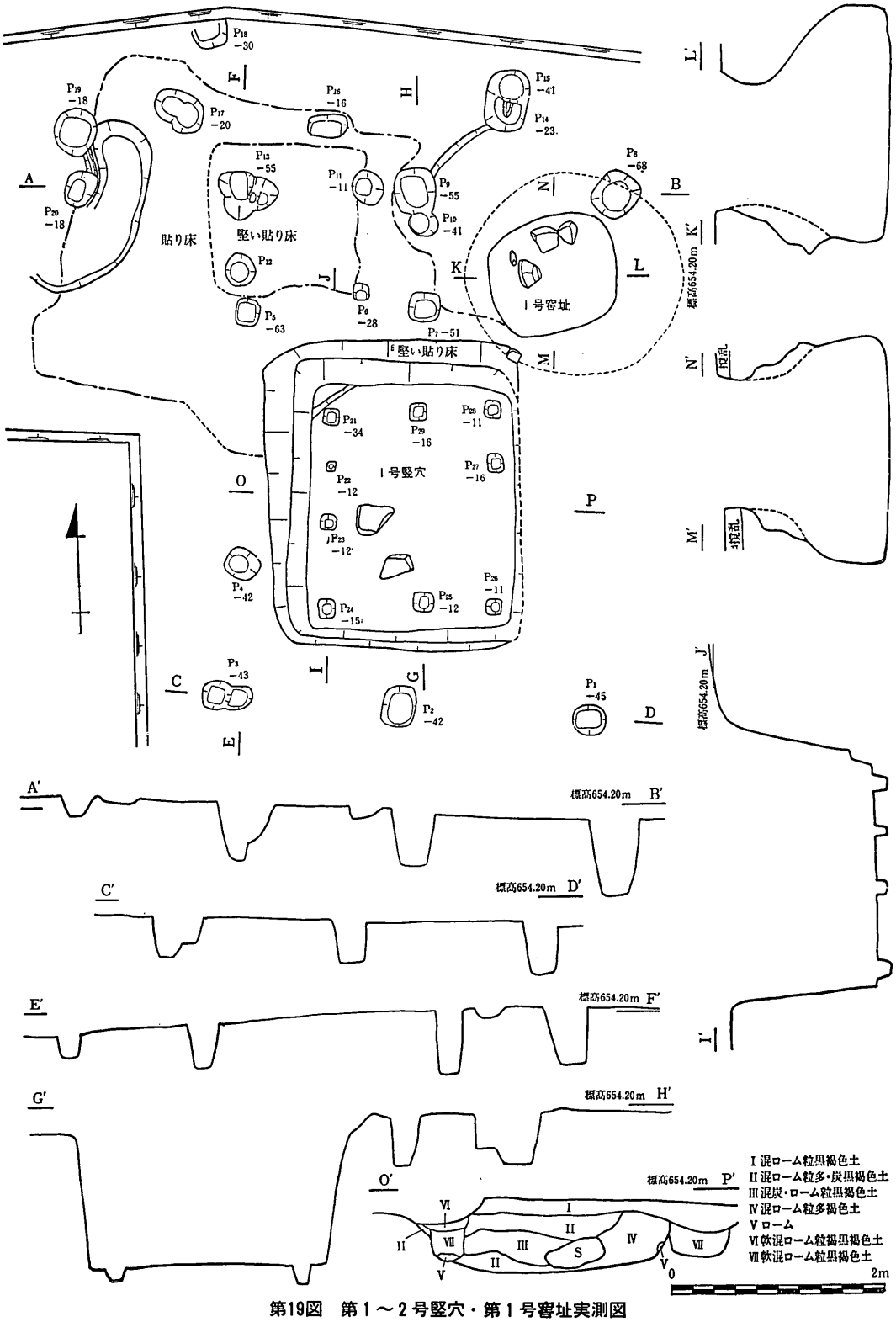
第18図—2　堀址断面図

床面はハードローム層中に構築され，ほぼ水平状を呈していた。覆土より内耳土器片，おろし皿，仏花器の出土があった。またこの土の中には焼土と炭化物が多量に検出された。

本遺構は中世に位置づけられると思われる。

いままでに窖址の検出された遺跡としては次のものがある。それらの遺跡名と所在地を記すと次のようになる。カンバ垣外遺跡—伊那市西春近南小出，城平遺跡—伊那市西春近山本。

これらはいずれも中世に関連した遺跡であった。　（飯塚政美）



第19図　第１～２号竪穴・第１号窖址実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器

城の腰遺跡では今回の発掘で，12軒の住居址と，堀址，竪穴2基，窖址1基が検出された。これらの遺構を時代的に分類してみると次のようになる。

縄文中期竪穴住居址1軒，弥生時代後期竪穴住居址9軒，奈良時代竪穴住居址2軒，中世の堀址，竪穴2基，窖址1基

前述した遺構及びグリット内からは相当量の遺物が検出しており，そのうちで土器の比重が最も高い。土器以外には石器，陶磁器，土製品，石製品がある。

以上，述べてきたうちである程度の実数が把握できるのは，縄文中期，土師器，須恵器，中世陶磁器であって，弥生式土器はその実数をつかめない状態である。

以下に各種遺物の観察結果を記すが，記述方法は遺物を個別的に取り扱い，その属性を統一した表現で処理するために表を多く採用した。

縄文中期土器は文章にて表現した。遺物の総数の都合あるいは紙数の都合によって，ほんの特長的な数片を拓影（第21図）にのせておくことにする。

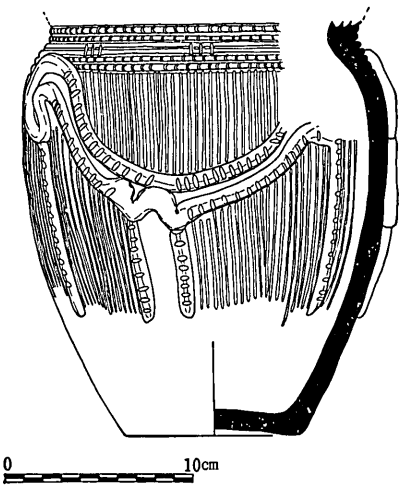
（1）　縄文式土器

第20図の土器は第9号住居址の床面に密着して出土したものである。出土状態は土器が破片のままで集中的にかたまっていたのを取りあげる時に気を付けて処理し，復元したのがこの土器である。復元するまでには破片にして50個程を接着してある。

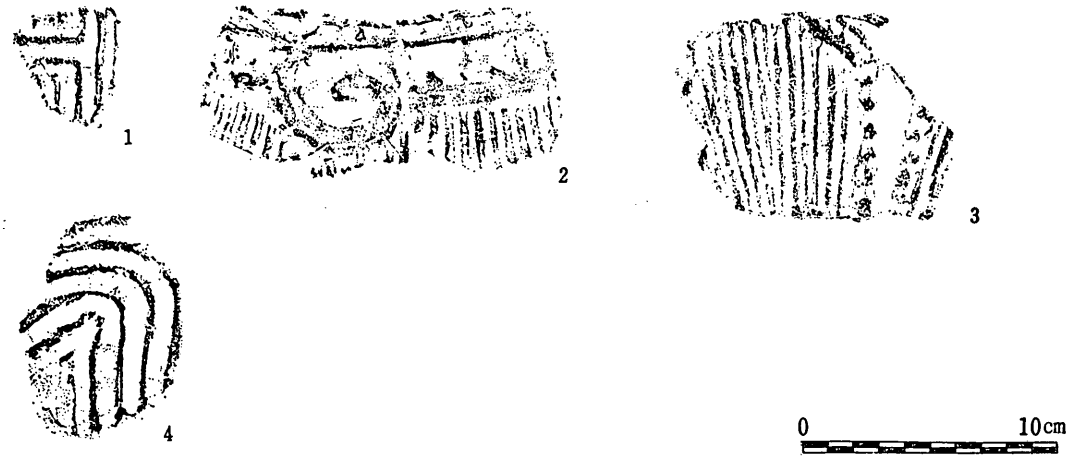
この土器は口縁部が欠損はしているが，口頸部に細い隆線を貼り付け，その上に連続爪形文をつけてある。全般的にみて甕型土器と思われる。文様は口縁下部から胴部下部にかけて，太い隆帯を弧状か垂下状に貼り付け，きわだった文様を描き出している。器面の素地はヘラ先による細い沈線を斜目平行に規則的に配してある。胴下部から底部にかけては無文である。

色調は赤褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に長石・石英・雲母を含む。本土器は縄文中期後葉の前半に位置づけられると思われる。

第21図に掲載した土器片はすべて第9号住居址より出土したものである。（1～4）は無文地に細い粘土紐を直線状や曲線状に貼り付けてある。（2～3）は太い隆線を渦巻状あるいは直線状に貼り付け，その他の部分には沈線を斜走させ器面全体を装飾している。



第20図　縄文式土器実測図



第21図　縄文式土器拓影　9住（1～4）

色調は（1，4）は黒褐色を呈し，焼成は中位で，胎土中に少量の雲母，石英，長石を含んでいる。（2，3）は赤褐色を呈し，焼成は不良で，胎土中に多量の雲母，石英，長石を含んでいる。

（2）弥生式土器

今回の発掘中最も多量に出土した土器である。前述したように紙数の都合で表を用いて説明を加えていくことにする。

説明項目は実測図番号，出土地点・器形・法量（口縁径・器高・最大胴径・器厚・底径）。口縁部・胴部・底部・色調・胎土・焼成・出土遺構・備考等である。

最初に住居址番号の早い順に実測図を掲載し，それに準じて表によって説明を加えていくことにする。項目の中で色調については筆者の主観が若干くみ込まれる場合もあると思われるが御了解願いたい。

後の方には拓影図を先に述べたように住居址番号の早い順に掲載する。拓影図は文様が際立った特色のあるものだけを選択して登載したのである。登載した土器片の総数は全般的にみて，5％くらいと判断してもらえば結構である。

拓影に掲載した土器片の出土遺構は次のようである。第1号住居址，第3号住居址，第4号住居址，第5号住居址，第7号住居址，第8号住居址。

ただし，紙数の関係上拓影図の説明は今回省略させていただきますので御承知下さるようお願い致します。その理由としては文様及びその状態は前の表で述べたのと大差はないからであることを申し添えておく。

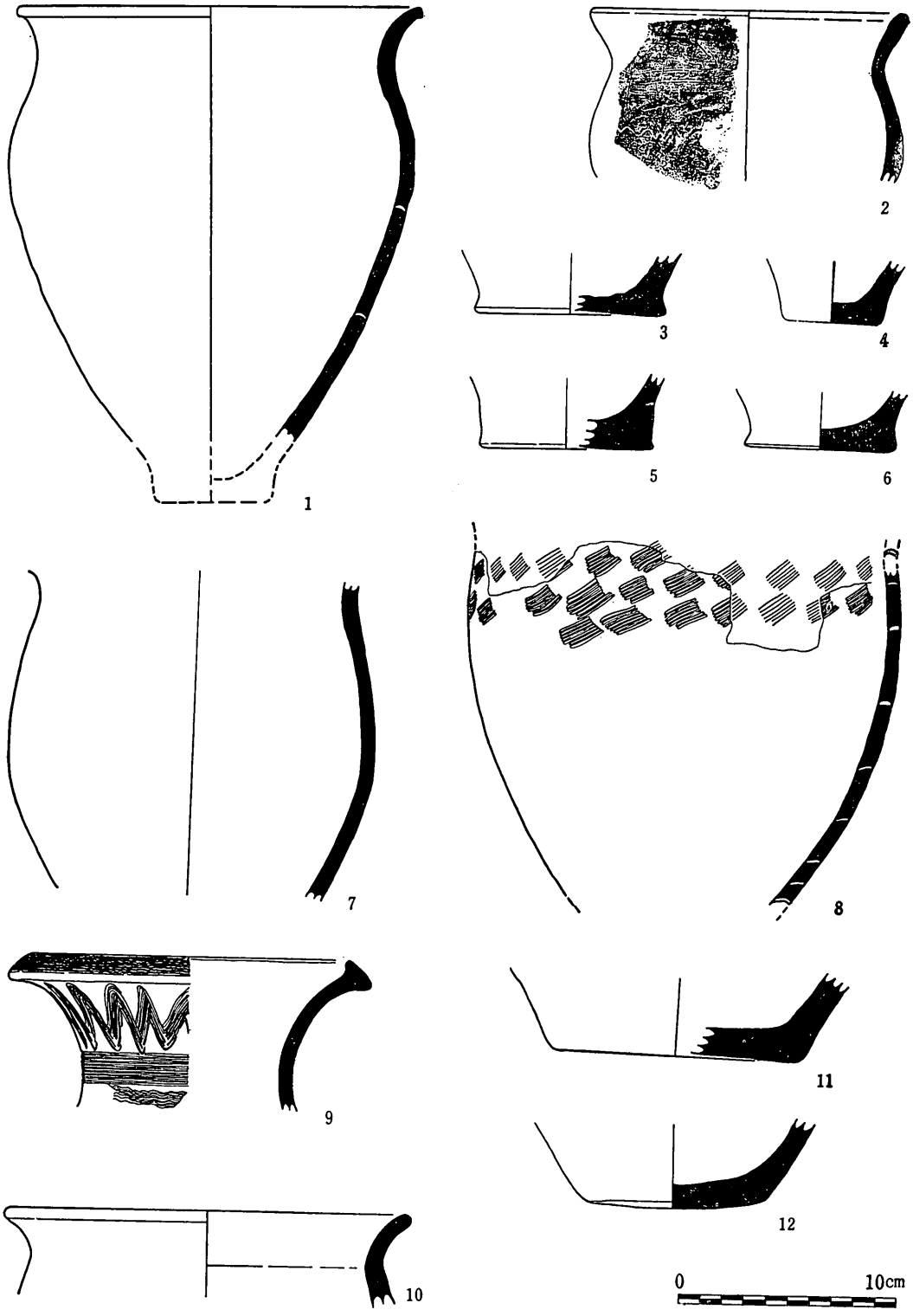
表に掲載した土器はできるかぎり実測可能なものをのせてあることを最後につけ加え，研究者の意見を問うところである。　　（飯塚政美）

第1表　主要弥生式土器一覧（法量は現況を記す）

実測図番号		第22図(1)	第22図(2)	第22図(3)	第22図(4)	第22図(5)
出土地点	地点					
	トレンチ					
	区					
器形		甕	甕	甕	甕	甕
法量	口縁径 (cm)	18.8	14.7			
	器高 (cm)	22.5	7.9	3.2	2.7	3.2
	最大胴径 (cm)	18.7	14.5			
	壁厚 (cm)	0.7	0.8	1.7	1.0	1.7
	底径 (cm)	5.4（推定）		8.1	4.7	8.1
口縁部		弧状に外反し，平縁を呈している。口唇は外そぎで若干丸味を呈している。 外面―横位ナデ 内面―横位ナデ	わずかに外反，口唇は丸味を呈す。口頸部に細い沈線が横走	欠損	欠損	欠損
胴部		上部はややふくらみ，下方へ行くに従ってつぼまる。輪積痕あり，外内面横位ナデ 外面―スス付着	上部はややふくらむ。 櫛描波状沈線文が横走	大部分欠損，無文 下部縦位ミガキ	大部分欠損，無文 下部横位ナデ	大部分欠損，下部横位ナデ 無文
底部		欠損	欠損	平底	平底	平底
色調		赤褐色	黒茶褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色
胎土		石英・長石・雲母	石英・長石・雲母	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石	石英・雲母・長石
焼成		良好	不良	不良	普通	不良
出土遺構		1住炉	1住フク土	1住フク土	1住フク土	1住フク土
備考		正位埋甕炉				

実測図番号		第22図(6)	第22図(7)	第22図(8)	第22図(9)	第22図(10)
出土地点	地　　点					
	トレンチ					
	区					
器　　形		甕	甕	甕	壺	甕
法量	口縁径 (cm)				15.0	18.9
	器高 (cm)	2.6	15.0	17.9	8.1	4.1
	最大胴径 (cm)		17.1	20.0		
	壁厚 (cm)	1.1	0.7	0.7	0.7	1.0
	底径 (cm)	7.0				
口縁部		欠　損	無　文 口頸部はやや厚味を増している。 口頸部の下位は熱変によりもろくなる。外面は横位デナ内面は斜位ナデ	欠　損 輪積痕あり	平縁でゆるやかに外反 口唇は外そぎ，上部は波長の長い櫛描波状文が横走 口頸は波長の沈線文が横走 外・内面横位ナデ	平縁で，口唇は丸味を呈す。無文 上部内・外面ヨコナデ 口頸部内外面は縦位ナデ
胴部		大部分欠損，無文下部横位ナデ	中央部はややふくらむ。 無　文 外面は横位ナデ 内面―あらい斜位ナデ 外面―スス付着	上部はややふくらみ，下部は徐々につぼまっていく。 上部に数条からなる櫛描沈線文が3段にわたって斜走	ややつぼまる。 上部は櫛描沈線が横走 中部は波状沈線文横走 内・外面横位ナデ	欠　損
底部		平　底	欠　損	欠　損	欠　損	欠　損
色調		暗黄褐色	赤褐色	明茶褐色	茶褐色	茶褐色
胎土		雲母・石英・長石	雲母・石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼成		普　通	普　通	良　好	不　良	不　良
出土遺構		1住フク土	3住炉	3住炉	3住床面	3住フク土
備考			埋甕炉（内側）	埋甕炉（外側）		

実測図番号		第22図(11)	第22図(12)	第23図(13)	第23図(14)	第23図(15)
出土地点	地点					
	トレンチ					
	区					
器形		甕	甕	甕	甕	高坏
法量	口縁径 (cm)					
	器高 (cm)	3.7	3.8	3.0	4.1	2.6
	最大胴径 (cm)					
	壁厚 (cm)	1.3	1.2	1.7	1.6	2.0
	底径 (cm)	11.5	8.2	7.0	7.9	6.3
口縁部		欠損	欠損	欠損	欠損	欠損
胴部		無文 大部分欠損 下部—外面横位ナデ	無文 大部分欠損 下部—外面横位ナデ	無文 大部分欠損 下部—外面横位ナデ	無文 大部分欠損	無文
底部		平底	平底	平底	平底	
色調		茶褐色	茶褐色	暗黄褐色	黄褐色	黄褐色
胎土		砂・雲母	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼成		不良	良好	普通	不良	普通
出土遺構		3住床面	3住床面	3住フク土	3住柱穴	3住フク土
備考						

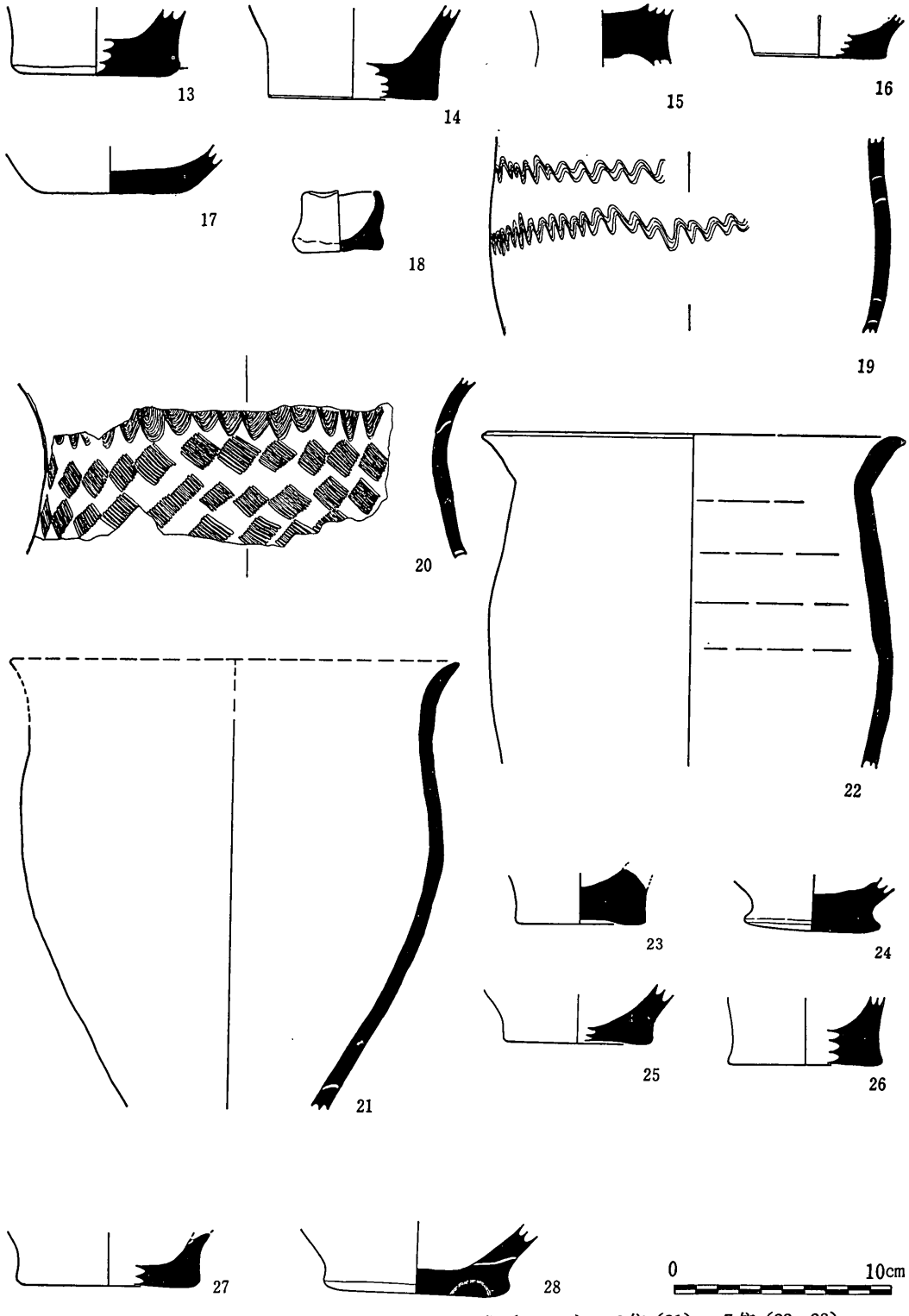


第22図　弥生式土器実測図　1住（1～6）　3住（7～12）

実測図番号		第23図(16)	第23図(17)	第23図(18)	第23図(19)	第23図(20)
出土地点	地点					
	トレンチ					
	区					
器形		甕	甕	甕	甕	甕
法量	口縁径 (cm)					
	器高 (cm)	1.8	2.2	3.8	8.3	10.1
	最大胴径 (cm)				18.6	
	壁厚 (cm)	1.1	1.1	1.1	0.7	0.7
	底径 (cm)	6.2	6.9	3.7		
口縁部		欠損	欠損	無文	欠損	上部欠損 輪積痕あり，上部は櫛状工具によって10本一束の沈線を同心円状に配す。下部は沈線が斜走外面・内面ともに横位ナデ
胴部		無文 大部分欠損 下部横位ナデ	無文 大部分欠損	無文	ややふくらむ，輪積痕あり，櫛状工具によって2本波状に横走 外面—横位ナデ 内面—横位ナデ	欠損
底部		平底	平底	平底	欠損	欠損
色調		黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	赤褐色	赤褐色
胎土		雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼成		不良	不良	普通	不良	普通
出土遺構		3住フク土	3住床面	3住柱穴	5住炉（下）	5住炉（上）
備考				手捏土器	埋甕炉	埋甕炉

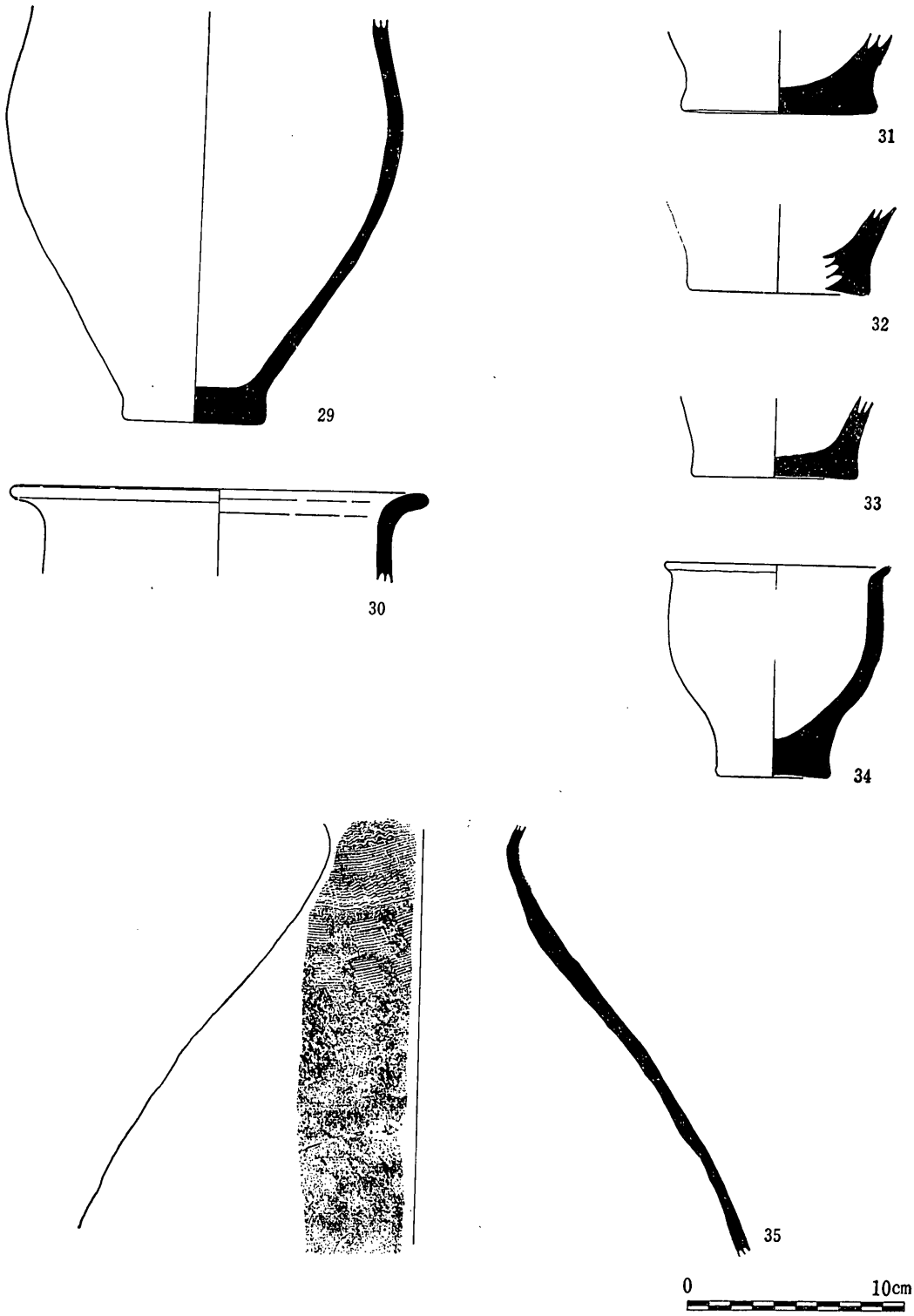
実測図番号		第23図(21)	第23図(22)	第23図(23)	第23図(24)	第23図(25)
出土地点	地　　点					
	トレンチ					
	区					
器　　形		甕	甕	甕	甕	甕
法量	口縁径 (cm)	20.9（推定）	19.5			
	器高 (cm)	25.9（推定）	15.4	2.4	2.6	2.4
	最大胴径 (cm)	19.7	18.6			
	壁厚 (cm)	0.7	0.8	1.8	1.7	1.5
	底径 (cm)	5.2		6.1	6.3	7.0
口縁部		無　文 推定平縁で，わずかに外反し，口唇は丸く，内そぎになっている。外・内面は横位ナデ 外・内面は第２次熱変	平縁を呈し，くの字状にするどく外反 口唇は丸味を呈し垂れ下がっている 無　文 内・外面とも横位ナデ 内・外面とも熱変	大部分欠損	大部分欠損	大部分欠損
胴部		無　文 上部はややふくらみ，下部に行くにしたがってつぼまる。 外面―斜位ナデ後横位ミガキ 内面―横位ナデ後縦位ミガキ	無　文 中央部はややふくらむ 外面上部縦位ナデ 外面下部あらい横位ナデ 内面斜位ナデ	無　文 大部分欠損 下部は横位ナデ	無　文 大部分欠損 下部は横位ナデ	無　文 大部分欠損 下部横位ナデ
底部		欠　損	欠　損	平　底	平　底	平　底
色調		明茶褐色	赤褐色	赤褐色	暗黄褐色	暗黄褐色
胎土		石英・長石・雲母	砂・雲母・石英・長石	雲母・石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼成		普　通	普　通	普　通	普　通	普　通
出土遺構		６住炉	７住炉	７住フク土	７住床面	７住床面
備考		正位埋甕炉	埋甕炉			

実測図番号		第23図(26)	第23図(27)	第23図(28)	第24図(29)	第24図(30)
出土地点	地点					
	トレンチ					
	区					
器形		甕	甕	壺	甕	甕
法量	口縁径 (cm)					
	器高 (cm)	3.2	2.5	3.4	18.7	19.3
	最大胴径 (cm)				18.3	
	壁厚 (cm)	1.6	1.0	1.3	0.7	0.8
	底径 (cm)	7.2	8.7	8.7	6.7	
口縁部		欠損	欠損	欠損	欠損	平縁で外反，口唇は丸味を呈す。 外面は縦位ミガキ 内面横位ナデ 無文 外・内面ともにス付着
胴部		大部分欠損 無文 外面横位ナデ	大部分欠損 無文 外面横位ナデ	大部分欠損 無文 外面横位ナデ	無文 上部外面あらい横位ナデ 内面横位ナデ 下部外面あらい縦位ナデ	欠損
底部		平底	平底	平底	平底	欠損
色調		暗黄褐色	暗黄褐色	赤褐色	黒黄褐色	明茶褐色
胎土		雲母・石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼成		普通	普通	普通	不良	普通
出土遺構		7住フク土	7住フク土	7住床面	8住床面	8住床面
備考						

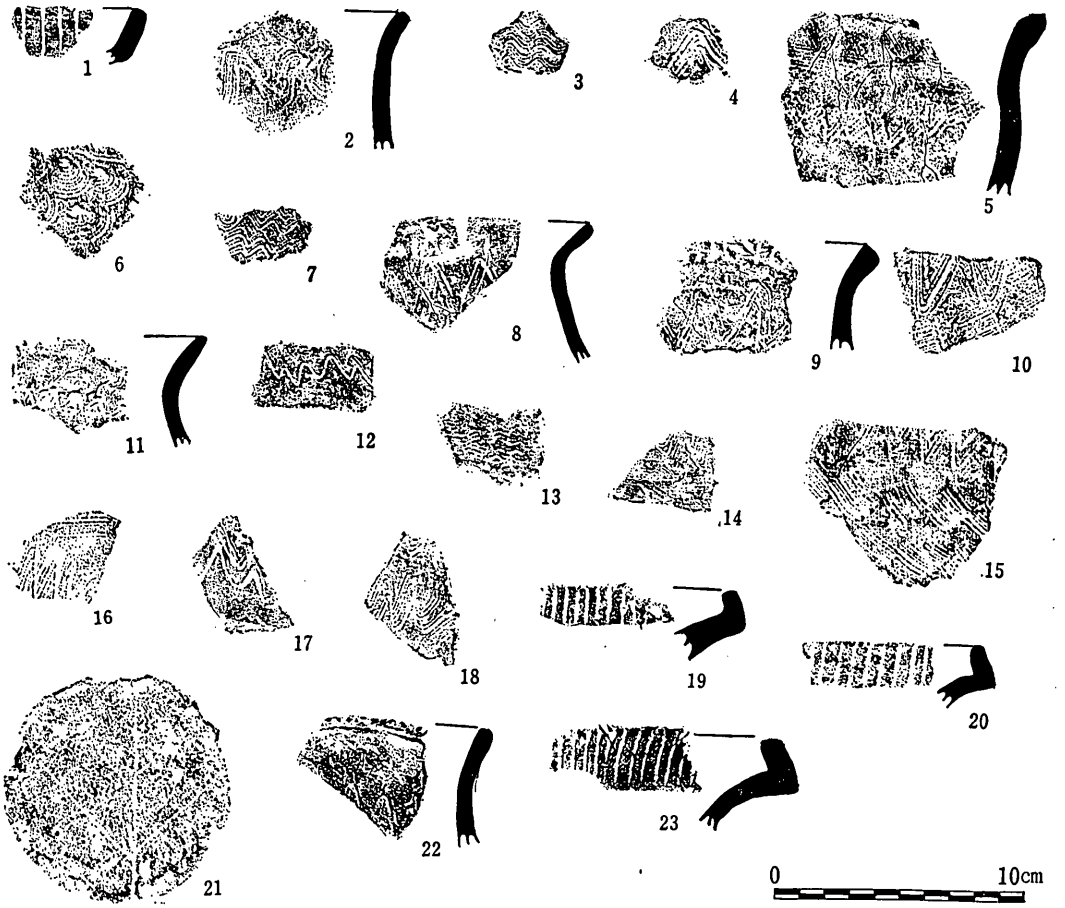


第23図　弥生式土器実測図　3住（13～18）　5住（19～20）　6住（21）　7住（22～28）

実測図番号		第24図(31)	第24図(32)	第24図(33)	第24図(34)	第24図(35)
出土地点	地　点					
	トレンチ					
	区					
器形		甕	甕	甕	台付甕	壺
法量	口縁径 (cm)				10.3	
	器高 (cm)	3.8	4.0	3.7	9.8	19.0
	最大胴径 (cm)				9.9	31.1
	壁厚 (cm)	1.6	1.8	1.1	0.7	0.9
	底径 (cm)	9.2	8.3	7.7	5.2	
口縁部		欠損	欠損	欠損	平縁で口唇近くが部分的にわずかに外反 無文 外面—縦位ナデ 内面—横位ナデ 外面—スス付着 内面—黒変	上部欠損 上部は櫛描波状文と沈線文， 中部は櫛描波状文， 下部は束になった沈線が斜走 外面斜位ナデ スス付着 内面剝落
胴部		大部分欠損 無文 外面横位ナデ	大部分欠損 無文 外面—縦位ナデ 内面—横位ナデ	大部分欠損 無文	ややふくらむ。 無文 外面—縦位ナデ 内面—斜位ナデ	無文 ふくらみをもつ 外面斜位ナデ スス付着 内面剝落
底部		平底	平底	平底	平底	欠損
色調		明茶褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	黒茶褐色
胎土		雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼成		普通	不良	不良	普通	普通
出土遺構		8住フク土	8住フク土	8住床面	8住床面	11住床面
備考						



第24図　弥生式土器実測図　8住（29～34）　11住（35）



第25図　弥生式土器拓影　1住（1～5）　2住（6～7）　3住（8～13）　4住（14）
5住（15～16）　7住（17～22）　8住（23）

（3） 土師器・須恵器

今回の発掘中に出土した土師器・須恵器は第2号住居址，第10号住居址に数多く出土していた。ほかにはグリットからの出土もあった。全部掲載するわけにはいかないので，これらのうちで，図上復元を含めて，実測図作製が可能なものを掲載した。

紙数の都合上，表を利用して説明を加えていくことにする。説明項目は実測図番号，出土地点・器形・法量（口縁径・器高・最大胴径・器厚・底径），口縁部（器形・整形（表・裏）），胴部（器形・整形（表，裏）），底部・色調・胴土・焼成・出土遺構・備考とする。　（飯塚政美）

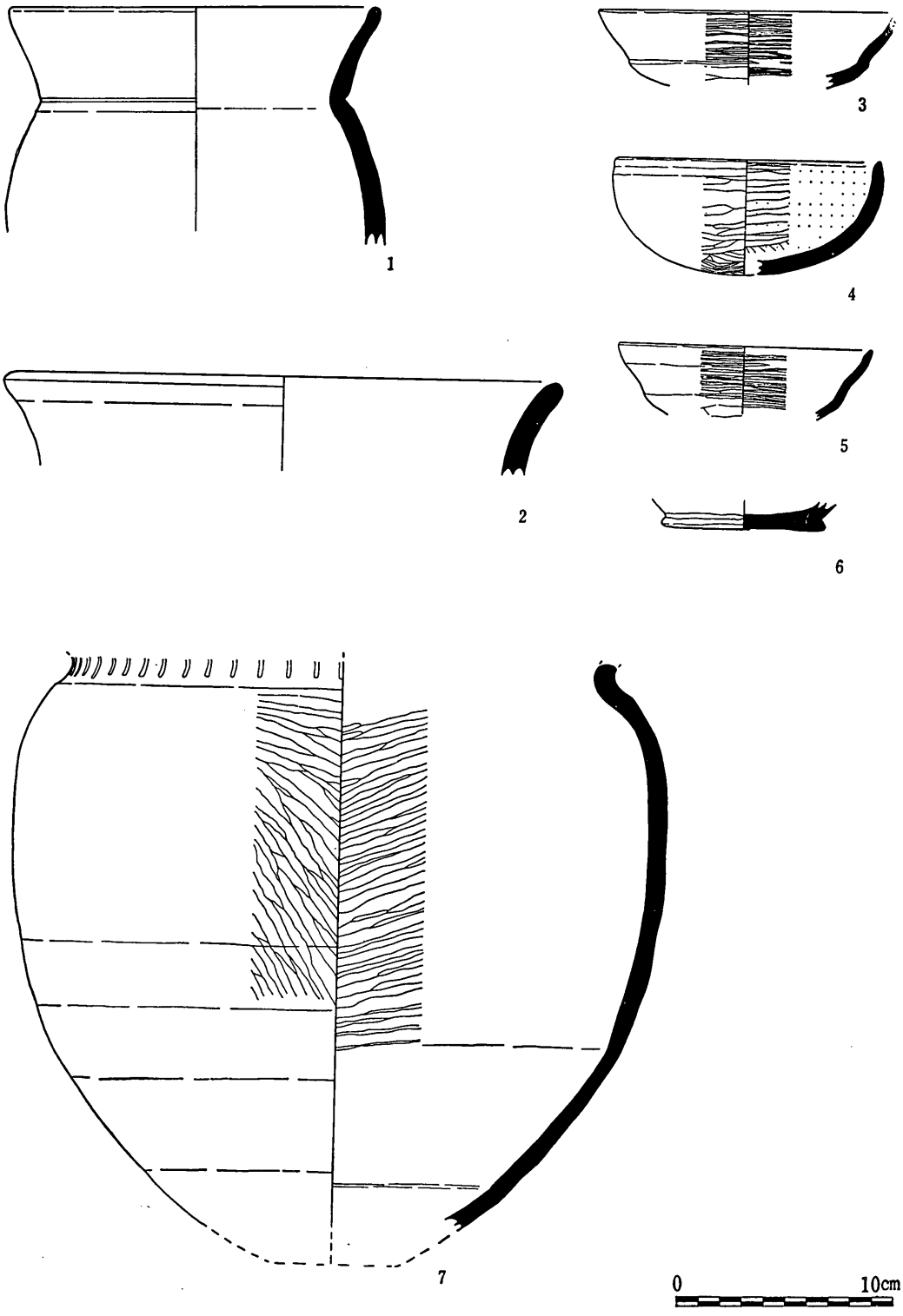
第2表　主要土師器・須恵器一覧（法量は現況を記す）

実測図番号			第 26 図 (1)	第 26 図 (2)	第 26 図 (3)	第 26 図 (4)
出土地点	地　点					
	トレンチ					
	区					
器　形			甕	甕	坏	埦
法量	口縁径 (cm)		17.3	26.1	14.0	12.5
	器高 (cm)		10.2	4.4	3.5	5.2
	最大胴径 (cm)		17.6			
	壁厚 (cm)			1.0	0.6	0.7
	底径 (cm)		0.9			4.2
口縁部	器形		平縁で斜目状に外反口唇部は丸味を呈す。	平縁で外反口唇は丸味を呈す。	平縁で外反口唇は丸味を呈す。	平縁で，わずかに内反口唇は内そぎを呈す。
	整形	表	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ
		裏	部分的にスス付着		ヘラミガキ	ヘラミガキ（内　黒）
胴部	器形		ややふくらむ	欠　損	段を呈す	大きく内反する。
	整形	表	縦位ナデ後部分的に横位ナデ		ヘラケズリ	ヘラミガキ
		裏	横位ハケ目		ヘラミガキ	ヘラミガキ（内　黒）
底部			欠　損	欠　損	丸　底	丸　底
色調			暗茶褐色	茶褐色	暗赤褐色	茶赤褐色
胎土			雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲　母	雲母・石英
焼成			普　通	不　良	普　通	良　好
出土遺構			2住床面（No.20）	2住フク土	2住床面	2住フク土
備考			土師器	土師器	土師器	土師器

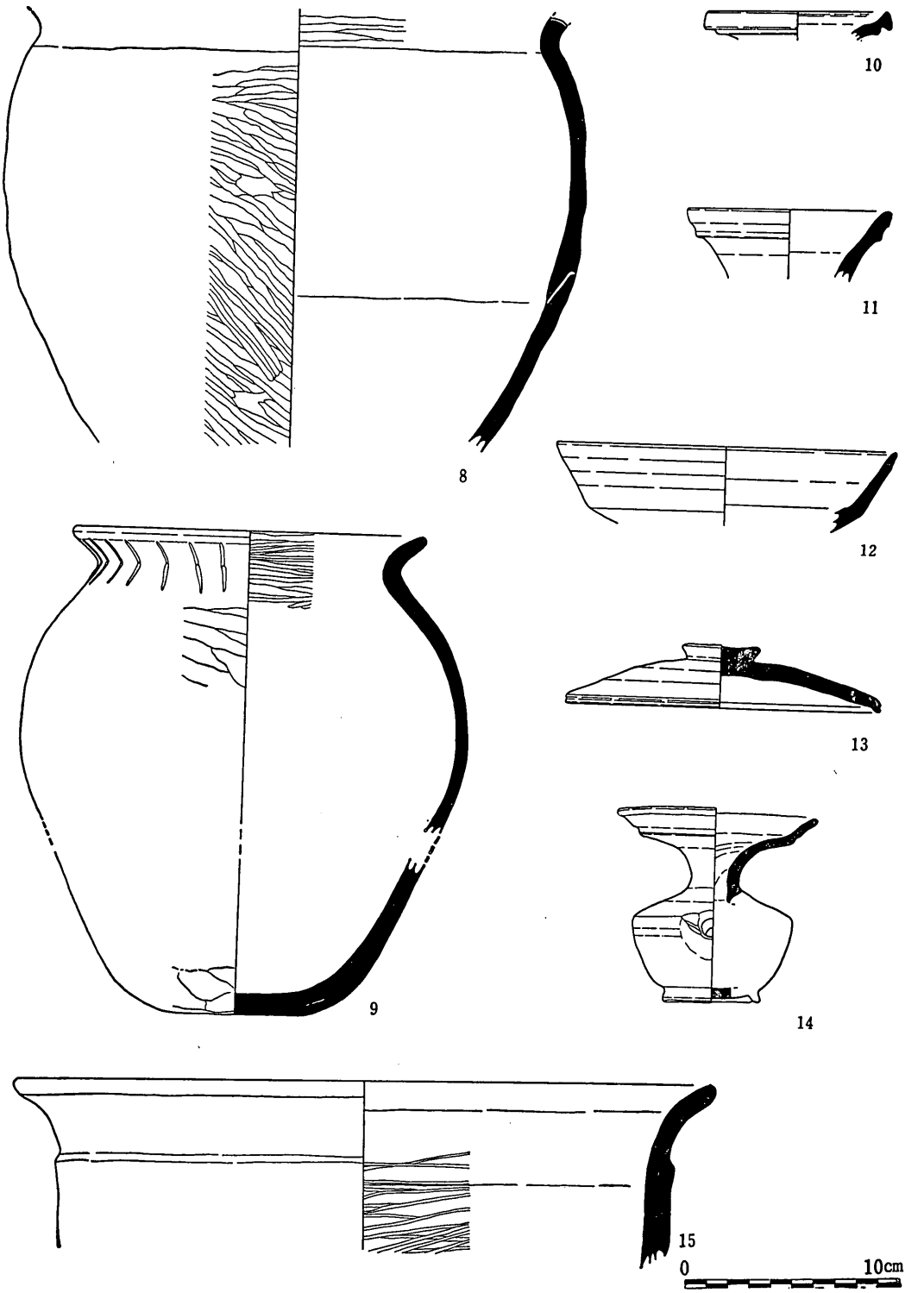
実測図番号			第 26 図 (5)	第 26 図 (6)	第 26 図 (7)	第 27 図 (8)
出土地点	地　点					
	トレンチ					
	区					
器　形			坏	甕	甕	甕
法量	口縁径 (cm)		11.8			
	器高 (cm)		3.3	1.2	28.7	20.5
	最大胴径 (cm)				30.3	27.1
	壁厚 (cm)		0.4	0.8	0.9	0.8
	底径 (cm)			8.6		
口縁部	器形		平縁，斜目に外反，口唇は丸味を呈す。内そぎである。	欠　損	わずかに外反 上部は欠損	わずかに外反 上部は欠損
	整形	表	ヘラミガキ		ヘラによる暗文 横位ヘラミガキ	横位ナデ
		裏	ヘラミガキ		斜位ヘラミガキ	横位ヘラミガキ
胴部	器形		段を呈する	欠　損	ふくらみをもつ	ふくらみをもつ
	整形	表	ヘラケズリ		上部—斜位ヘラミガキ 下部—縦位ミガキ	上部—横位，斜位ミガキ 下部—縦位ヘラミガキ
		裏	ヘラミガキ		斜位ヘラミガキ	上部—荒い縦位ナデ 下部—横位ナデ
底　部			丸　底	平　底	欠　損	欠　損
色　調			暗黒褐色	暗赤褐色	赤褐色	赤褐色
胎　土			雲母・石英	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼　成			普　通	不　良	普　通	普　通
出土遺構			2住床面	2住フク土	2住フク土	2住フク土
備　考			土師器	土師器	土師器	土師器

実測図番号			第 27 図 (9)	第 27 図 (10)	第 27 図 (11)	第 27 図 (12)
出土地点	地　点					
	トレンチ					
	区					
器　形			甕	壺	壺	坏
法量	口縁径 (cm)		16.7	8.7	9.5	15.9
	器高 (cm)		22.7	1.4	3.2	3.8
	最大胴径 (cm)		21.1			
	壁厚 (cm)		0.8	0.5	0.6	0.5
	底径 (cm)		7.0			
口縁部	器形		平縁でくの字状に外反，口唇は丸味を呈す。	平縁で，口唇は外そぎを呈す。	平縁で，斜目に外反し口唇は丸味を呈す。	平縁で，斜目に外反し口唇は丸味を呈す。
	整形	表	ヘラによる暗文	ロクロ	ロクロ	ロクロ
		裏	ヘラミガキ	ロクロ	ロクロ	ロクロ
胴部	器形		ふくらみをもつ	欠　損	欠　損	
	整形	表	上部—横位ミガキ 中部—斜位ミガキ 下部—縦位ミガキ			ロクロ
		裏				ロクロ
底　部			平底（ケズリ）	欠　損	欠　損	欠　損
色　調			赤褐色	灰黄色	灰黒色	灰黒色
胎　土			石英・雲母			
焼　成			不　良	緻　密	緻　密	緻　密
出土遺構			2住フク土	2住フク土	2住フク土	2住フク土
備　考			土師器	須恵器	須恵器	須恵器

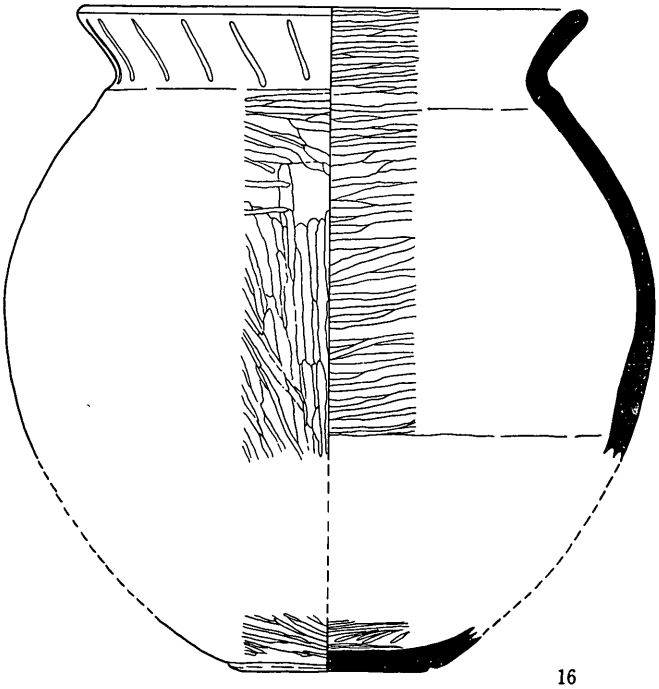
実測図番号			第 27 図 ⑬	第 27 図 ⑭	第 28 図 ⑮	第 28 図 ⑯
出土地点	地　点					
	トレンチ					
	区					
器　形			蓋	瓶	甕	甕
法量	口縁径 (cm)		14.7	9.3	33.1	20.6
	器高 (cm)		2.9	9.0	7.9	26.5
	最大胴径 (cm)			7.5		26.2
	壁厚 (cm)			0.6	1.3	0.7
	底径 (cm)			4.5		8.0
口縁部	器　形			平縁で大きく外反し，頸部は短い。	平縁で外反し，口唇は丸く外そぎを呈す。	平縁でくの字状に外反口唇は丸味を呈す。
	整形	表	ロクロ	ロクロ	ヨコナデ	ヘラの暗文 ヨコナデ
		裏	ロクロ	ロクロ	ヨコナデ	ヨコナデ
胴部	器　形			胴部には肩張りがあり，注口は肩部にうがかれている。	大部分欠損	大きくひろがる 下部欠損
	整形	表	ロクロ	ロクロ	横位ナデ後縦位ミガキ	縦位ヘラミガキ
		裏	ロクロ	ロクロ	横位ナデ 横位ミガキ	横位ヘラミガキ
底　部				低い高台付	欠　損	木葉痕
色　調			灰黒色	灰黒色	黒褐色	明茶褐色
胎　土					雲母・石英・長石	雲母・石英・長石
焼　成			緻　密	緻　密	良　好	不　良
出土遺構			10住フク土	10住フク土	グリット	グリット
備　考			須恵器	須恵器	土師器	土師器



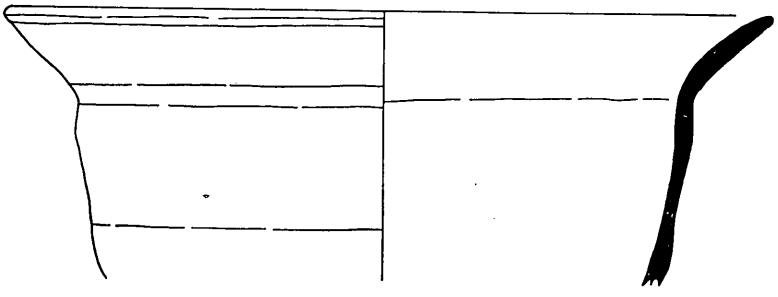
第26図　土師器実測図　2住（1～7）



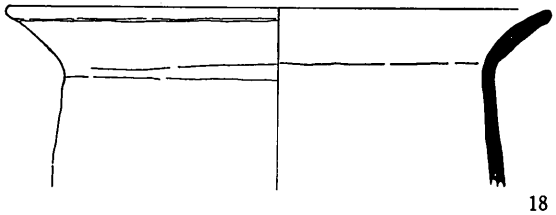
第27図　土師器・須恵器実測図　2住（8～12）　10住（13～14）　グリット（15）



16



17



18

第28図　土師器実測図　グリット（16～18）

第2節　内耳土器・中世陶磁器

第29図(1)は第1号竪址覆土上層面より出土した内耳質系の土器である。出土した時点では土器片が散乱していた。これらを集めて復元してみると，ほぼ完型に近い状態になった。口縁径33.1cm，器高19.4cmを測る。内耳の痕跡はどこにもみあたらず，したがって当初より付けなかったものと思われる。深い鍋であることからして，中世の前半期に位置づけが可能と思われる。

第29図(2)は，美濃産の鉄釉長頸小壺と思われ，桃山期ごろに位置づけられると思われる。第1号竪址の南側より発見された。

第29図(3)は室町中期ごろの古瀬戸灰釉片口おろし鉢と思われる。灰釉の光沢は美しく，釉薬の状態は外面の破片上半部に，内面は外面とほぼ同じくらいの所にかけられていた。おろし目のある部分には釉薬は全くかけられていない。第1号竪穴南側のピット内より出土。

第29図(4)は堀址より出土した古瀬戸灰釉平鉢と思われ，年代は室町中期ごろと推測できえよう。口縁径は33cmくらいを測る。釉薬の状態は内，外面ともに破片上部にあり，光沢は見事である。

第29図(5)は第1号住居址の柱穴内から出土した室町中期ごろの古瀬戸天目茶碗であり，口縁径は11.5cmを測る。口縁はやや外反気味を呈す。(6)は堀址内より出土した古瀬戸天目茶碗であり，やや内反気味を，口唇は丸味を呈している。口縁径は12.0cmを測る。

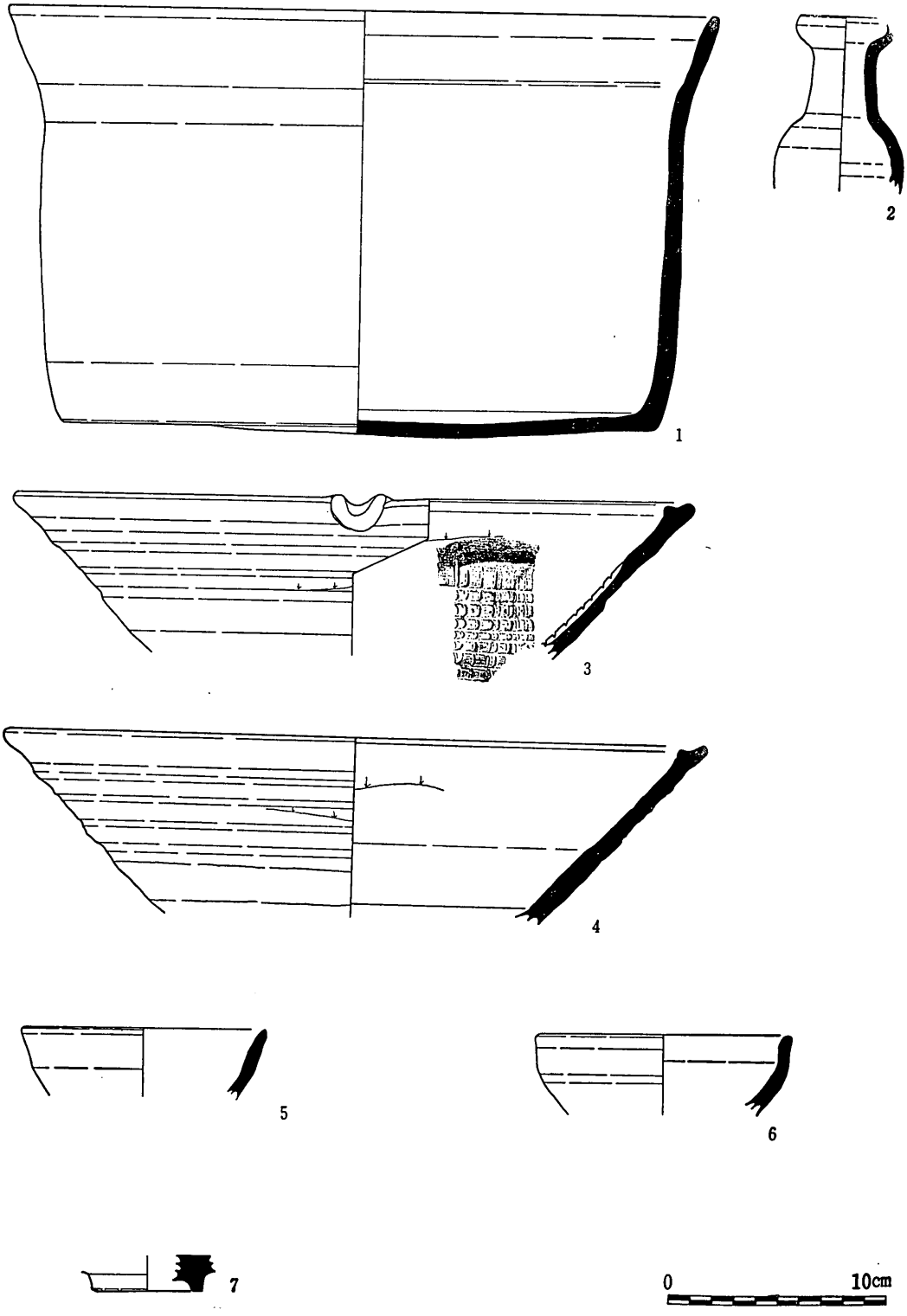
第29図(7)は第1号竪址より出土した中国宋産の青磁であると思われる。その器型については細片であるために不明である。青磁釉のかかりは極めて厚い。　（飯塚政美）

第3節　石　　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図・番号・名称・器形・石質・出土遺構等である。　（飯塚政美）

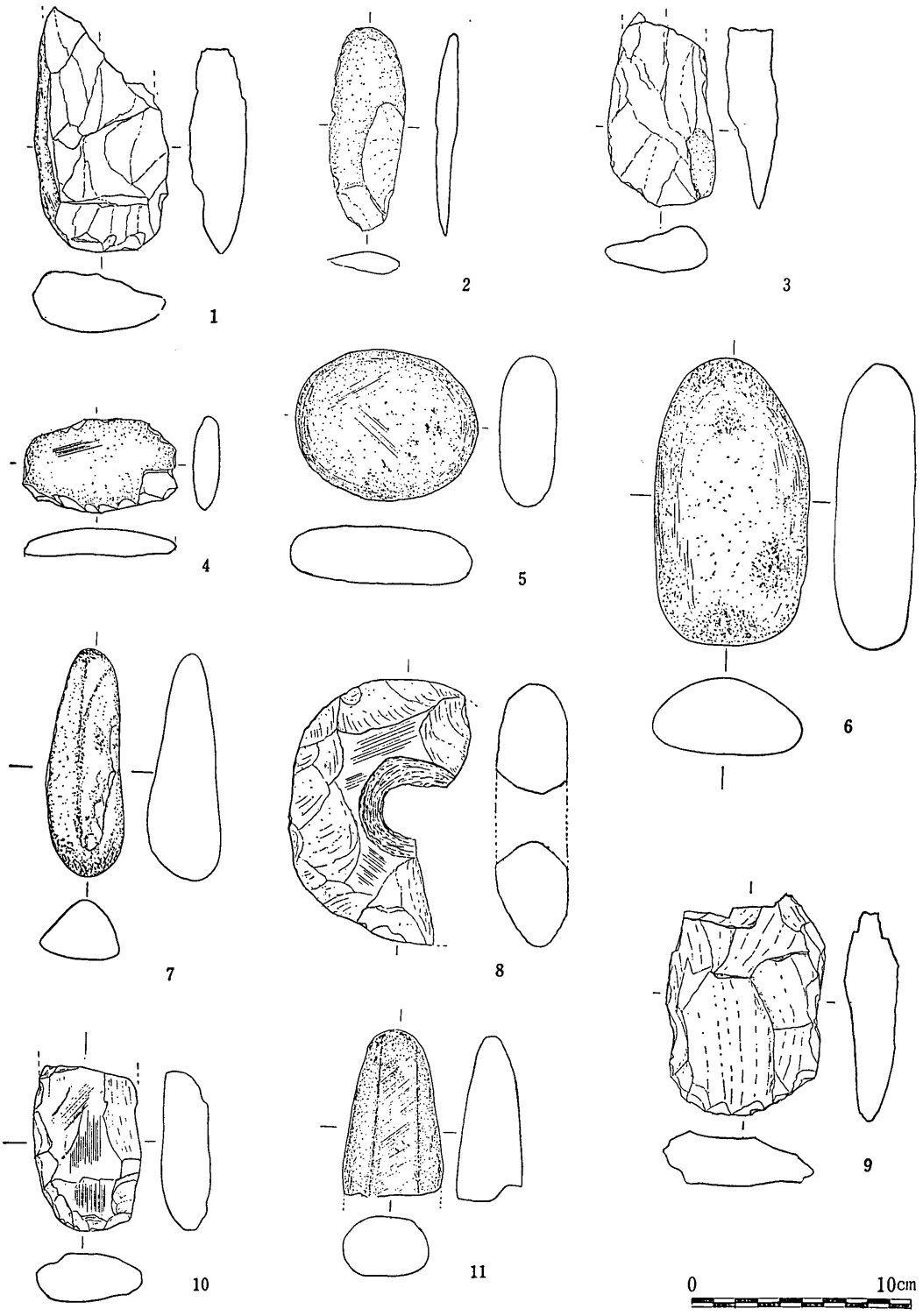
第3表　主要石器一覧

図	番号	名称	器形	石質	出土遺構
第30図	1	打製石斧	撥形	硬砂岩	第1号住居址
〃	2	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	3	〃	〃	硬砂岩	〃
〃	4	横刃型石器		緑泥岩	〃
〃	5	磨石		硬砂岩	〃
〃	6	〃		〃	第2号住居址
〃	7	敲石		粘板岩	〃
〃	8	環状石斧		〃	〃
〃	9	打製石斧	撥形	緑泥岩	第3号住居址
〃	10	〃	〃	硬砂岩	〃
〃	11	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	〃
第31図	12	磨石		硬砂岩	〃
〃	13	石包丁		粘板岩	〃
〃	14	打製石斧	撥形	緑泥岩	第4号住居址

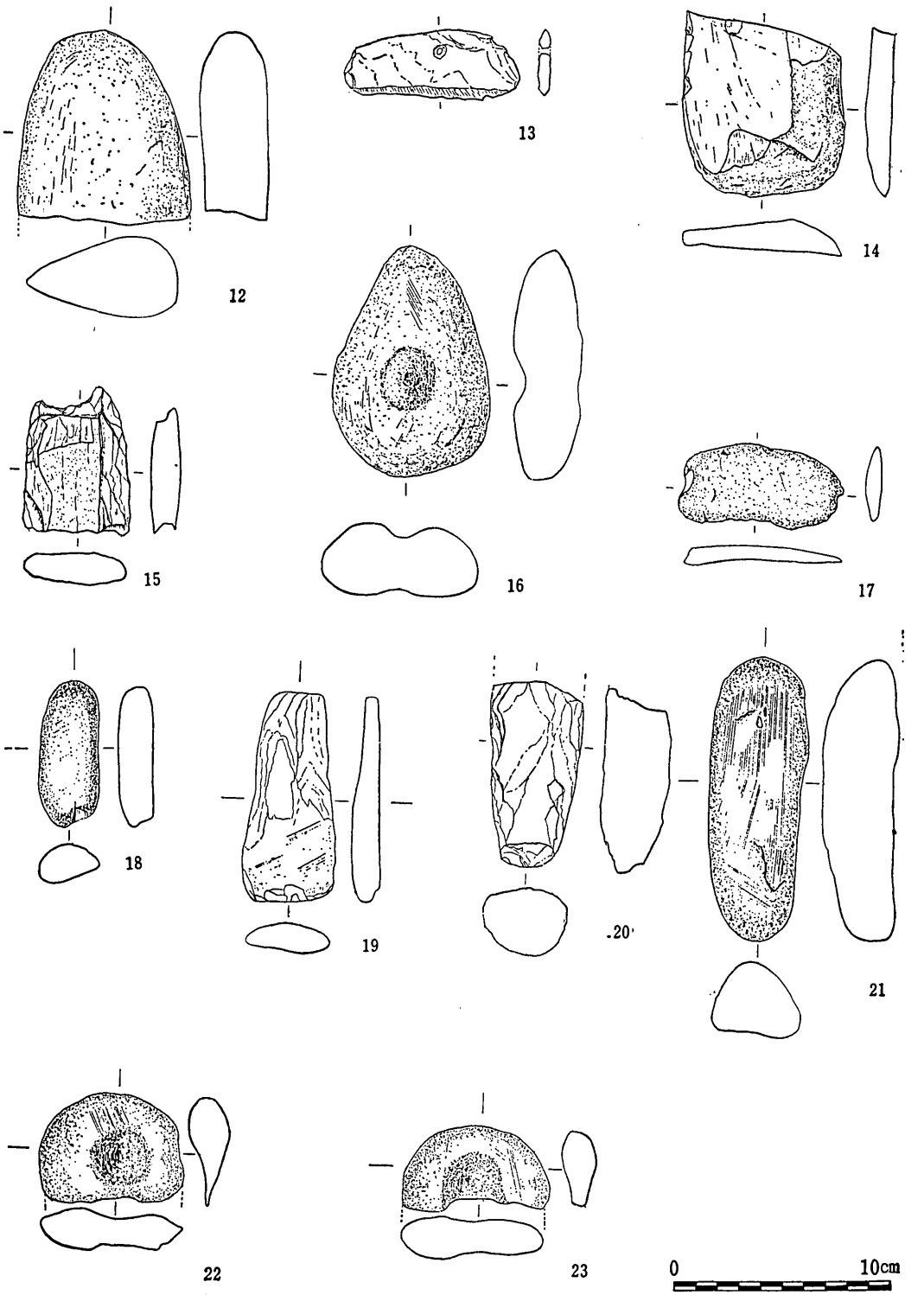


第29図　内耳土器・中世陶磁器実測図

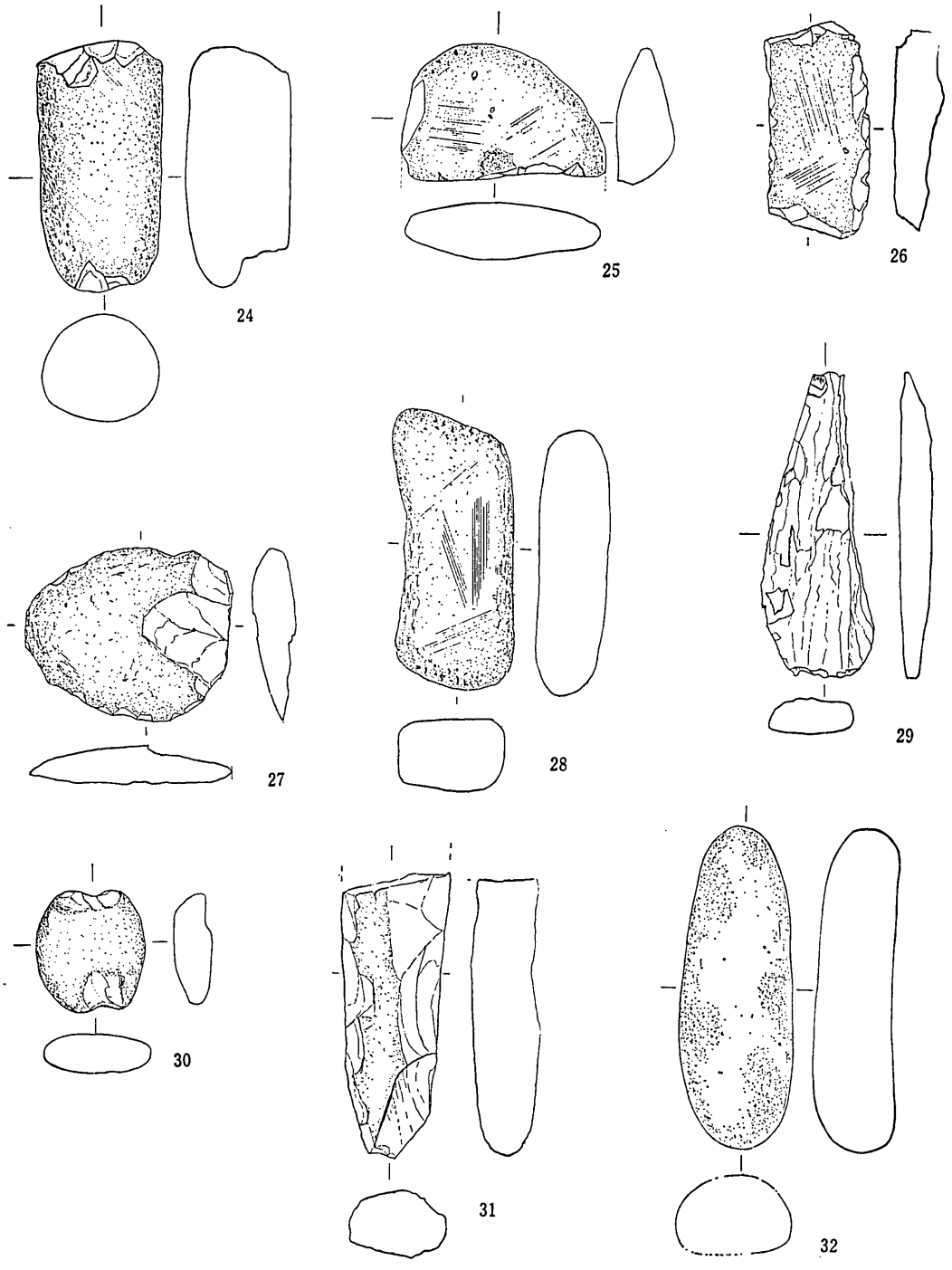
図	番号	名称	器形	石質	出土遺構
第31図	15	打製石斧	短冊形	緑泥片岩	第4号住居址
〃	16	凹石		砂岩	〃
〃	17	石包丁		緑泥岩	〃
〃	18	小型円形状石器		硬砂岩	第6号住居址
〃	19	打製石斧	撥形	緑泥岩	第7号住居址
〃	20	〃	短冊形	硬砂岩	〃
〃	21	磨石		硬砂岩	〃
〃	22	凹石		〃	〃
〃	23	〃		〃	〃
第32図	24	磨製石斧		片麻岩	〃
〃	25	横刃型石器		硬砂岩	〃
〃	26	打製石斧		緑泥岩	第8号住居址
〃	27	横刃型石器		〃	〃
〃	28	砥石		硬砂岩	〃
〃	29	打製石斧	撥形	緑泥岩	〃
〃	30	石錘		硬砂岩	〃
〃	31	打製石斧	短冊形	〃	第12号住居址
〃	32	磨石		〃	第2号竪穴周辺
第33図	33	打製石斧	撥形	〃	堀址
〃	34	凹石		緑泥岩	〃
〃	35	打製石斧	撥形	硬砂岩	〃
〃	36	磨製石斧	定角形	緑泥岩	〃
〃	37	凹石		硬砂岩	〃
〃	38	磨石		緑泥岩	〃
〃	39	円形状石器		〃	〃
〃	40	横刃型石器		〃	〃
〃	41	〃		〃	〃
〃	42	〃		硬砂岩	〃
〃	43	石錘		〃	〃
〃	44	〃		〃	〃
第34図	45	横刃型石器		緑泥岩	〃
〃	46	環状石斧		〃	〃
〃	47	砥石		粘板岩	〃
〃	48	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	〃
〃	49	敲石		硬砂岩	〃
〃	50	〃		〃	〃
〃	51	磨石		緑泥岩	〃
〃	52	横刃型石器		硬砂岩	〃
〃	53	石鏃		黒耀石	第2号住居址
〃	54	〃		〃	第7号住居址



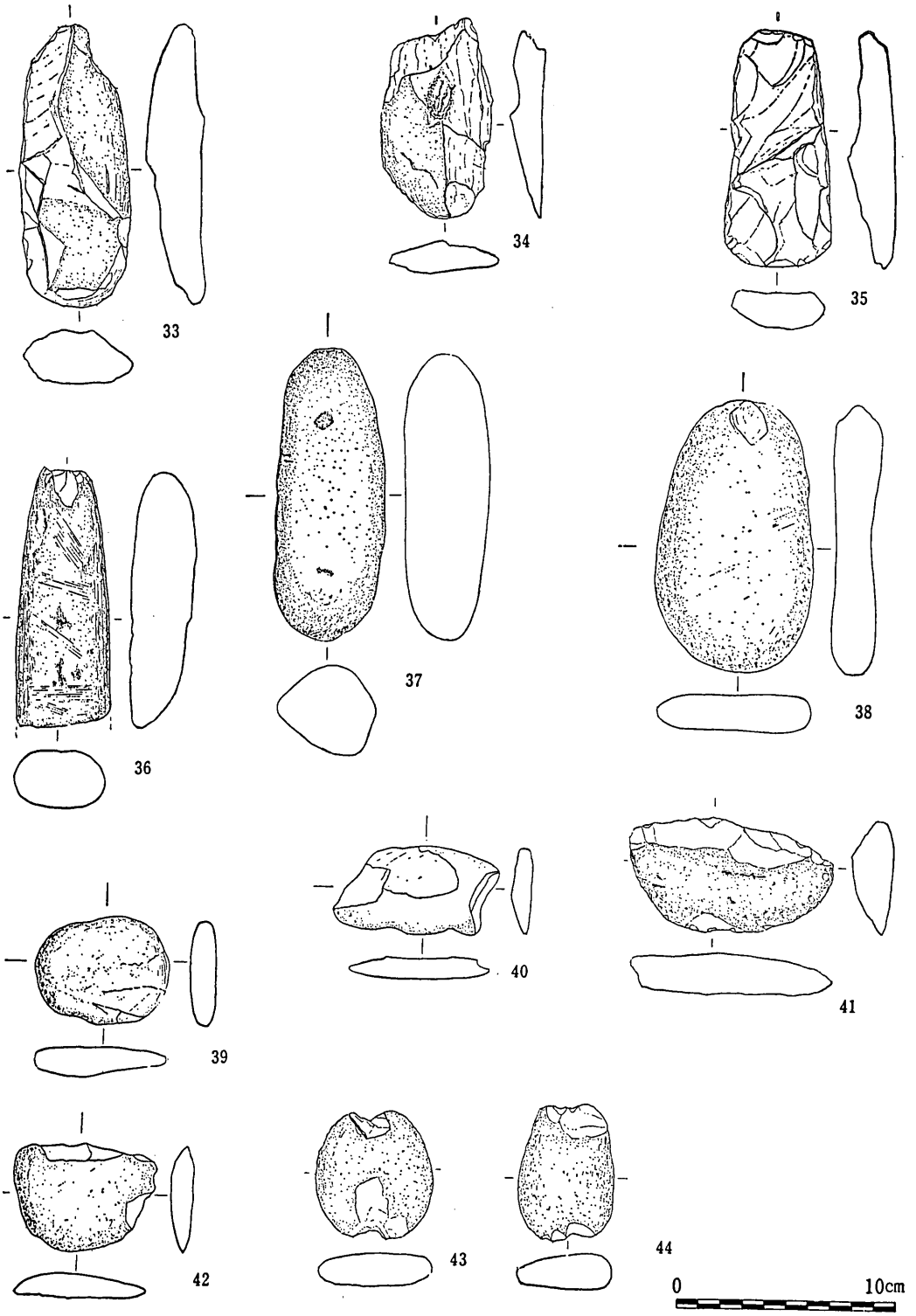
第30図　石器実測図　1住（1～5）　2住（6～8）　3住（9～11）



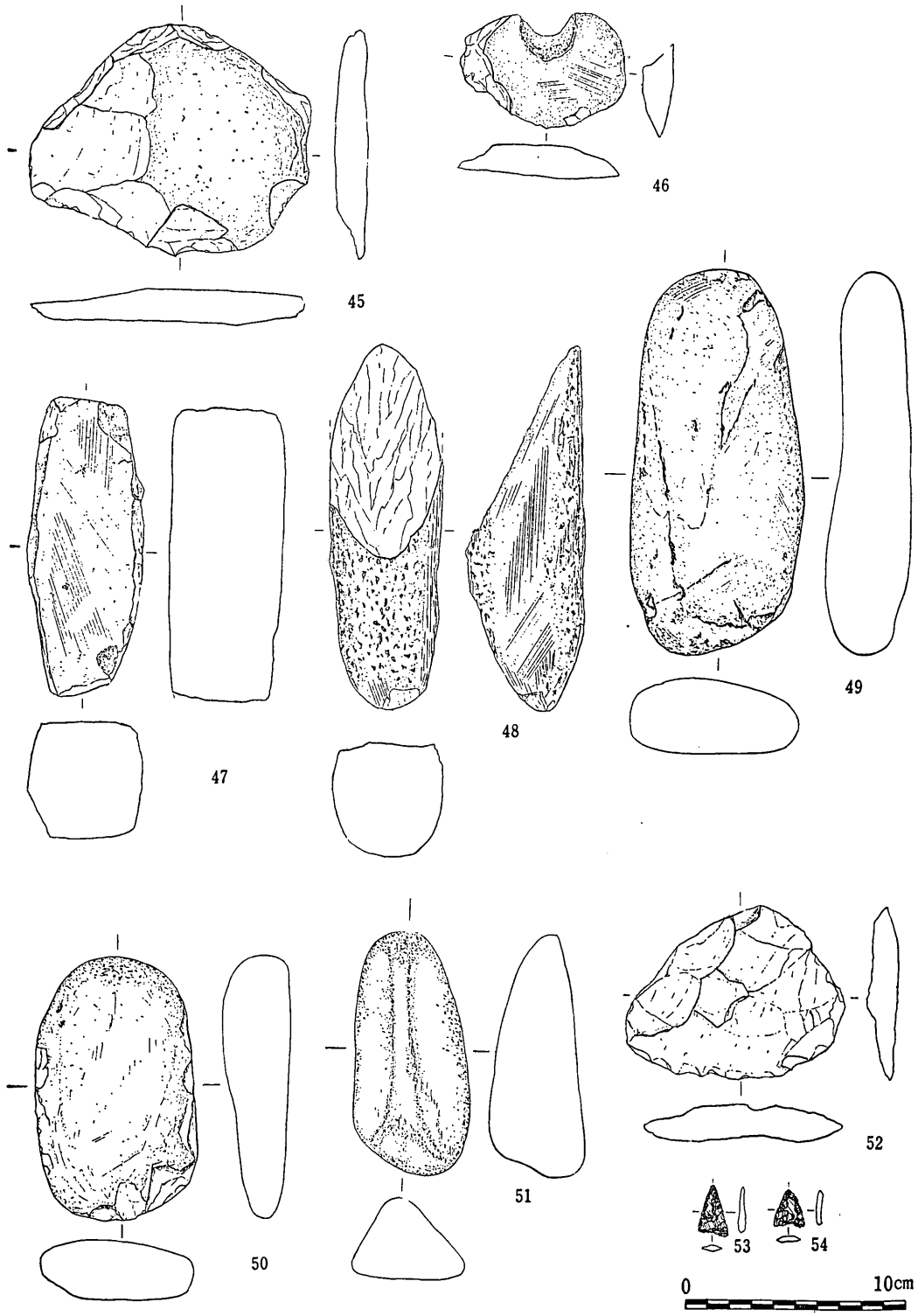
第31図　石器実測図　3住（12～13）　4住（14～17）　6住（18）　7住（19～23）



第32図　石器実測図　7住（24～25）　8住（26～30）　12住（31）　第2号竪穴周辺（32）



第33図　石器実測図　堀（33～44）



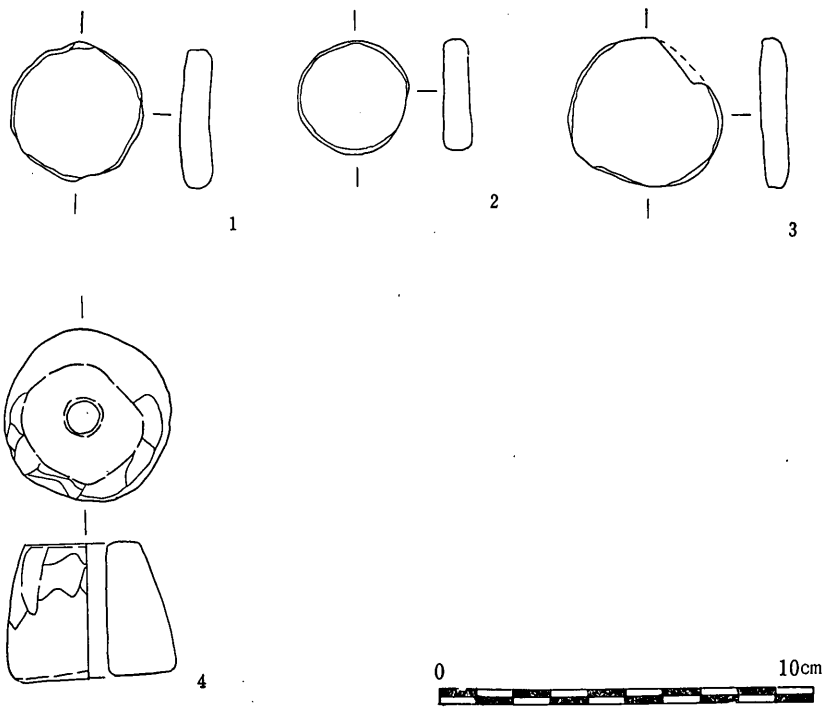
第34図　石器実測図　堀（45～47）　グリット（48～52）　2住(53)　7住(54)

第4節 土 製 品（第35図）

（1～3）は土器片円盤であり，ここに掲載した3個が出土している。これらは土器の胴部か底部を円形に加工したものであり，したがって周縁は良く磨かれている。直径は1では3.5cm，2では3cm，3は一部分は欠損しているが4cmくらいをそれぞれ測定できる。1はグリット，（2～3）は第8号住居址出土である。

（4）は紡錘車であり，土製である。截頭円錐形を呈し，中央に直径約1cmの真円ではないが孔があけられている。

大きさは下部の直径4.3cm，上部の直径3.1cm，厚さ3.6cmで，上部，下部，側面は研磨されている。第2号住居址の床面より出土している。組成土は土師質に類似しているものと思われる。



第35図 土製品実測図

第5節 石 製 品（第36図）

（1～2）はともに石製の紡錘車である。（1）は砂岩で，平坦状を呈し，中央に推測直径7㎜の真円に近い孔があけられている。（1）は大部分が欠損しているが，図上復元によると，その大きさは下部の直径5.7cm，上部の直径5.8cm，厚さ0.7cmをそれぞれ測定できる。上面と側面に研磨痕が認められる。第2号住居址出土である。

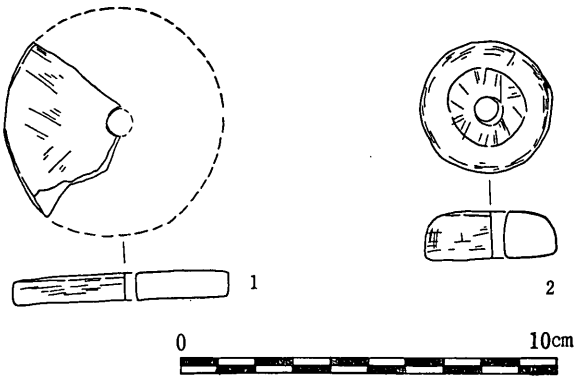
（2）は灰色がかった滑石製で，やや台形状に近い形を呈す。中央に直径7㎜程の孔があけられている。上部の直径3.1cm，下部の直径3.5cm，厚さ1.3cm程をそれぞれ測る。上面と側面に研磨痕が走行している。上部には稜が全周している。第5号住居址出土である。（飯塚政美）

第6節　鉄製品（第37図）

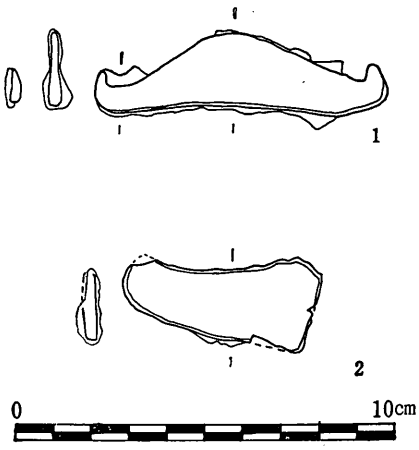
（1）は第1号竪穴の覆土上層面より出土した鉄製品である。腐食状態が激しく，ボロボロで鉄片が剝落しやすく，さびがはげしかった。形態からして火打金に使用したものと思われる。

（2）は第2号住居址の床面上より出土している。状態は(1)とほぼ同じようである。腐食状態が進んでいるので何に使用したものかは全く不明である。

（飯塚政美）



第36図　石製品実測図



第37図　鉄製品実測図

第Ⅳ章　ま　と　め

1　城の腰遺跡は伊那市西春近地区では屈指の遺跡として知られており，ここに農業構造改善事業が実施されることになり，伊那市教育委員会が主体となって，発掘調査は昭和57年９月21日～10月27日にわたって行われた。

2　遺跡は広範な面積であり，発掘調査期間・費用は限定され，また耕地による制限があったために小範囲の調査に終わった。小範囲の地区決定にあたっては表面採集及び付近の耕作者の意見に従った。特に表面採集による表採密度の高い区域を選定した。

3　選定した区域に所在する住居址は縄文中期後葉１軒，弥生後期９軒，奈良時代２軒である。その他の遺構としては中世の堀址，中世の竪穴２基，中世の窖址１基である。グリット調査ではさらにいくつかの遺構の存在が予想されたが前述した理由により調査未了となり誠に残念であった。

4　縄文中期の住居址は加曽利期の古い方に属していた。時期的にみて遺物が一般的に多いが，この住居址に関しては土器片及び石器はともに少なかった。

5　弥生後期の住居址は狭い範囲内に重複して９軒発見された。住居址の数からみれば集落がある程度展開できると思われそうであるが前述したように狭い範囲の発掘のため，集落に関しての結論は導き出せない。ただし全面発掘を実施したならば相量数の住居址が発見されることは間違いないものと思われる。全般的にみて住居址の発見された地区は湧水地帯と沢に最も近い所に位置している。

6　奈良時代の住居址は２軒とも弥生後期の住居址と切り合い関係にあり，また，検出された場所が用地外と接していたために全面発掘は不可能であった。したがって，これらの住居址の実態は把握できなかった。

7　中世に関した遺構は住居址群とは離れた位置に検出された。堀址は複雑に入り込んでいたが，これはこの遺跡と近接している安岡城と密接な関係があるものと思われる。堀の配置状況から察してみて，城の腰遺跡のある地点は安岡城の外郭に含まれていることは間違いないものと思う。

第１号竪穴，第２号竪穴は地下倉址的な色彩が強いものと思われる。この二つの竪穴周辺には柱穴群が存在し，柱穴群の東側に窖址が検出された。この配置状況は武士の居館を思わさせる。つまり柱穴群を利用した掘立て柱状の建物を推測でき，前述した竪穴・窖址と一体に考えてみるべきであろう。

出土した弥生式土器は図上復元及び完型品に近いのは埋甕炉に利用されたものだけであった。土器の器型としては大部分が甕型土器であり，これらに混じってわずかに壺型土器高坏型土器が出土した。これらの土器は座光寺原式とか中島式とか呼ばれている一派である。

出土した土師器・須恵器は奈良時代に属しそれらの器型は甕型・坏・埦・壺・蓋・鞴等であり，全般的に破片が多く，図に掲載したのは図上復元に基づくものと記しておく。これらの遺物のうち

で第10号住居址より出土した碗は優品であった。器型からみると，奈良時代よりも古いようにみうけられるが，住居址内の伴出土器からみて奈良時代と決めたわけである。一種の伝世品とも推測できる。

中世陶磁器としては桃山期の美濃産鉄釉長頸小壺，室町中期ごろの古瀬戸灰釉片口おろし鉢，室町中期ごろの古瀬戸灰釉平鉢，室町中期ごろの古瀬戸天目茶碗，中国宋産の青磁である。

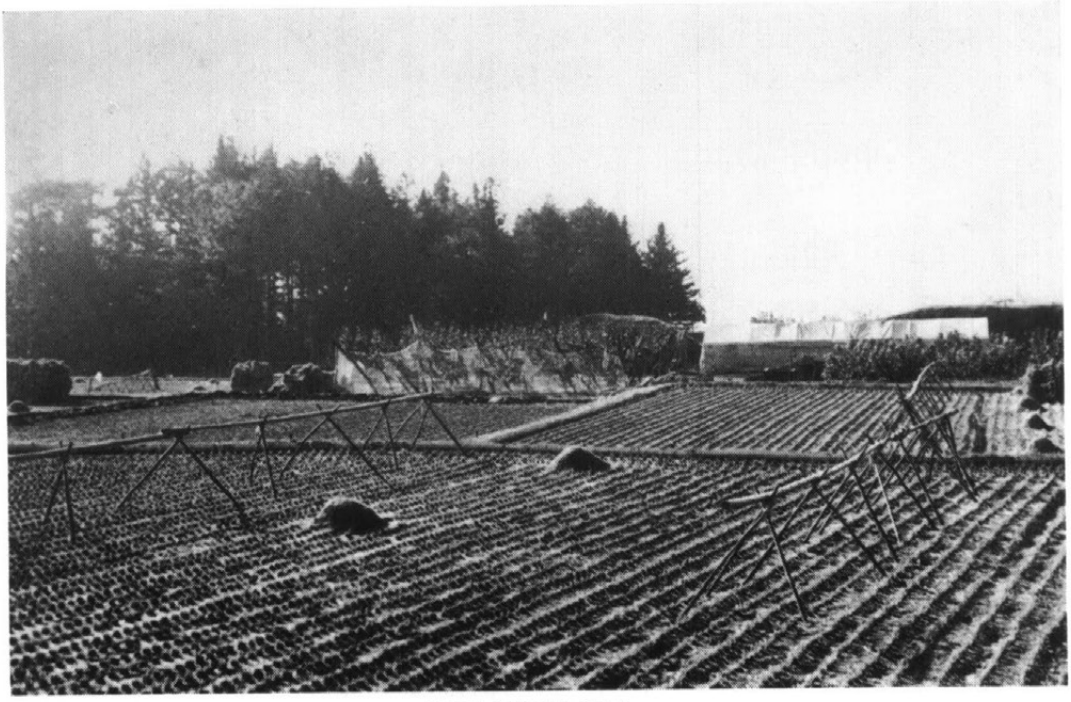
特殊な遺物としては土製円板，石製の紡錘車２点，土製の紡錘車１点が出土している。

終わりに，今次調査にあたった伊那市教育委員会の誠意と，調査全般にわたり地主との交渉にあたった酒井岩夫氏，遺物の整理，製図を引受けた小池孝をはじめ北原一喜，池上大二，赤羽幸寿，保科徳子，白鳥あき子，建石紀美子の諸氏の熱意と努力，県教育委員会文化課の御指導，地域の方々の御協力によって予期以上の成果をあげ得たことは，まことにありがたいことであった。

（飯塚政美）

図　版

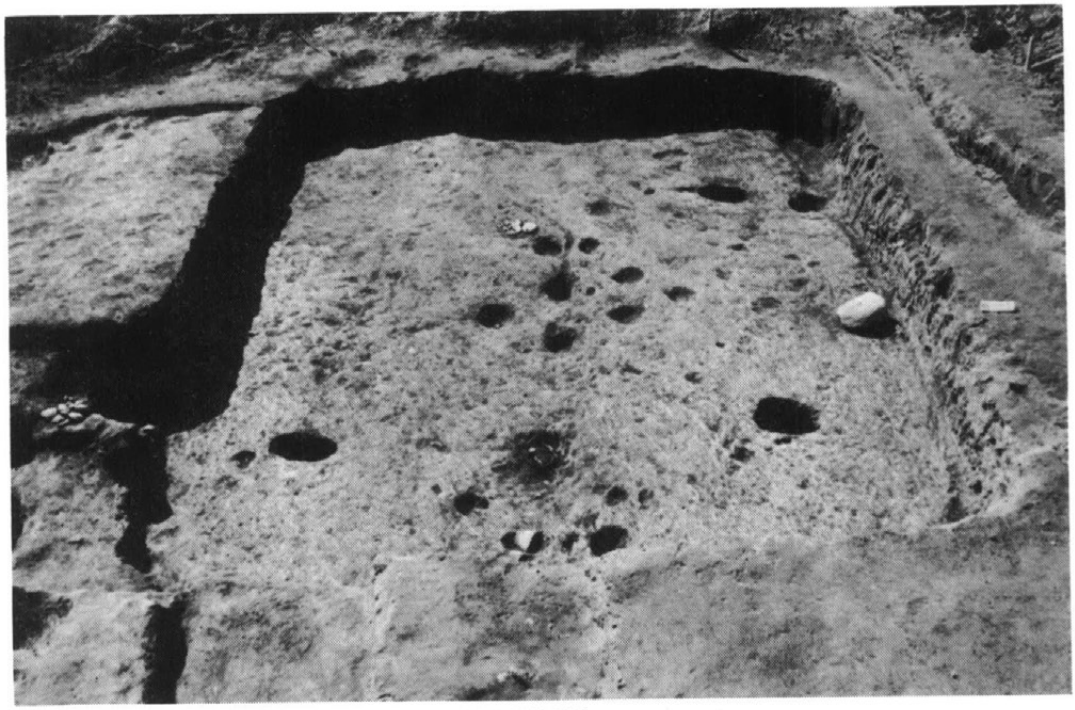
遺跡地を北東より眺む



遺跡地を北側より眺む

遺構配置

第7・8・9号住居址

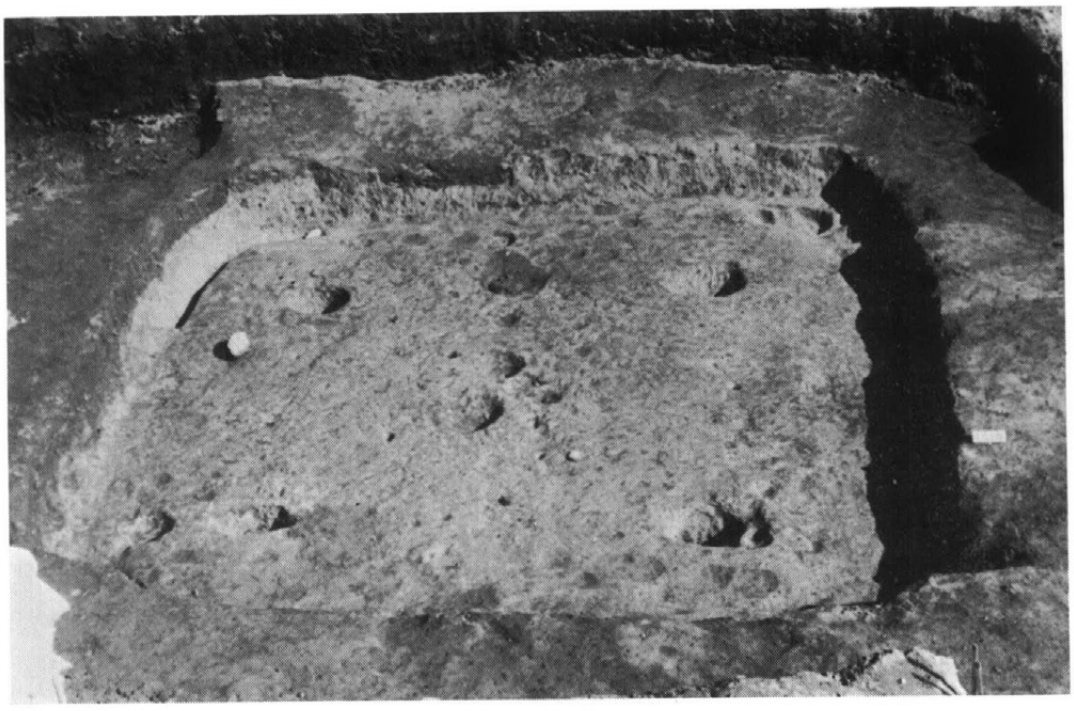


第1号住居址

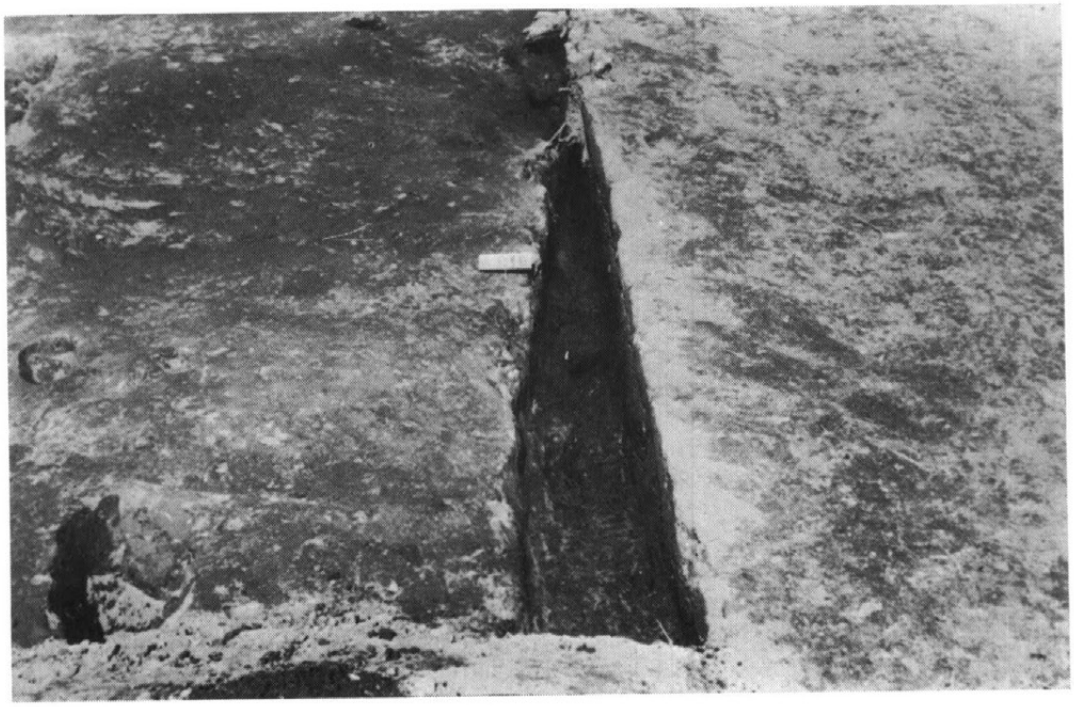
第2・3・5・6号住居址

第3・5・6号住居址

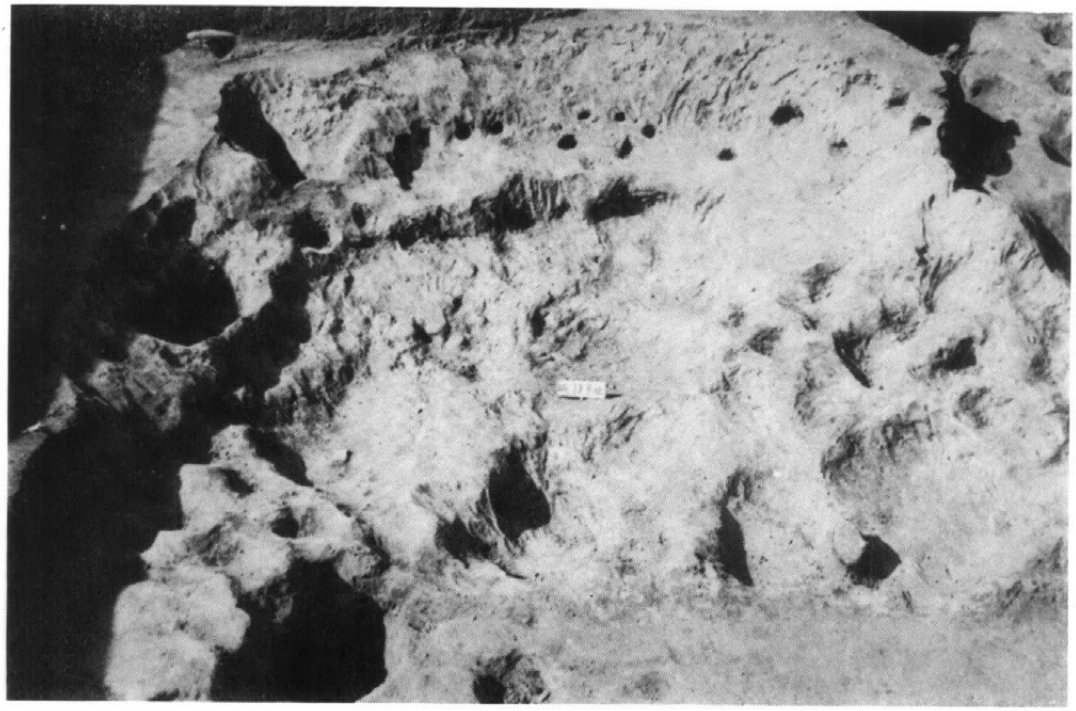
第4号住居址



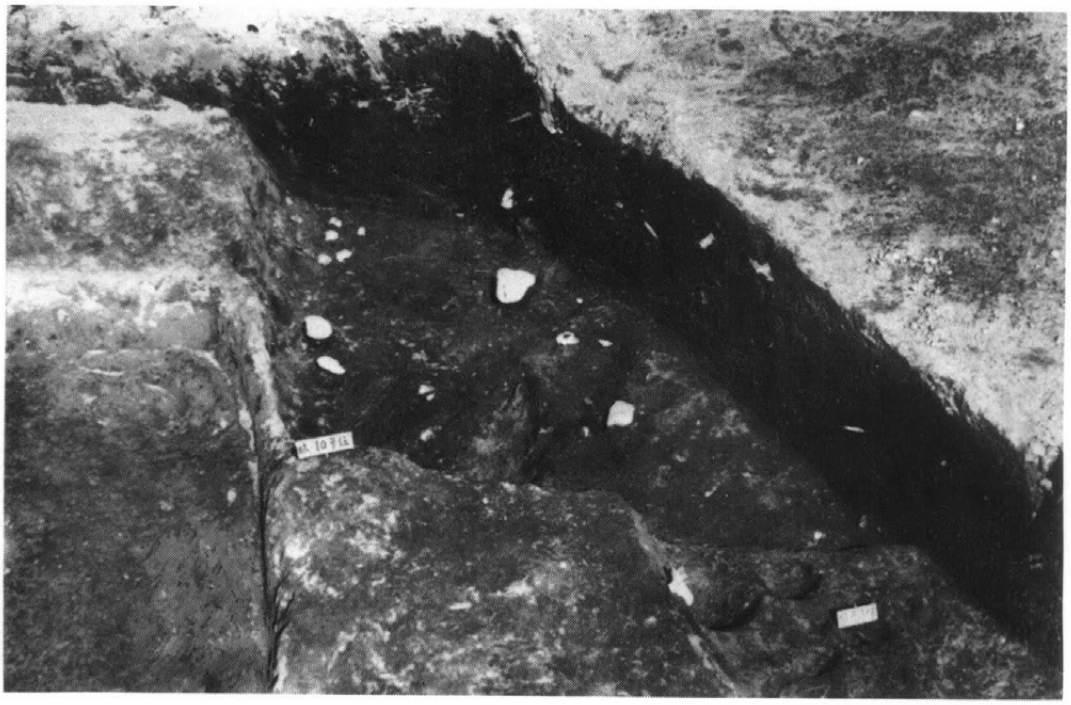
第７号住居址



第11号住居址



第12号住居址



第10号住居址

堀　址

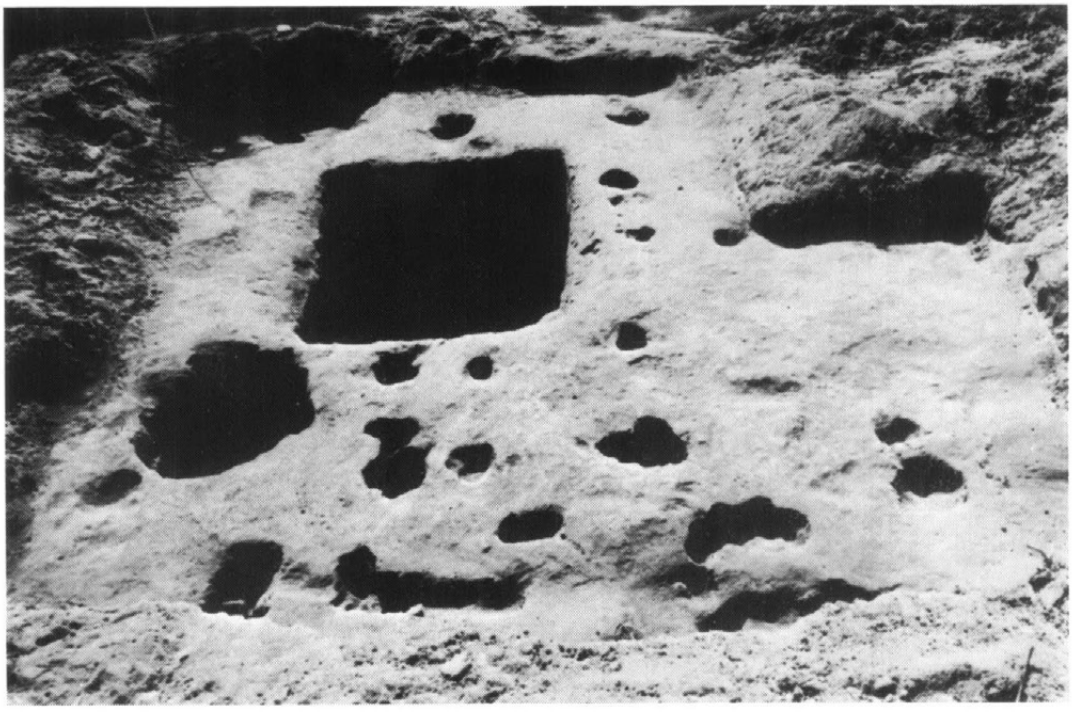
堀　址

堀　址

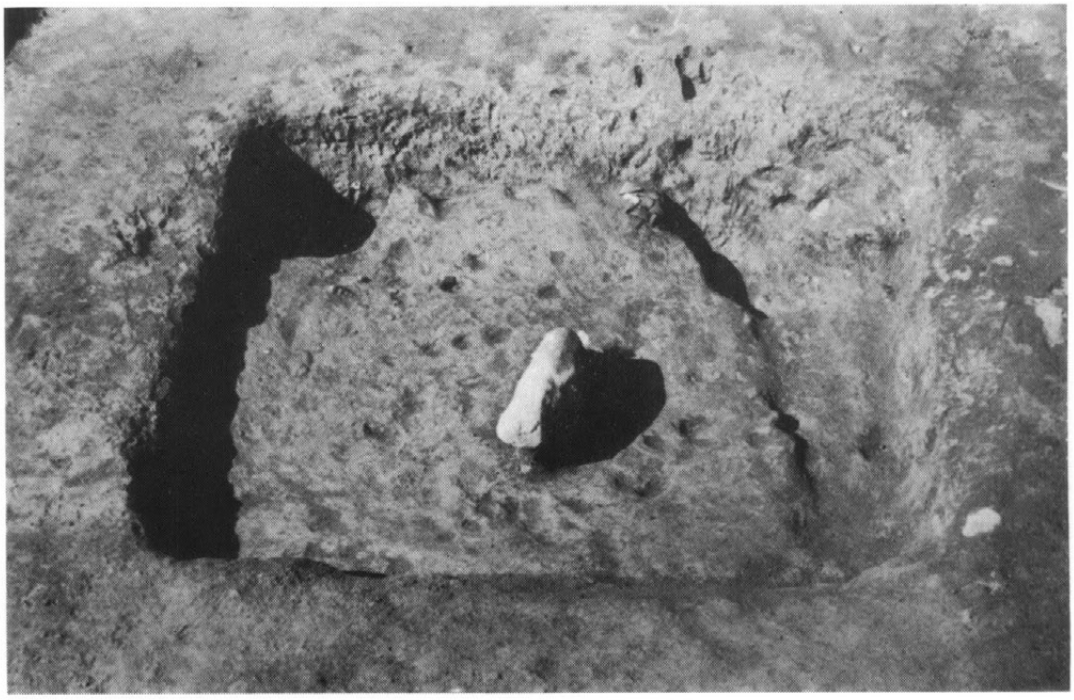
堀址断面

堀址断面

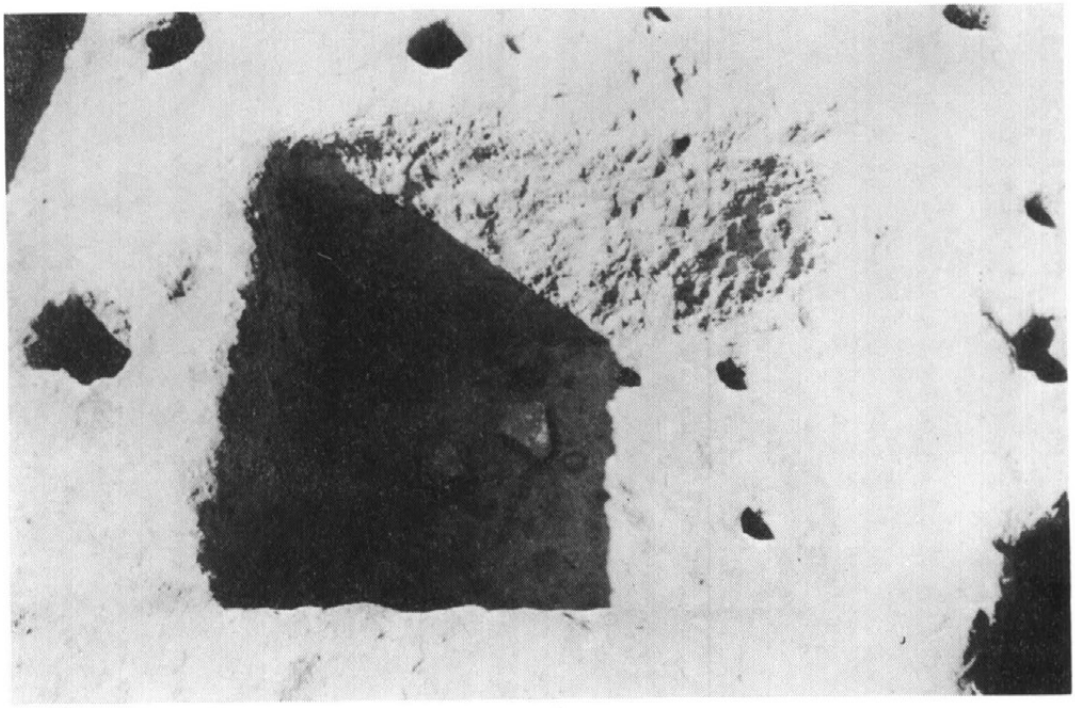
堀址断面



第１号竪穴・第２号竪穴・第１号窖址配置

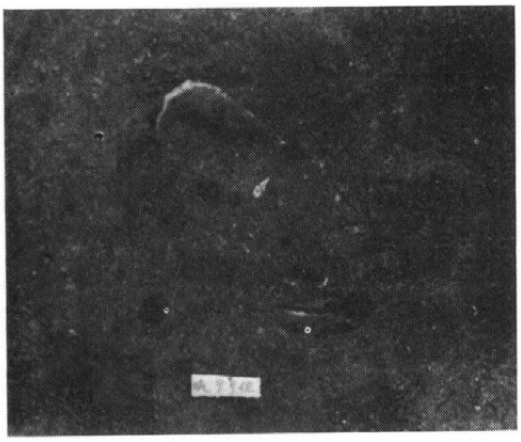


第１号竪穴



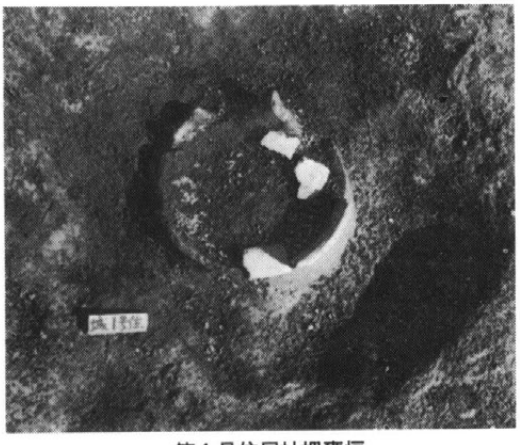
第2号竪穴

第1号窖址

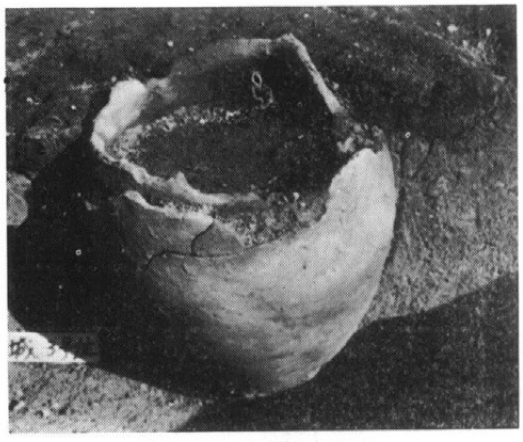


第 9 号住居址炉址

第 3 号住居址埋甕炉



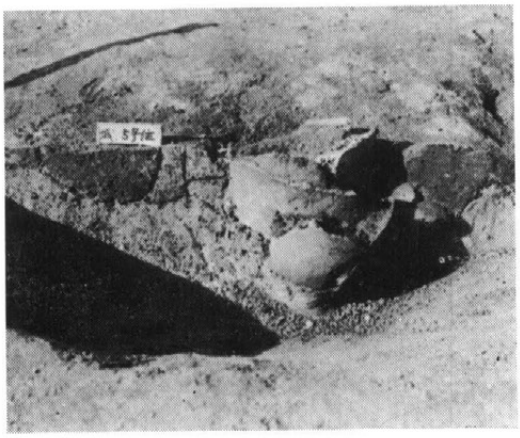
第 1 号住居址埋甕炉



第 3 号住居址埋甕炉断面

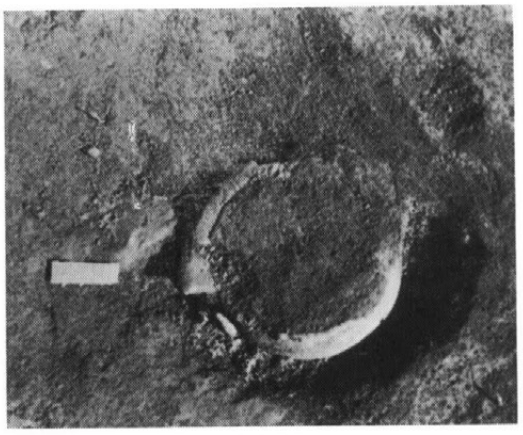
第 1 号住居址埋甕炉断面

第 5 号住居址埋甕炉

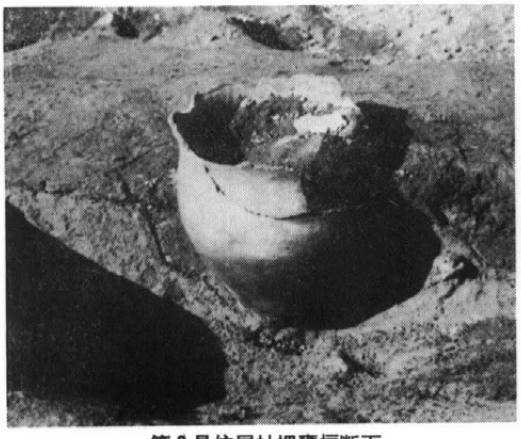


第5号住居址埋甕炉断面

第6号住居址埋甕炉



第7号住居址埋甕炉

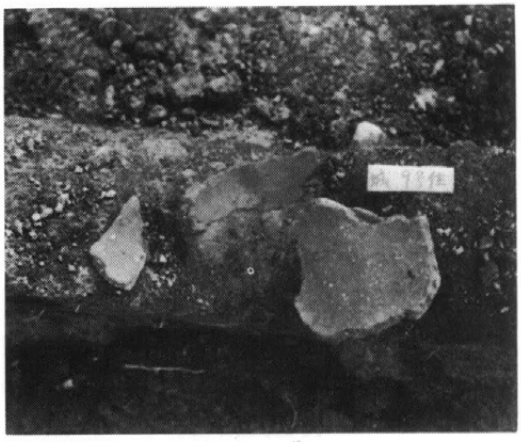


第6号住居址埋甕炉断面

第7号住居址埋甕炉断面

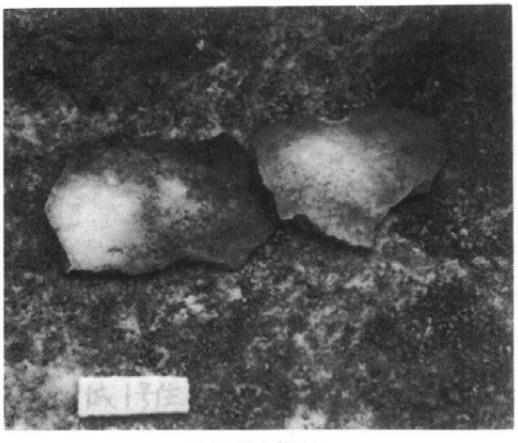
図版一四　遺物出土状況

土器出土状況

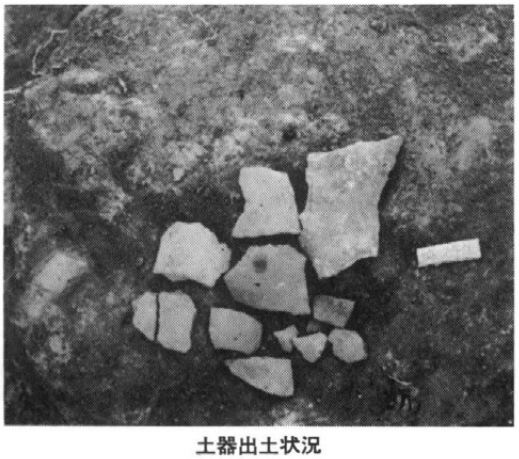


土器出土状況

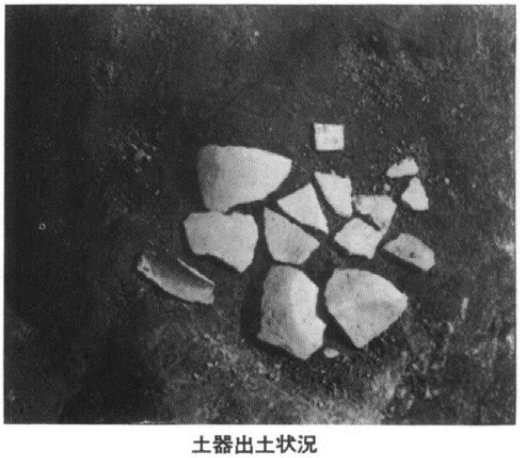
土器出土状況



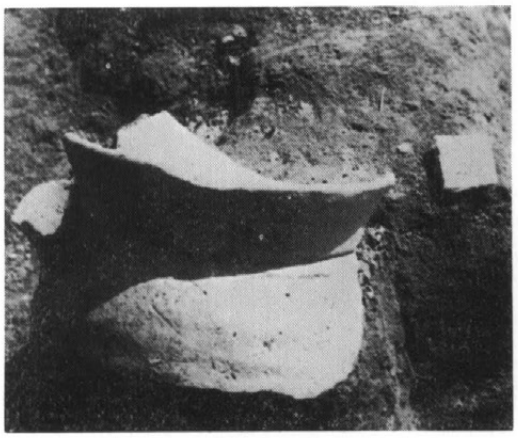
土器出土状況



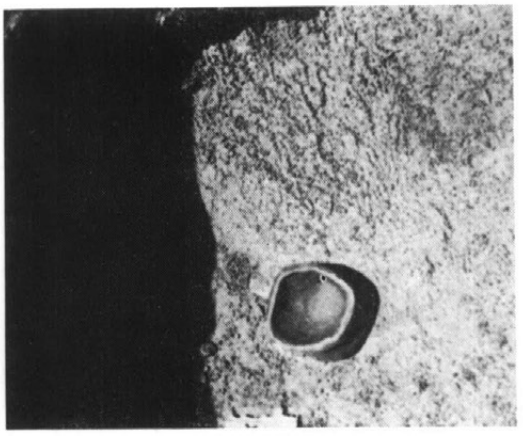
土器出土状況



土器出土状況



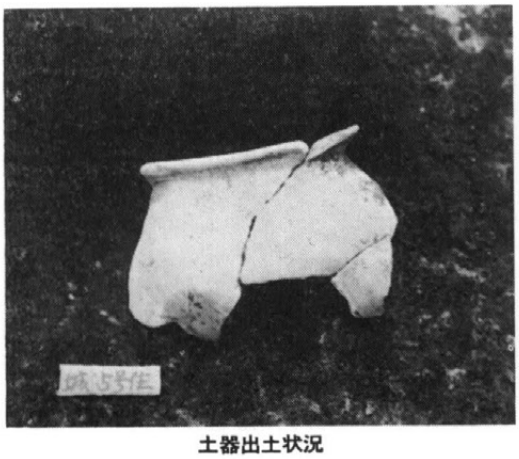
土器出土状況



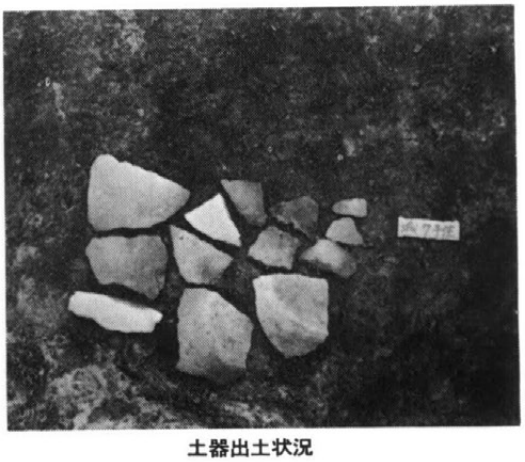
土器出土状況

土器出土状況

土器出土状況

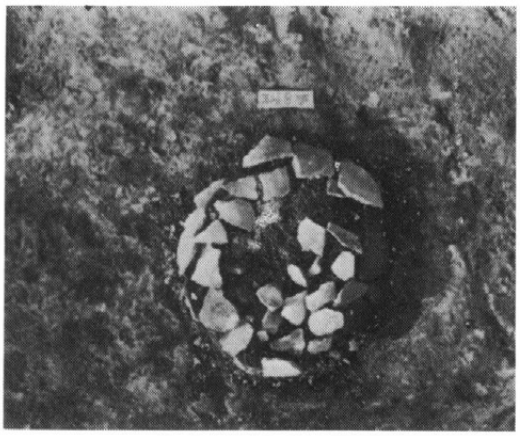


土器出土状況

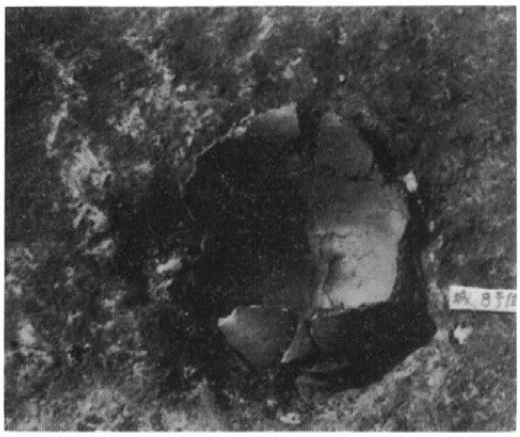


土器出土状況

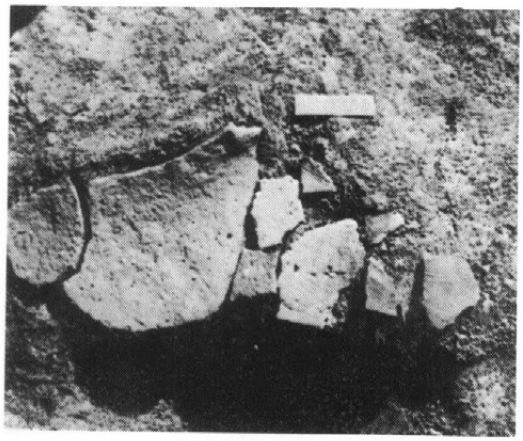
図版一六　遺物出土状況



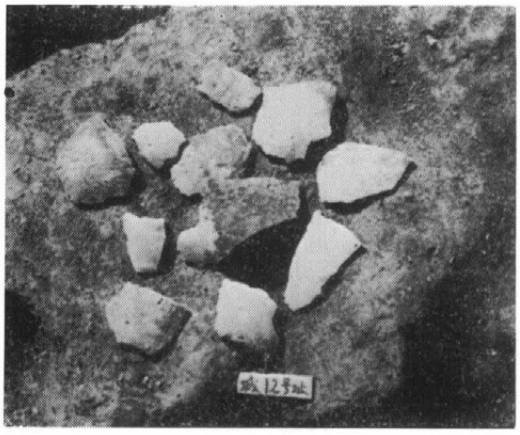
土器出土状況



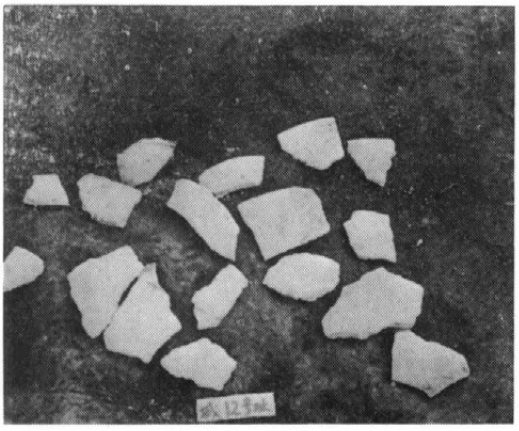
土器出土状況



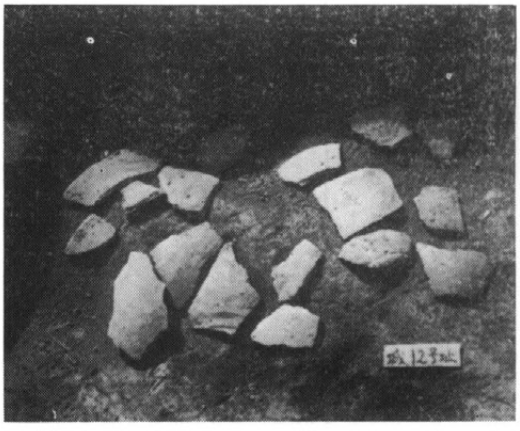
土器出土状況



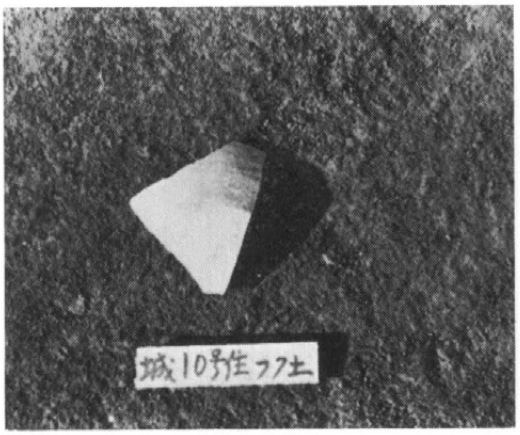
土器出土状況



土器出土状況



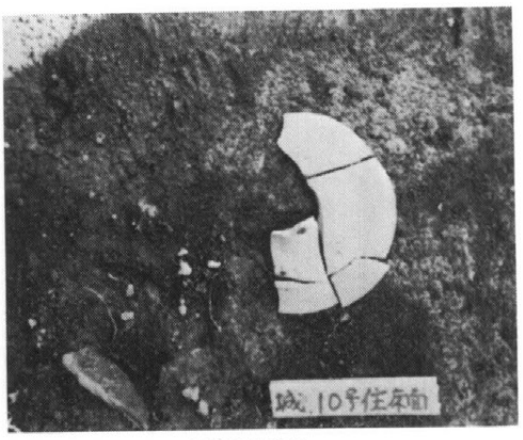
土器出土状況



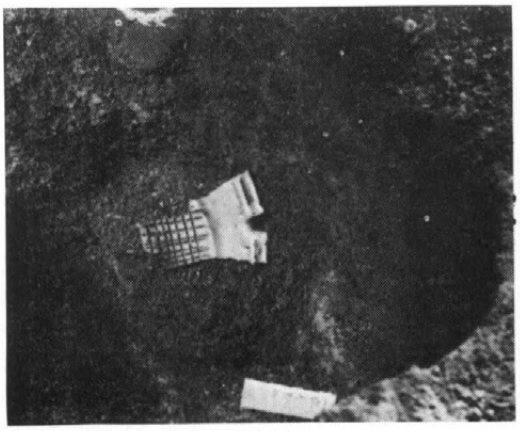
土器出土状況

土器出土状況

土器出土状況



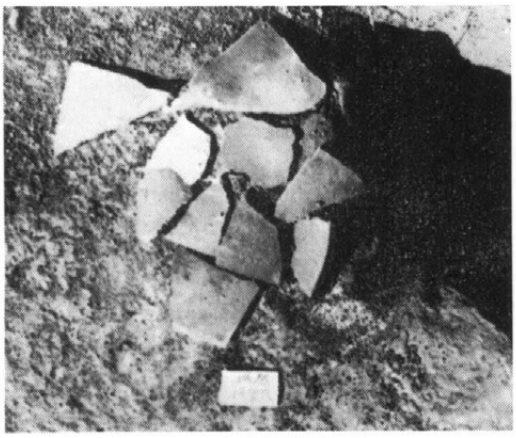
土器出土状況



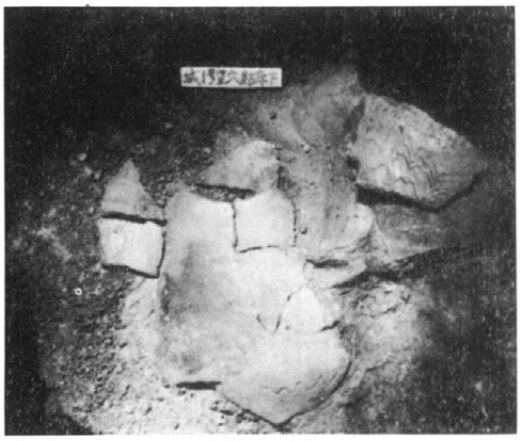
土器出土状況

土器出土状況

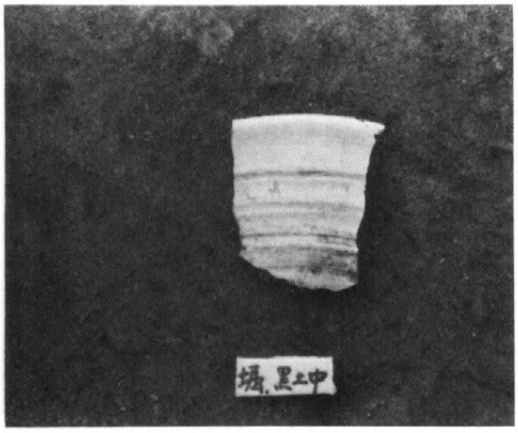
図版一八　遺物出土状況



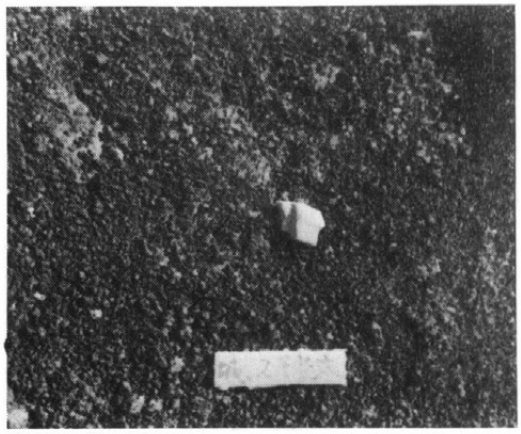
土器出土状況



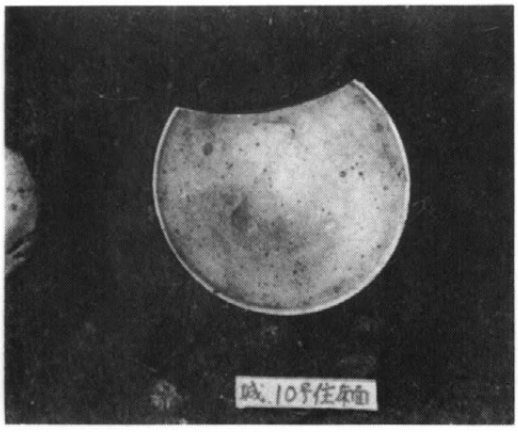
土器出土状況



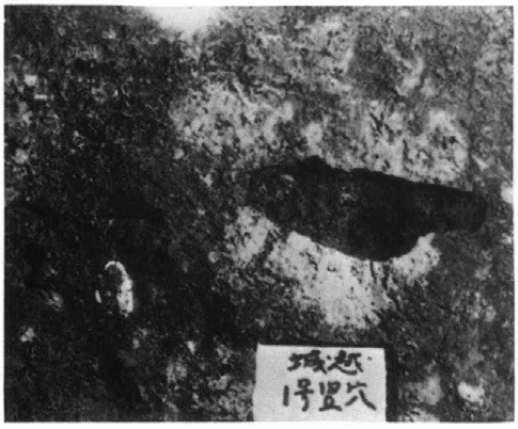
陶器出土状況



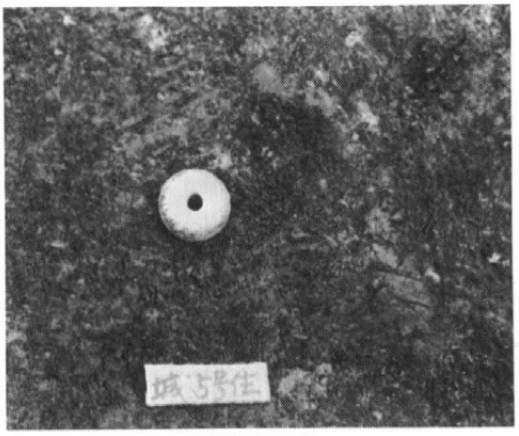
陶器出土状況



陶器出土状況



鉄器出土状況



紡錘車出土状況

紡錘車出土状況

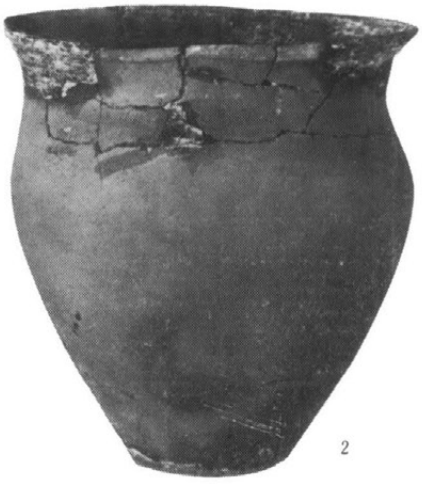
石器出土状況

石器出土状況

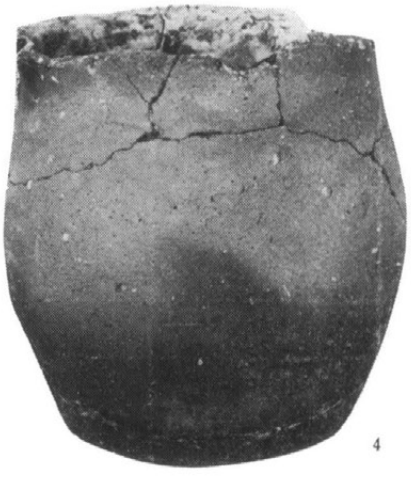
石器出土状況

図版二〇　出土土器

1


2

3


4

5

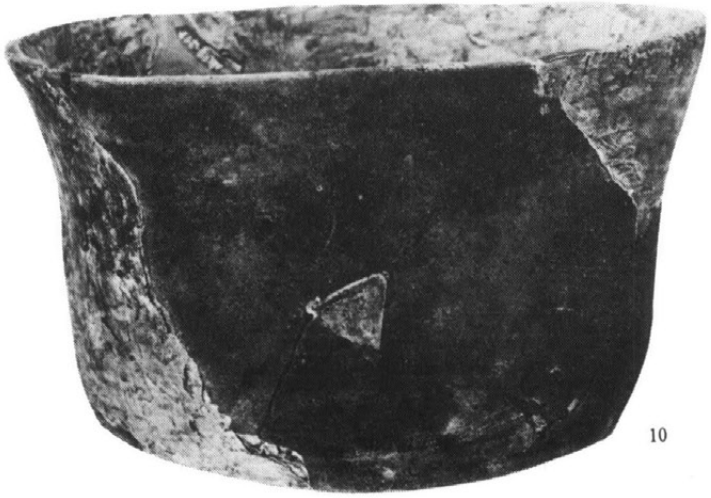
6

9住（1）　1住埋甕炉（2）　3住埋甕炉（3～4）　5住（5）　6住埋甕炉（6）

7

8

9



10

7住埋甕炉（7）　10住（8～9）　1号竪址（10）

図版二二　出土石器

図版二二　出土石器

図版二四　出土陶磁器・土製品・石製品・鉄製品

安岡城遺跡

目　　次

目　次 …… (3)
挿図目次 …… (4)
表目次 …… (4)
図版目次 …… (4)

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… (5)

第1節　発掘調査の経緯 …… (5)
第2節　調査の組織 …… (5)
第3節　発掘日誌 …… (6)

第Ⅱ章　遺構・遺物 …… (7)

第1節　中世城館跡 …… (9)

第Ⅲ章　ま と め …… (10)

挿 図 目 次

第１図　土塁及び堀址断面図 …… (7)

表 目 次

第１表　西春近城館跡一覧 …… (10)

図 版 目 次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構
図版３　遺　　構
図版４　遺　　構
図版５　遺　　構
図版６　遺　　構

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城，山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字で言う眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出，宮の原，中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢，白沢，南小出部落が，昭和54年度は諏訪形区，昭和55年度は諏訪形，井の久保部落が該当しました。

昭和57年度は諏訪形区の鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡の4カ所が該当し，工事着工以前に緊急発掘調査を実施しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では，その件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，安岡城遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかりました。

第2節　調査の組織

安岡城遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽映止	伊那市教育委員会委員長
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉俊彦	〃　社会教育課長
〃	柘植晃	〃　〃　課長補佐
〃	武田則昭	〃　〃　係長
〃	沖村喜久江	〃　〃　主事

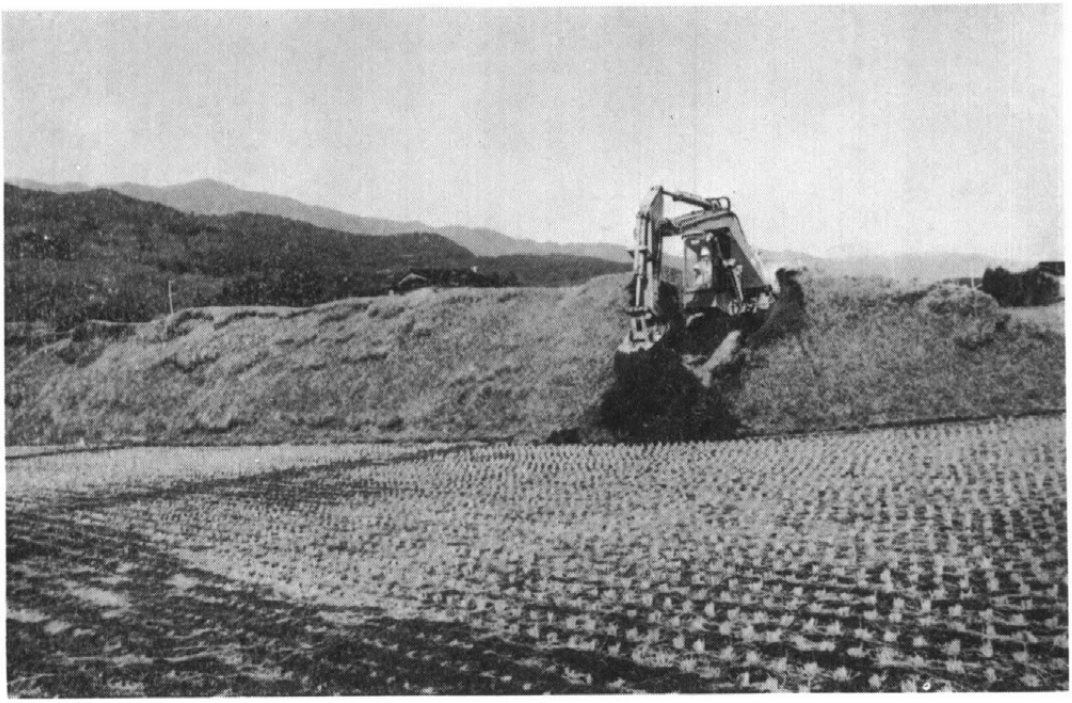
発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	日本考古学協会会員

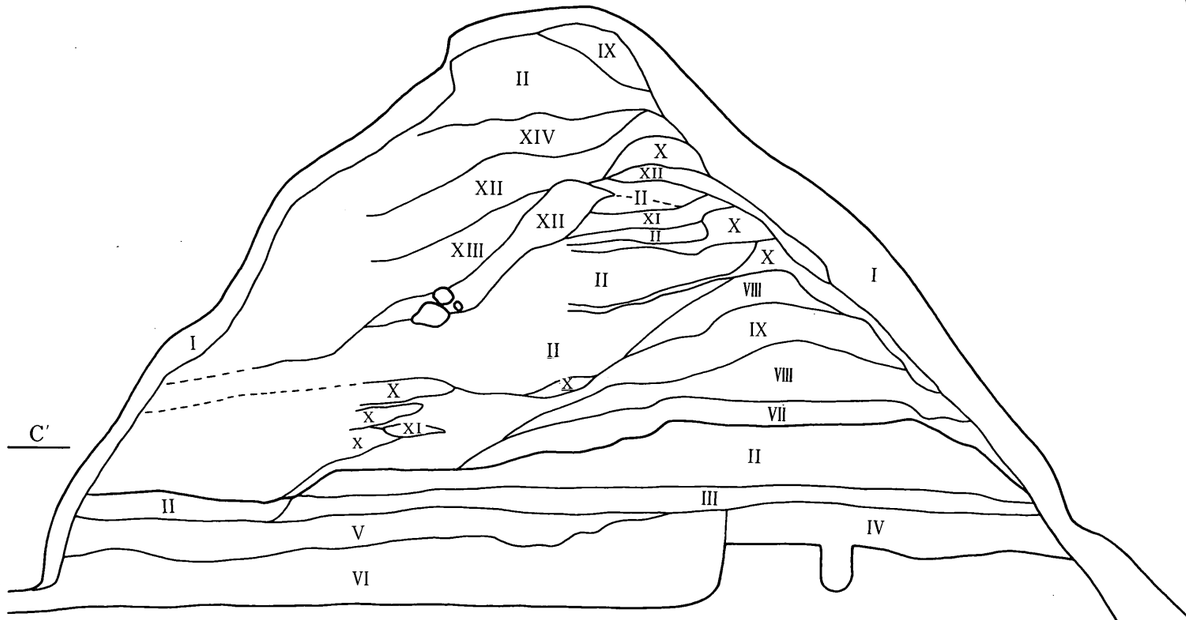
調　査　員　　小木曽　　清　　宮田村考古学友の会会長
〃　　小　池　　孝　　日本考古学協会会員

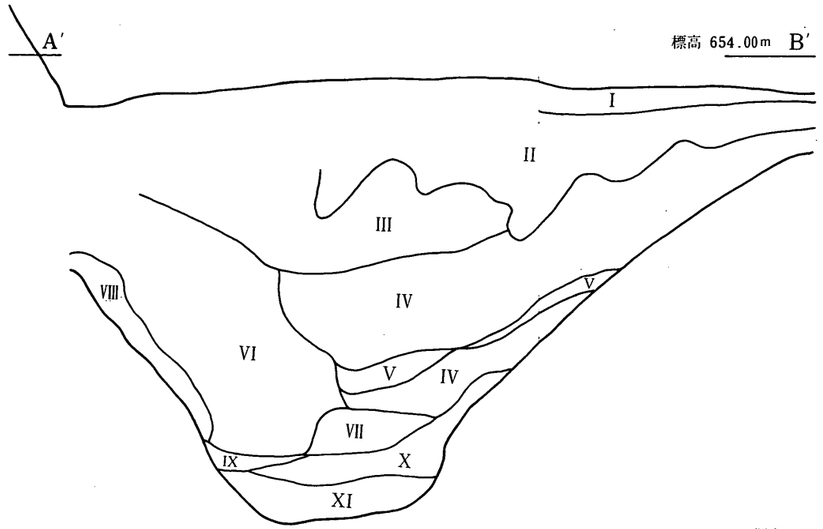
第3節　発掘日誌

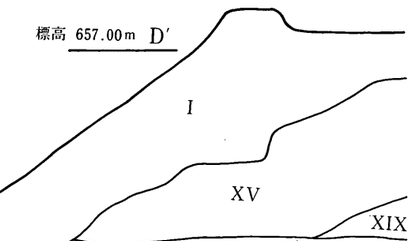
昭和57年10月13日　晴　安岡城の堀の掘り下げを実施する。
昭和57年10月14日　晴　安岡城の堀の掘り下げを実施する。
昭和57年10月15日　晴　安岡城の堀の掘り下げを実施する。
昭和57年12月７日　晴　現場にバックホーンを入れる。バックホーンによって堀の掘り下げ及び土塁を切って断面を出してもらう。土塁の断面を丁寧に仕上げる。
昭和57年12月８日　晴　前日実施した堀及び土塁の断面，堀のセクションを完掘し，それぞれ写真撮影を終了する。
昭和57年12月９日　晴　堀の断面図，土塁を含めた堀の断面図を作製する。
昭和57年12月10日　堀の全測図作製，最東側と最西側の断面図を作製する。
昭和58年１月～２月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。
昭和58年３月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）

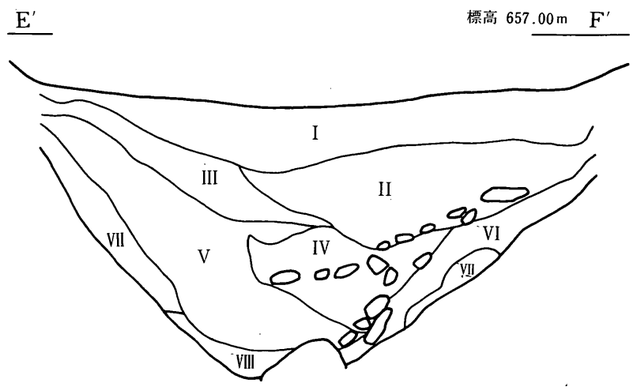


重機にて土塁を切断する

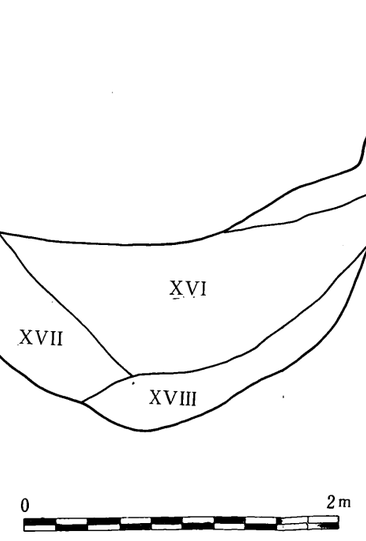








I 灰黒褐色土
II 混径10～15cm礫褐色土
III 黒褐色土
IV 混径10～15cm礫・細砂黒褐色土
V 黒色土
VI 混ローム黒褐色土
VII 混ローム多褐色土
VIII 混褐色土砂



I 灰黒褐色土
II 黒褐色土
III 赤味をおびた黒褐色土
IV 褐色味をおびた黒褐色土
V 混ローム粒黒色土
VI 混ローム粒黒褐色土
VII 混ローム黒褐色土
VIII 混ローム非常に多黒褐色土
IX 混ローム多褐色土
X 黒色土
XI 混黒褐色土黒色土
XII ローム
XIII 混ローム少黒褐色土
XIV 混ロームブロック黒褐色土
XV 混ローム・黒色土灰黒褐色土
XVI 混人頭大礫黒褐色土
XVIII 混人頭大礫黒色土
XVIII 混径4～5cm礫褐色土
XIX 混ローム多黒色土

I 灰黒褐色土
II 軟黒褐色土
III 黒褐色土
IV 混ローム粒黒褐色土
V 混ローム粒多黒色土黒褐色土
VI 黒色土
VII 混径10～20cm礫黒褐色土
VIII 混ローム多褐色土
IX 混砂礫黒褐色土
X 混礫黄褐色土
XI 混黄褐色土砂礫

第1図　土塁及び堀址断面図

第1節　中世城館跡（第1図，図版1～6）

本城館跡の全体図は前に掲載した城の腰遺跡の第1図地形及び遺構配置図に組み込んであるから，そちらを参考にして下さい。本城館跡は安岡城　別名（中村の城）と呼ばれているが，その由来は詳らかではない。西春近諏訪形　諏訪形会所の北東に位置し，平山城方形館跡の形態を有している。この城館の所有者は酒井福之亟氏である。主郭部の小字名及び地番は次のとおりである。

中村下城7447の1，2，城の腰7448の3，4，5，7448の2，荒神社7449

城郭の地形は南側では古く，太田川切川氾濫原の北限河岸段丘突端面に位置している。この段丘面に登ってみると，眼下が開け，宮田方面が一望のもとに眺められる。標高は主郭部656m，主郭部の東西の長さ77m，南北60m，面積4,406㎡，外郭部は面積約5000㎡の範囲をもっている。南側には幅の広いところで20mくらい，長さ90mくらいの帯郭がみられる。

土塁は現在は北側だけが残っているが，昭和7～8年ごろに実施した水田造成までは，北側の土塁と同じ規模で全周していたと，土地所有者の酒井氏は語ってくれた。現存の土塁は上面幅1.5～2.0m，高さ2.5～4.0m，底部の幅7～8mを測る。今回の発掘調査で土塁を切断し，その地層をよく観察してみると，攪乱土の様相を呈した層が何層にもわたってバンド層に混入しており，しかも割合に同一レベル状を呈していた。このことは構築方法に版築をとり入れていたことがうかがえる。

堀は北側の土塁直下と，東側に回っており，今回は北側の堀を発掘調査してみた。上面幅4m80cmくらい，底面幅1m前後，深さ2m80cmくらいを測定でき，やや薬研堀状を呈していた。堀に埋っていた土層は規則的なところと，そうでないところが顕著であった。そのあらわれとして，一時期に人為的に埋めたとみえて，大きな礫が混入していたところもみられた。壁面上部はソフトローム層，ハードローム層，壁面中部は砂礫層，壁面底部は味噌土が混入したローム層よりそれぞれ成り立っていた。堀の結末は城の腰遺跡で述べたとおりである。したがって，安岡城は城の腰遺跡と一体にして考えるべきであろう。

遺物―前述した開田時に土塁の南辺，地下60cmくらいのところより，室町後期ごろの古瀬戸天目茶碗2個，室町末期～安土桃山ごろの古瀬戸灰釉菊皿9枚，石臼，古銭等が出土している。これらは現在，酒井氏が大切に保管しており，頼めばこころよく見せてくれる。

以上の遺物より安岡城の存続期は室町中期から戦国時代と思われる。

今回の発掘で，わずかに数片ではあるが室町後期から戦国時代に位置づけられると思われる古瀬戸の陶器片が出土した。　（飯塚政美）

第Ⅲ章　ま　と　め

安岡城の概要については前に述べたので今回は割愛する。安岡城を含めた西春近地区で現在確認された中世城館跡を表にして記すと下記のようになる。

第1表　西春近城館跡一覧

名　称	所在地	立地・集落	形　態	主要遺構	遺物・文献	備考　城館に関した付近の小字名
下牧の古城	西春近下牧	東側は天竜川右岸第1河岸段丘面	平山式館城方形連郭式 郭は南北に細長く，大手は西側	土　塁 空　堀 人呼びの丘	下牧尾張守（大塔合戦記） 応永年中	稲荷様・荒神様・薬師堂・諏訪社・スズ竹有り 南垣外・羽場・城下・城・中村・平林・ドングリ垣外・北垣外
町屋の城	西春近諏訪形	山麓の扇状地 675m	扇状地式館城雑形連郭式	空堀・溝 井戸跡 住居址 大手門跡	中世陶磁器 古銭 内耳土器 砥石	昭和54年12月発掘調査実施 法正寺（永禄4年創立） 諏訪神社（応永年間創立） 宮田氏の居館か 広垣外・金焼場・鍛冶垣外 社宮司・南垣外・金井垣外・町屋・町屋畑・堀
中村の城（安岡城）	西春近諏訪形	南側は堂沢川右岸河岸段丘面 南向き台地突端 660m	平山式館址単郭方形 大手は西側	空堀 土塁 石塁 帯郭 井戸址 地下倉窖址 柱穴群	中世陶磁器 古銭・吹子 茶臼・焼米 木炭片 （伊那武鑑根元記）	昭和57年11月発掘調査実施 稲荷社・諏訪神社・法正寺 宮田氏の居館か 坂下・城坂・屋敷添・城・城の腰 的場・的場垣外・古屋敷・荒神社 中村・城ノ内・北垣外・飛石・清水若宮・若宮・若宮八幡宮 弥十垣外・駒垣外・春垣外
表木城	西春近表木	東側は天竜川右岸第2河岸段丘面	平山式館城方形連郭式 内郭部の西，北南側の三方は深い堀 大手は西側で土塁が切れている	空堀 土塁 石塁 井戸址	茶釜 焼米 面木氏（御符礼之古書） 文明19年	稲荷社・八幡社 法音寺（宝徳元年創立） タイホウ
物見ヤ城	西春近柳沢の西	山頂 1,125m	山城（狼煙台） 物見的な城 東側に不整形状の段がある。	土塁 空堀 段	木炭 月瀬民部（伊那信陽得替記）	

名　称	所 在 地	立地・集落	形　　態	主要遺構	遺物・文献	備考　城館に関した付近の小字名
			上伊那全域の眺望がきく。		永禄年中	大平・大洞
井の久保の城	西春近井の久保	東側は天竜川右岸第２河岸段丘面 北側は藤沢川右岸第１河岸段丘面	平山式館城 大手は西側	溝状遺構	古銭	小井弖文書のなかに「ゐの窪」の名がみえる。 小井弖氏の居館か 堀端・みさ山，坂頭，瀬戸林・大ほら・井の久保・八幡林
恩徳寺の城	西春近下小出	東側は天竜川右岸第２河岸段丘面 南側は藤沢川左岸第１河岸段丘面	平山式館城 方形連郭式 郭は南北に細長く，大手は西側	空堀	多重の鉄鏃が出土したという。	鎌倉時代中期頃に真言宗の寺であった恩徳寺があったと言う。 大徳王寺城跡の一候補地 小井弖氏の居館か 窪林・下小出・北林・唐藤沢・宮ノ前・天白平・井田・下小出原・唐沢・大道坂・藤沢・笹原
眼子田原の城	西春近沢渡	東側は天竜川右岸第２河岸段丘面 北側は犬田切川右岸第１河岸段丘面	平山式館城 西側は第２河岸段丘面へ至るまでの段丘崖になっており，一種の防衛上の自然の土塁となり，大手は西側		二階堂出雲守 弘安年中 小井弖薩摩守澤堂五郎（大塔記） 応永年中	小井弖文書のなかに「いぬたぎり」の名がみえる。 伊那青表紙のなかに「眼田村」がある。諏訪神社・稲荷社 小井弖氏の居館か 沢・沢渡・眼田・寄場・羽場先
細窪の城	西春近下島・南小出	東側は天竜川右岸第２河岸段丘面 南側は犬田切川左岸第１河岸段丘面 665m	平山式館城 単郭雑形 大手は西側	空堀 柱穴群 住居址	中世陶磁器	昭和49年５月発掘調査実施 薬師堂（文禄年間創立） 小井弖氏の居館か 犬田切・南原
丸山の城（中山城）	西春近南小出	東側は天竜川右岸第２河岸段丘面 南側は犬田切川左岸第１河岸段丘面 670m	平山式館城 雑形３連郭式 郭は東西に長く外郭・中郭・本郭の３郭よりなっている。 大手は西側	空堀 曲輪 竪穴	中世陶磁器 砥石	昭和54年５月発掘調査実施 本郭部に祠（祭神不祥）を祀る。 スズ竹有り 小井弖氏の居館か 細久保・南原・小平

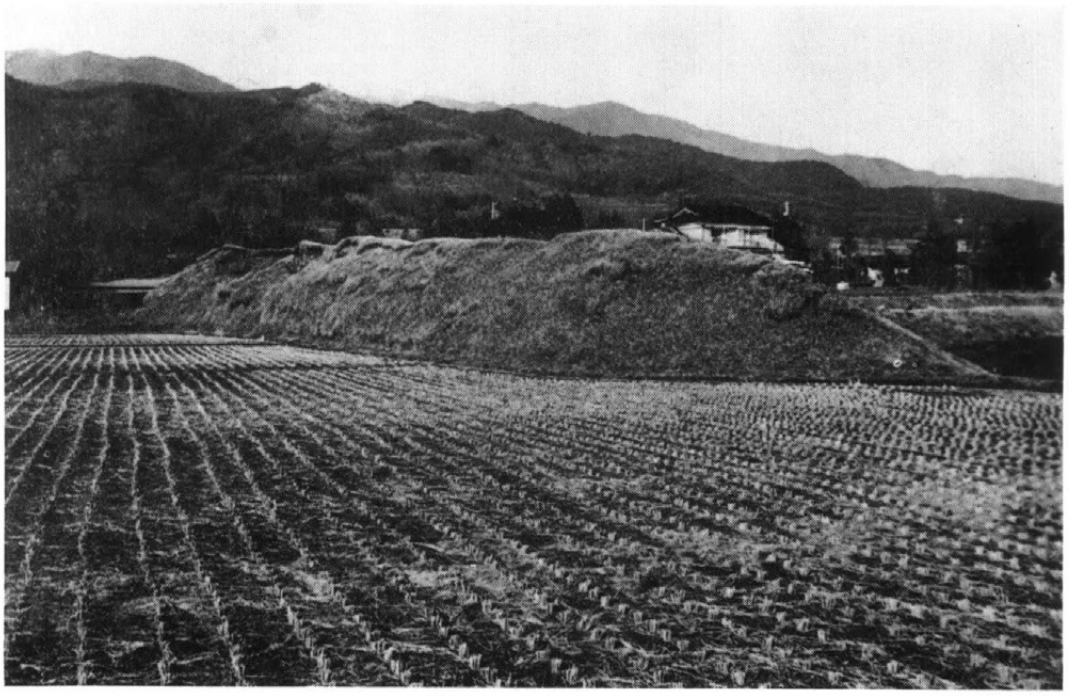
名　称	所在地	立地・集落	形　　態	主要遺構	遺物・文献	備考　城館に関した付近の小字名
薬師堂の城	西春近下島	東側は天竜川右岸第1河岸段丘面 北側は小戸沢川右岸第1河岸段丘面 648m	平山式館城 単郭雑形 天竜川との比高差30m位 小戸沢川との比高差15m位 大手は西側	空堀	青磁	薬師堂（文禄年間創立） 小井弖氏の居館か 細久保・薬師堂・小戸沢
内城	西春近南小出	東側は天竜川右岸第2河岸段丘面 北側は小戸沢川右岸第1河岸段丘面 670m	平山式館城雑形 3連郭式 郭は東西に長く外郭，中郭，本郭より成り，天竜川との比高差50m位 大手は西側	内堀・中堀・外堀 住居址・窖址・柱穴群・集石・溝状遺構・井戸・竪穴井筋	中世陶磁器 砥石・古銭 金属製品 焼米・小豆	昭和53年12月発掘調査実施 小井弖氏の居館か カン生垣外・内城・屋敷畑 久祢添・畑田・中曽根・大手町 高婦し・堀畑・前田・南原
フブキ垣外の城	西春近下島	東側は天竜川右岸第1河岸段丘面 北側は戸沢川右岸第1河岸段丘面 南側は小戸沢川段丘面	平山式館城連郭雑形 天竜川との比高差30m位・戸沢川との比高差20mくらい・小戸沢川との比高差20mくらい，大手は西側	空堀		昭和52年12月発掘調査実施 スズ竹有り 小井弖氏の居館か 小戸沢・戸沢・ふぶき垣外 戸沢日影・ふぶき畑
荒城（新城）	西春近村岡	東側は天竜川右岸第1河岸段丘面 南側は戸沢川左岸第1河岸段丘面	平山式館城方形縦横連郭式 郭が南北，東西ともにほぼ同じ規模を有す。大手は西側	内堀・外堀・土塁 曲輪・大手門跡 柱穴群 地下倉	内耳土器 中世陶磁器 石臼	昭和49年10月発掘調査実施 スズ竹有り 小井弖氏の居館か 新城・羽場
村岡の城	西春近村岡	東側は天竜川右岸第1河岸段丘面 南・北側は小河川による河岸段丘面	平山式館城雑形 連郭式 郭は東西に長く 大手は西側	空堀 曲輪	中世陶磁器 古銭	昭和49年7月発掘調査実施 スズ竹有り 小井弖氏の居館か 中小路・重家・北畑・東・羽場先・道下・久称添・日影畑・四つ長・本苗代・屋敷・屋敷裏
小出城（本城）	西春近城	南側は戸沢川左岸第1河岸段丘面	平山式館城雑形 連郭式 内郭部に土塁が残っている。	空堀 土塁 曲輪	刀 炭化物 二階堂出雲守（康安年	昭和49年8月発掘調査実施 スズ竹有り 小井弖氏の惣領家の居館か

名　称	所 在 地	立地・集落	形　　態	主要遺構	遺物・文献	備考　城館に関した付近の小字名
			自然地形を利用して鍵の手状に曲げてある。 大手は北側		中） 小出五衛門尉	堀端・屋敷添・中城・戸沢日向・西城・不動畑・トノオカ・城
田城	西春近山本	山頂	山城			犬房丸の居館伝承有り
城平の城	西春近山本	権現山麓の北端の山腹750m	根小屋城	空堀 土塁 地下倉 窖址 柱穴群	中世陶磁器 古銭・砥石 石臼・鉄片 刀子・釘 火打金具	昭和47年11月発掘調査実施 白山社(治承２年創立伝承) 小井弖氏の根小屋的な城ではないか。 城平・古堂畑・城平上
上島の城	西春近上島	北は小黒川左岸第１河岸段丘面 東側は天竜川右岸第１河岸段丘面,南は小さな沢	平山式館城 小黒川との比高差34m位 天竜川との比高差30m位 大手は西側	空堀		近くに十王堂・法眼塚 スズ竹有り 小井弖氏の北限の城か 屋敷添・道上・前田

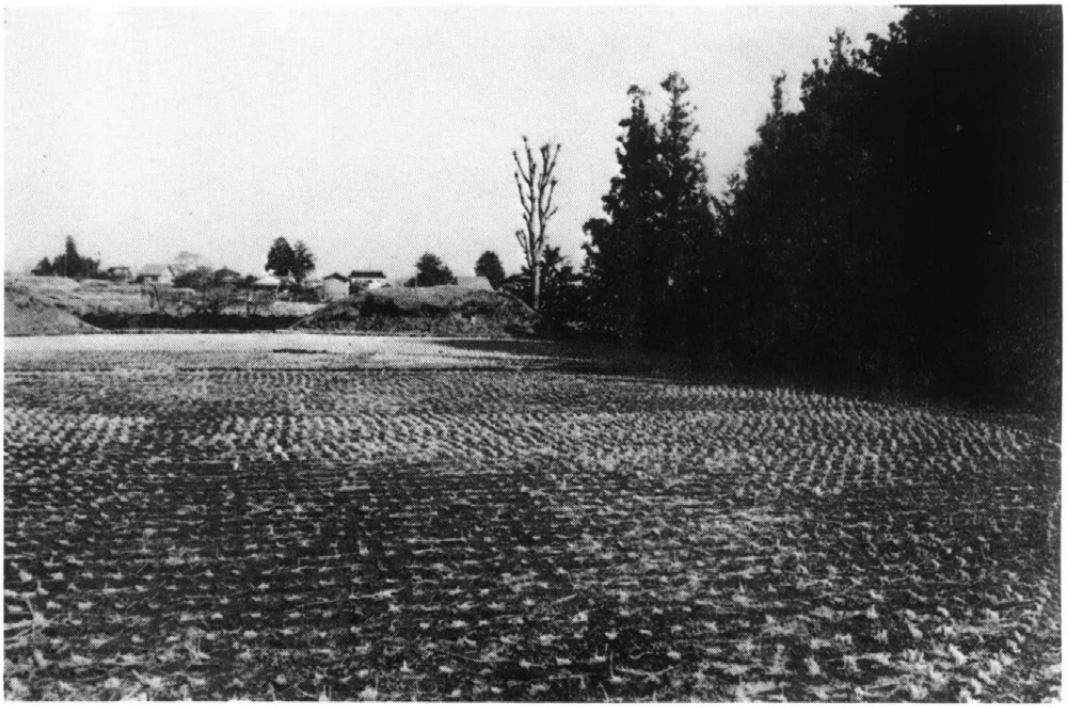
（飯塚政美）

図　版

土塁を南側から眺む



土塁を東側から眺む



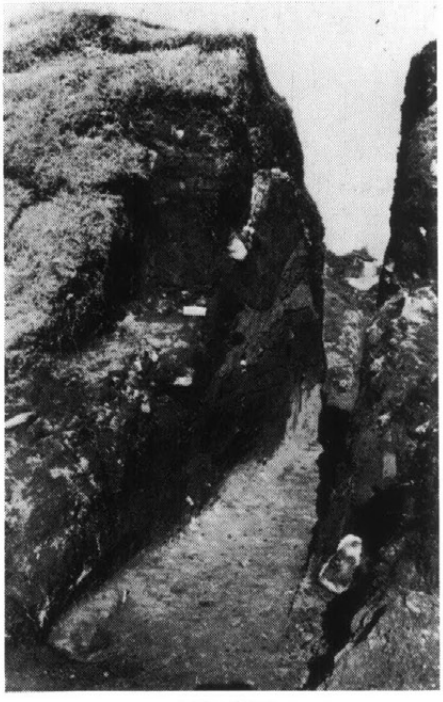
本郭部一帯

本郭の南側帯郭一帯

本郭の東側一帯

土塁内にある稲荷神社

土塁を切断した個所



土塁の断面

堀址を東側より眺む

堀址を西側より眺む

堀址断面

堀址断面

鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和58年３月７日　印刷

昭和58年３月９日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　株式会社　ぎょうせい

東京都新宿区西五軒町52

伊那市史編纂委員会